方正友好交流の会　会報 27 号　2018 年 12 月刊

星火方正

～燎原の火は方正から～

誰が満洲引揚を実現させたのか？　加藤　聖文
満州移民や中国人強制連行について留学生にどう教えるか？　高柳　俊男
国家と宗教―天理教と旧満洲との関わりについて思う―　エイミ　ツジモト
怒り憎しみと報復の連鎖を断ち切って　姫田　光義
対立・侵略・追放・和解　木村　護郎クリストフ
～ドイツ・ポーランド関係史から考える東アジアの隣国関係（下）～
民間交流を通じて、友好的な未来を促進しよう！　胡　暁慧

東京、浅草寺境内にある「母子地蔵」

浅草雷門の仲見世を通り抜けて本堂右の一角にある。手前左にある「母子地蔵建立の由来」によると、願主が中国残留孤児の国籍取得など、孤児たちを献身的にお世話された千野誠治さん。デザインは、ちば・てつや、文字は森田拳次とある。二人とも旧満州からの引揚げ者で漫画家である。「まんしゅう地蔵建立委員会」が 1997 年 4 月に建立した。

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第 27 号）　～燎原の火は方正から～

目　次

誰が満洲引揚を実現させたのか？　加藤　聖文　1

満州移民や中国人強制連行について留学生にどう教えるか？　高柳　俊男　9
―法政大学国際文化学部の SJ 国内研修について―

国家と宗教について　エイミ　ツジモト　19
―天理教と旧満洲との関わりについて思う―

・・・

怒り憎しみと報復の連鎖を断ち切って　姫田　光義　22
「日中平和友好条約」40 周年にあたり、
撫順と方正に平和と友好の歴史を再認識する

・・・

対立・侵略・追放・和解　木村　護郎クリストフ　38
～ドイツ・ポーランド関係史から考える東アジアの隣国関係～　（下）

・・

民間交流を通じて、友好的な未来を促進しよう！　胡　暁慧　49
～ハルビン市日本人残留孤児養父母連絡会訪日交流記～

旧「満州」史跡・名所をたどる平和の旅に参加して　野田　尚道　53

去る５月に中国残留孤児足跡展開催　中島　幼八　57

関連写真　59

・・・

「花がすき　歌がすき　平和がすき」　日中友好を願って加害を歌う　大門　高子　60

ありがとう飯白さん　―飯白栄助さんを偲ぶ―　大島　満吉　68

中国等残留孤児・婦人の帰国と生活支援・教育支援　宮武　正明　70
―公の記録のない 1967～1974 年の帰国者支援―

・・

大陸科学院国立奉天獣疫研究所の想い出　掛谷　敏男　81

「奉天獣疫研究所」掛谷敏夫（補足）　末広　一郎　90

・・

方正日本人公墓、その存在の意味とは・・・　大類　善啓　93

・・

「ニューヨークタイムズ」紙　方正日本人公墓の記事を掲載　寺沢　秀文　99

「ニューヨークタイムズ」２０１８年５月１８日付の記事転載　104

満蒙開拓平和記念館「セミナー棟」増築について　寺沢　秀文　105

満蒙開拓苦難の歴史　寺沢　秀文（日本経済新聞転載）　107

『大八浪開拓団写真集』発刊さる　108

・・

≪関連参考記事≫

日中の未来へ　憎しみを絶つ　朝日新聞　109

満州敗走　母子救えず　東京新聞　110

平成の天皇　満蒙開拓民にも思い　読売新聞　111

満蒙開拓団の実態調査公文書　保存と公開 国の責任　毎日新聞　112

旧満州育ちの原罪意識　山田　洋次　113

「おふくろの尊い決断」　森田　拳次　114

満州引き揚げ、一家救った中国人　ちば　てつや　115

北朝鮮　消え行く日本人の歴史　「棄民の悲劇」知ってほしい　毎日新聞　116

学徒兵の声　後世に　3395 人動員の法政大　冊子を作成　朝日新聞　117

旧満州からの日本人引き揚げを描いた中国人画家　〃　118

残留婦人と中国の性暴力被害者の歴史を見据える班忠義さん　〃　118

・・

中国語の絵物語『鑑真和尚』に想う　陳　寛　119

古代における渡来人の活躍　岩下　壽之　121

―拙著『ディアスポラ、高麗（こま）への道』刊行に寄せて―

・・

――「方正友好交流の会」へのお誘い――　方正友好交流の会　126

・・

報告／書籍案内を兼ねた編集後記　127

誰が満洲引揚を実現させたのか？

加藤　聖文

一人歩きを始めた「丸山邦雄」

2018年3月末にNHKで「どこにもない国」というドラマが2夜にわたって放映された。引揚体験者から見るといろいろと意見もあるだろうが、ドラマとしてはよく出来た内容で、放送文化基金賞奨励賞を受賞した。私も時代考証を担当したが、今回ほど史実とフィクションの境目の表現の大変さを実感したことはなかった。

このドラマは、ポール丸山氏の原作『満州 奇跡の脱出』を下敷きにしたものである。ポール氏の父丸山邦雄は自身の体験を『なぜコロ島を開いたか 在満邦人の引揚げ秘録』という著書にまとめており、それをポール氏が新たに調べたことなどを付け加えて再構成したものである。すなわち、丸山邦雄の著書を息子のポール氏が再構成して、それをドラマ化したということになる。なお、丸山邦雄と行動を共にした武蔵正道も『ユートピアをめざして アジアの曙－死線を越えて』という著作を書いているが、丸山邦雄の著作と比べると微妙な相違が見られる。

原作を基にする場合、ドラマは原作を大きく改変することはできない。もちろん時代設定を変えるとか、新しい話を挿入するといったことはありうるが、それも限度があって、過度の改変を行えばストーリーが滅茶苦茶になって原作ではなくなるし、やり過ぎは原作者への敬意を欠く行為ともなる。

したがって、原作に史実として疑問な点があっても、原作でそう書かれている以上、それを否定できないという縛りがある。例えば、丸山らの行動前に満洲引揚は決定されていて、彼らの行動はただの空騒ぎであったとか、コロ島の存在は丸山に指摘される前から米軍はとっくに知っていたなどといって原作を否定した場合、ドラマそのものが成立しなくなってしまうのである。

ドラマはドキュメンタリーではないので、基本はフィクションである。しかし、視聴者にフィクションと思われたら失敗であって、いかに本物のように伝えられるかが成否の鍵となる。これは小説も同じである。例えば、私たちの多くがイメージする坂本龍馬は、司馬遼太郎が描いたフィクションの坂本龍馬でしかない。しかし、多くの人はそのことにすら気づかない。これは小説家としては大成功であるが、物語と歴史を混同して理解してしまう思考はいかがなものか反省しなければならないだろう。

それはさておき、時代考証といえどもよほど不自然な点はともかく、原作の本筋を否定することはできない。今回の時代考証も史実と原作とがギリギリ成立するような妥協があった。視聴者はほとんど気づいていないと思うが、最後のクレジットに「丸山邦雄さんの体験に基づいて作られたフィクションです」と入れて、核心的な部分はかなり「ぼかし」

たはずであった。

しかし、このような制作サイドの細心さを視聴者がどこまで理解できたかとなると、ほとんどできなかったと思われる。事実、このドラマを機に丸山の故郷の長野県飯山市では丸山の「功績」を顕彰するため駅前に銅像を建てる事態にまで発展しているという。実像がまともに検証されないままメディアで取り上げられて有名人になってしまった杉原千畝と同じような展開になることを私は危惧する。

このまま何も言わずにいるとドラマの人物像が勝手に一人歩きを始め、後はどんな事実をもってしてもそれに疑問を呈することすら許されなくなる。

時代考証に関わった以上、責任の一端はあるので、ここでは満洲引揚について実際のところ丸山らがどこまで関わったのかを史実に基づいて明らかにしてみよう。

ウェデマイヤーの日本人送還計画

丸山邦雄の著書もポール丸山氏の著書も同じく、丸山らが決死の覚悟で満洲を脱出して日本へ辿り着き、マッカーサーに直訴した結果、満洲に残留を余儀なくされていた 170 万人を超す日本人の引揚が実行され、わずか 1 年で完了したということになっている。

ここで最初に確認しておきたいことは、丸山らが満洲から日本に辿り着き、満洲からの早期引揚実現を訴えて全国を廻ったという話は事実である。

ただし、丸山らの行動のお陰で満洲引揚が実現したという話は事実ではない。また、丸山らの前に誰も満洲の悲惨な状況を日本政府に伝えていなかったわけでもない。さらに、米軍が葫蘆島の存在を知らなかったわけでもない。しかも、マッカーサーは満洲から日本人を引揚げさせる権限はなかった。

以上の事柄について少し説明を加えてみよう。まずは満洲の日本人を引揚させる計画を建てたのは GHQ ではなく、USFCT（中国戦域米軍）という米軍の別の組織であった。

米軍は世界規模で枢軸国と戦っており、戦域ごとに米軍を展開していた。USFCT は中国軍を支援するために中国本土で展開していた部隊であり、司令部は重慶にあった。日本が降伏すると連合国は、アジアから太平洋地域にかけて展開していた日本軍の武装解除を行うために、各国軍が担当する地域を取り決めた。

太平洋地域は米軍、東南アジアは英軍、中国本土（台湾を含む）は中国軍、そして満洲はソ連軍である。また、朝鮮半島は北緯 38 度線を境界として南は米軍、北はソ連軍となったことはよく知られていよう。

これらのなかで問題となったのは中国本土であった。中国本土には敗戦時に日本軍（支那派遣軍）が 100 万人を超す兵員を擁して主要都市を占領しており、しかも東南アジアの日本軍と異なりほとんど無傷であった。一方、武装解除を受け持つ中国軍は圧倒的に劣勢であって、しかも重慶周辺の奥地に引き籠もっていた。これでは中国軍が日本軍を武装解除することは困難であったので、米軍が中国軍の展開を全面的に支援しなければならなかった。さらに悪いことに、日本の敗戦直後から中国各地で共産党軍と国民党軍との衝突が

始まっており、中国情勢は極めて不透明になっていた。

このような中国情勢のなかで 100 万の無傷の日本軍が存在することは大きな懸念材料であった。共産党軍も国民党軍も日本軍の武器や兵士を欲しがっており、国共内戦に日本軍が関与する可能性すらあったのである。実際、山西省では国民党系の閻錫山軍に現地の日本軍が協力して共産党軍との戦闘に参加する事態も起きていた。

アメリカは戦後のアジアの国際秩序は中国を中心でいこうと考えていたため、中国情勢の混乱は避けなければならなかった。なかでも USFCT 司令官のウェデマイヤーは特に危機感が強かった。

ウェデマイヤーは中国の混乱を回避するためには、無傷の日本軍を早期に武装解除して本国へ送還しなければならないと考えていた最初の軍人である。彼は日本の降伏前から米陸軍参謀総長のマーシャルと日本軍の送還計画について話し合っていた。そして、日本降伏直後から中国軍による武装解除を積極的に支援したのである。

しかし、ここで想定外の事態が発生することになった。ウェデマイヤーは日本軍兵士の送還だけを考えていたが、中国各地で日本軍を武装解除する際、軍と行動を共にしていた民間人が相当数に上ることが明らかになった。彼らを兵士と切り離して残留させ、兵士だけを送還するわけにもいかないため、結果的に民間人も一緒に送還せざるを得なくなったのである。

こうして中国軍の展開と日本軍の武装解除、さらには民間人を含めたすべての日本人の本国送還を USFCT が実質的に担うことになった。そして、1945 年 10 月 25 日から 27 日のあいだ、送還計画を具体化するために船舶を管理する米第七艦隊、兵士や民間人を受け入れる側の GHQ など米軍関係機関と中国側関係機関が上海に集まって会合を開き、「オクトーバー・プラン」という日本人送還計画が決定された。

中国本土からの日本人引揚はこの計画に基づいて実施された。しかし、問題はこの計画に満洲地域が含まれていなかったことであった。

誰も手が出せない満洲

満洲はソ連軍が占領した地域である。連合国のあいだでも満洲の日本軍（関東軍）の武装解除はソ連軍の担当とされていた。一方、中国本土や東南アジアでの戦闘の主役は米軍であったため、これらの地域における日本軍の武装解除と本国送還は米軍主導で行われた。要するに中国軍や英軍はそれぞれ担当地域があって形式的には米軍と対等の関係にあるが、実質的には米軍の指揮下に置かれていたといえる。

しかし、ソ連軍は違っていた。日本降伏の際、極東ソ連軍総司令官は連合国軍最高司令官マッカーサーの指揮を受けないとソ連が宣言、米ソは対等の関係であることをアメリカに認めさせていた。要するにソ連軍が占領した地域に対しては、米国政府も GHQ も口出しができないのである。

このような背景があるため、満洲の日本人が悲惨な状況にあることが知られたとしても

ソ連以外の国は何も出来なかった。日本人をめぐる状況の悪化は、敗戦から半月後の 9 月に入って日本政府も知るところとなった。この時はまだ占領開始前で日本の外交権があったため、日本政府は中立国のスウェーデンを通じてソ連に善処を要請していた。しかし、ソ連の反応は冷たかった。すなわち、日本はポツダム宣言を受諾した以上、主権国家ではなくなったのだからソ連政府が日本政府の要請に応える必要はないというものであった。

それでも、日本政府はなお赤十字や GHQ を通じてソ連に要請を行った。だが、いずれもソ連の態度は同じで、GHQ 経由の要請に対しては、日本人の地位は「一方的に処理」されると通告してこれ以上の要請は受け付けないと宣言、事実上満洲の日本人の運命はソ連に握られることになったのである。

このように、外交ルートを通じた要請はまったく取り合ってもらえなかったが、現地でも 9 月 5 日に関東軍が解体されたことで日本との連絡が途絶してしまっていた。そうしたなかで、元満洲重工業開発総裁で敗戦後は日本人救済総会の会長になっていた高碕達之助が、吉田茂外相と鮎川義介満洲重工業開発相談役宛てに在満日本人の窮状と早期引揚を求める「密書」を送った。高碕密書は没収を防ぐために米粒より小さい字で細い紙切れに書き込んだもので、同じ内容の手紙を朝鮮ルートと大連ルートの２つの班に分け、密使が服に縫い付けて日本へ密航して届けたものであった。彼ら密使は 9 月 22 日に出発、10 月 10 日頃に朝鮮班、続いて大連班も日本に辿り着いた。実はこれが通信途絶後に満洲から日本へ直接伝えられた最初の情報であった。なお、丸山や武蔵の著書では高碕から「懇請書」を託されたとされるが、時期も全く異なる。また、９月の密書の経緯に触れた高碕本人の著書『満州の終焉』には、密使の具体的な名前が記されているが、２月に丸山や武蔵に書を託したことは一言も触れられていない。ちなみに、この密書は現在、高碕記念館（兵庫県宝塚市）で見ることができる。

ただ、苦労して密書が届けられてもすでに日本政府は何も出来ない状況にあった。敗戦国というのは主権を失うことである。すなわち、自分たちのことを自分たちで決めることができない。すべての決定は戦勝国に委ねられる。いくら同胞が悲惨な状況に陥っていても日本人の力ではどうしようもなかった。満洲引揚に関して、日本政府は残留日本人が苦しんでいるにもかかわらず彼らを見捨てたと誤解されているが、敗戦国は助けることはもちろん、「見捨てる」という主体的な行動すらできない。つまり自らの意思では何もできない。これが戦争に負けるということである。

一方、アメリカも満洲のことには手を出せなかった。しかも当初、アメリカはその意思すらなかった。アメリカは中国本土からの日本人送還には主導的な役割を果たしたが、それは中国を一刻も早く復興させて社会を安定させるためであった。しかし、復興はあくまでも中国自らが行うものであって、アメリカはそれをサポートする役割しか考えていなかった。

実は、アメリカは世界規模で戦争を行っていたため、戦争が終わると直ちに世界各地から米国本土へ米兵を帰還させなければならなかった。また、国内世論もそれを強く求めていた。しかし、世界展開していた米軍を速やかに復員させるためには大量の船舶が必要で

あり、いくら物量豊富な米軍でも限界があった。要するに中国からも米軍を早く撤退させたかった。また、そのための船舶は用意するが、米軍用まで中国軍に提供するとか、ましてや敵国だった日本人の送還のために、米兵の帰還を遅らせてまで船舶を提供することなどあり得なかった。

この段階でアメリカは戦争が終わった以上、日本軍の問題を処理した後は複雑な問題が絡まる中国から手を引きたかったのである。

しかし、こうしたアメリカの消極的態度に対して危機感を募らせていた人物がいた。それが蔣介石であった。

蔣介石の危機感と満洲引揚の実現

蔣介石は中国の指導者として戦後復興を最優先させたかった。しかし、長期にわたる対日戦争で軍事も経済も疲弊し、共産党の台頭を許していた。しかも、国民党はこのような状況を自力で打開することは不可能であった。

蔣介石としてはここでアメリカに手を引かれてしまっては復興そのものが失敗するばかりか、自身の政治権力すら失いかねなかった。また、戦勝国となった中国の指導者として、一日でも早く日本に奪われていた満洲を取り戻し、自らの威信と国民党の政治基盤の強化を図りたかった。そのためにもアメリカの全面支援が必要だったのである。

蔣介石は米軍支援の下で国民党軍を中国全土に展開させて治安の回復を図ろうとしたが、満洲も例外ではなかった。しかし、満洲にはソ連軍が進駐していた。そこで問題となるのはソ連軍の早期撤退であった。

満洲は中国の領土なので、ソ連軍がいつまでも占領しているわけにはいかなかった。事実、日本が降伏する同時期に中国とソ連は中ソ友好同盟条約を締結、その際に日本降伏から3ヶ月以内にソ連軍が撤退することが約束されていた。しかし、ソ連軍は 3 ヶ月経っても一向に撤退する気配を見せなかった。理由はソ連が必要としていた満洲の産業施設の撤収と日本軍兵士のシベリア移送が完了していなかったからである。

ソ連はドイツとの戦いで国土が荒廃していた。人的被害も激しく、大戦に参加した国のなかで最多の 2000 万人以上が犠牲となっていたが、日本の軍民合わせた犠牲者数は 300 万人弱なのでおよそ 7 倍の差もある甚大な被害を被っていた。ゆえにソ連にとっても戦後復興は急務であった。そして、その復興を支えるものとして期待されたのが、ドイツや日本の産業施設や物資、そして軍事捕虜であった。

蔣介石はソ連軍が満洲を占領しているあいだに共産党が勢力を伸ばすことを警戒しており、一日も早く満洲へ国民党軍を進駐させたかった。しかし、軍隊輸送を米軍に頼っていた国民党軍にとって、米軍が同意しなければ満洲への進駐は不可能であった。そして、ソ連軍は米軍が満洲へ入ることを警戒していたが、米軍もソ連軍が占領している満洲に対して関わる意思はなかった。

蔣介石はソ連に対して撤退交渉を呼びかけ、具体的な撤退スケジュールを取り決めよう

とした。しかし、ソ連はなかなか交渉に応じようとしなかった。そこで蔣介石はソ連に圧力をかけるためにアメリカを利用しようとしたのである。

満洲からのソ連軍撤退問題をめぐる中ソ交渉が停滞していた 11 月 20 日、蔣介石に近かったウェデマイヤーが陸軍省に対して中国から米軍が速やかに完全撤退するか、さもなくば積極的に中国を支援して日本人の送還を完了させるかを迫った。これを受けて陸軍・海軍・国務の３長官が会合を開き、ソ連の影響力を排除するために国民党軍の満洲進駐を支援し、あわせて満洲に残留する日本人の送還が話し合われた、

実は、この時点で米国政府内部では満洲からの日本人送還を初めて具体的な議題としたのである。また、このような動きと同時に蔣介石はトルーマン大統領に対して書簡を送り、ソ連が国民党軍の満洲進駐を妨害し、共産党の勢力拡大に手を貸していると訴え、米軍の支援を強く要請していた。さらに、蔣介石は 26 日に国民党軍を錦州まで北進させて、満洲進駐の準備を整えていった。

ちなみに、この時に国民党軍は葫蘆島を占領していた。国民党は以前から葫蘆島の軍事的重要性を認識しており、前月の 10 月には米艦支援の下で占領を行おうと試みたものの、米艦が葫蘆島に接近すると占領していた共産党軍が発砲し、上陸を断念するという経緯があったのである。

すなわち、葫蘆島の存在は米軍も当然知っており、丸山に言われるまで葫蘆島の存在を知らなかったということはありえない。なお、葫蘆島について丸山の著書では日中戦争時に軍専用に作られたとしているがこれは間違いで、もともと満洲事変前に張学良が満鉄包囲計画の一環として大連に対抗するために、オランダの資本を導入して築いた港である。工事半ばで満洲事変となり満洲国時代に整備されて「壺蘆島」と呼ばれていた。したがって、満洲事変前から誰もが知っている港であって、どの地図にも記載されていた。

さて、ウェデマイヤーと蔣介石の要請によって、これまで対中国政策に消極的であったトルーマンも積極的な関与へと方針を転換した。その最初の現れが、27 日のマーシャル参謀総長の中国特派大使任命であった。マーシャルはウェデマイヤーとともに日本の敗戦直前から日本人の中国からの送還を計画していた人物であり、陸軍の実力者であった。トルーマンは大物大使としてマーシャルを中国へ派遣し、国民党と共産党の調停に当たらせて中国の安定化を図ろうとした。この時点でトルーマンは満洲からの日本人送還を決断していたのである。

トルーマンの積極的な中国政策への転換は公式には 12 月 15 日に発表された。そして、そのなかで満洲を含むすべての中国からの日本人送還が明らかになった。なお、前日には統合参謀本部によってウェデマイヤーの権限範囲が明確にされ、満洲からの日本人送還を国民党に協力して進めするとともに中国全土の復興の責任を担うことが定められた。

一方、アメリカの急激な方針転換はソ連を焦らせたといえる。ソ連は 11 月下旬になって停滞していた撤退交渉を再開、中国側が満洲進駐に協力するなら撤退時期を 1 月 3 日まで延長しても構わないと妥協したことで、急速に話がまとまった。

こうして満洲からのソ連軍撤退に合わせて国民党軍が進駐、それを米軍が支援するとい

う構図が完成したのである。そして、こういったシナリオは 1945 年 12 月には確定していた。丸山らが大連を脱出して日本に向かう 3 ヶ月も前のことであった。

丸山邦雄は何をしたのか？

丸山らがどのような経路で日本に辿り着いたかはともかく、日本で満洲残留日本人の窮状を訴えたことは事実であり、公的な記録にも残されている。しかしながら、これまで述べてきたように、丸山らが仙崎港に上陸したのは 3 月 13 日だが、すでに満洲からの引揚は決定しており、丸山上陸のわずか 2 日後の 16 日には GHQ は日本政府に対して「引揚に関する基本的指令」を出し、海外残留日本人の引揚実施による国内の受け入れ体制準備を指示している。

また、満洲では 3 月中旬になってようやくソ連軍の撤退が始まり、同時に国民党軍の進駐が行われた。国民党は満洲へ進駐するや日本人の引揚指揮監督機関である東北保安司令長官部日僑俘管理処を設置、4 月 23 日には錦州の日本人引揚が発表され、5 月 7 日から葫蘆島から最初の引揚船が出港した。

丸山が 3 月中旬に日本に渡って、東京で日本政府さらには GHQ に交渉したとなっているが、仮に丸山の熱意に動かされた GHQ（事実は満洲からの日本人引揚計画の実行はマッカーサーの GHQ ではなく、ウェデマイヤーが指揮する在華米軍によって行われた）が引揚を決定したとしても、満洲ですでに始まっていた日本人送還計画とは何の繋がりも見ることはできないし、時間的にも無理な話である。

常識的に考えれば、100 万人以上を船で日本へピストン輸送するためには綿密な計画と準備が必要である。米中の関係機関と連絡調整を行った上で、船が何隻必要で、どうやって調達するか、船員は何人確保するか、燃料をどれだけ備蓄するか、上陸港をどこに選定してどの程度整備するか、上陸した日本人の生活をどう保障するか、住宅は何棟建てる…などなど膨大な予算と施設・材料・人員を用意するには 1〜2 ヶ月程度の期間ではとても間に合わない。実際、アメリカはトルーマンの公式発表の翌月から関係機関の調整が行われ、船舶・人員の調達・施設の準備が始まっていた。ということは、引揚実施までの準備は 5 ヶ月かかったのである。

また、満洲引揚で見落とされているのは、大連に残留した日本人の引揚問題である。大連には丸山の家族も残留していたが、1946 年春の満洲からの引揚開始に大連は含まれていなかった。敗戦前まで関東州と呼ばれていた遼東半島の先端部分は、ソ連軍が占領した後、旅大地区と改称され日本人は大連に集められて生活を余儀なくされていた。旅大地区に関しては、中ソ友好同盟条約でソ連軍の駐留が認められた地域で、ソ連軍の撤退が約束されていた満洲地域とはまったく異なっていた。したがって、満洲に進駐した国民党軍も旅大地区には進駐できず、満洲からの引揚計画には組み込まれなかった。

結局、大連からの引揚は、米ソの直接交渉に委ねられ、ソ連軍に占領されていた北朝鮮および南樺太に残留していた日本人とシベリアで抑留されていた兵士の帰還とセットで

1946 年末に日本へ送還することが決定された。この頃になると冷戦の兆しが見え始めており、アメリカはソ連に対してさまざまな圧力をかけるようになっていた。残留日本人問題も外交カードになっていたのである。そして、米ソの外交交渉となると丸山らの活動は当然として、日本政府はおろかマッカーサーも関与できなかった。

このように、丸山の行動は満洲引揚実現に何の影響も与えなかった。しかし、丸山らの行動は何の意味もなかったのだろうか？

丸山らの遊説は確かに行われていた。そして、それによって満洲引揚を求める世論が高まったことは事実である。また、このような行動を GHQ も日本政府も後押しした。ということは、丸山が意識していたか否かは定かではないが、GHQ と日本政府は満洲引揚の世論形成に丸山を「利用」したといえる。

ドラマでは、すでに日本政府（吉田茂）は満洲引揚実施を知っており、丸山の行動によって引揚が実現したわけではないことを匂わせる演出をしている。ただ、この部分は、歴史的背景を知らない多くの視聴者には伝わらなかったであろう。

丸山が戦後に著書以外に自身の行動をあまり語らなかったのは、自分たちを利用した GHQ と日本政府の意図、そして自分たちの行動の意味を考えないわけにはいかなかったからではないのか。

満洲引揚は極めて高度な政治判断のなかで行われた。そして、そこに関わったウェデマイヤーや蔣介石、さらにはトルーマンにとって、満洲に残留した日本人が可愛そうだから早く本国へ帰してあげようといった感傷は一切無かった。そこにあったのは政治のリアリズムだけであった。すなわち、彼らにとって日本人が中国全土から一人残らずいなくなることが利益になると判断したからこそ満洲引揚は実現したのである。

一個人の英雄譚で片付けてしまえるほど戦争は単純では無い。戦争のおそろしさは、刻々と変化する状況のなかでさまざまな利害が絡み合いながら個人の意思や努力はまったく無力になってしまうことにある。そのことを私たちは肝に銘じなければならない。

（かとう・きよふみ：1966 年生まれ、歴史学者。人間文化研究機構国文学研究資料館准教授。著書『満鉄全史―「国策会社」の全貌』（講談社選書メチエ）、『「大日本帝国」崩壊―東アジアの 1945 年』（中公新書）、『満蒙開拓団　虚妄の「日満一体」』（岩波現代全書）、『国民国家と戦争－挫折の日本近代史』（角川選書）他）

満州移民や中国人強制連行について
留学生にどう教えるか？

―法政大学国際文化学部の SJ 国内研修について―

高柳　俊男

(1) SJ 国内研修をなぜ始めたか？

私が勤めている法政大学国際文化学部では 2012 年度以降、留学生を主対象に、夏休みに 8 日間程度の国内研修を実施している。SJ（Study Japan）国内研修と呼ばれ、研修地は長野県南部の飯田・下伊那地方。ここは 1930 年代後半から 1945 年にかけて、満蒙開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍として大陸に渡った人の比率が、全国的にみてきわめて高い地域である。

この小論では、このような研修が行なわれるに至った経緯や、事前学習授業および実際の研修において学ぶ内容を紹介するが、とりわけ満州移民や中国人強制連行についてどう教えているか、また留学生たちがそれをどう受け止めているか、という点に焦点を当ててみていきたい。

法政大学国際文化学部は 1999 年、従来の教養部の一部を改組する形で誕生した。その際、学部創設の目玉として打ち出したのが SA（Study Abroad）で、在籍する全学生が二年次後期に 4 カ月程度、自分の履修する外国語に基づき、海外の協定校に留学する制度である。学部生全員が海外で異文化体験をするこの SA 制度は、当時としては画期的なもので、その後、立教大学や早稲田大学なども類似の制度をもつ学部を新設するに至った。

一方で、その制度がむしろ足枷になって当初手が付けられなかったのが留学生の受け入れだった。なぜなら、たとえば韓国人が中国に行きたいという場合、「外国語」として履修すべき科目は日本語、英語、中国語となり、2 言語履修を前提としてつくられた現行制度とうまく符合しなくなるからである。このため、学部創設時にはしばらく後回しにした留学生制度であったが、その状態が改善されずに続き、さすがに外部評価などでも「外に出て行く SA に比して、全員を留学させておきながら、外からの留学生は受け入れないのでは、内に国際的な要素がない」などと、厳しい指摘が寄せられた。

その問題を検討する会議で、ある教員から、「留学生は日本に来ていること自体が SA なのだから、SA の代わりに国内研修をやろう、場所は長野県飯田市がよかろう」という提案があった。つまり、留学に来ている日本を、単に東京だけの視点で見て事足れりとするのではなく、東京とは異なる風土・歴史・文化をもつ地方に行き、そこでの実地体験を経る中で、日本を多面的に認識するような研修こそが留学生に必要ではないかという主張であ

る。研修地として飯田市が候補に挙がったのは、同市には人口 10 万程度の市としては珍しく、市立の歴史研究所があるが、同教員が外部評価委員などとしてそこと関わりを持っていたからである。ただし、彼は定年退職を目前に控えており、研修を具体化する作業、すなわち何を研修のテーマとし、どんな事前学習をするのか、研修ではどこに行って何を見るのか、などのプログラム策定の一切の作業は、その会議を主宰していた私の手に委ねられた。

(2) 研修で何をテーマとすべきか？

私個人は栃木県北部の農村地帯の出身であり、日本＝東京というような見方には違和感を覚えていたので、この提案には賛成だった。また、かつて 1990 年代、浜松の清川紘二さんが主宰する「満蒙開拓団」調査研究会に加わって、飯田市に出かけたこともあったので、飯田・下伊那はまったく未知の場所ではなかった。とくに飯田日中友好協会の寺沢秀文さんや小林勝人さんなどとは、同じ訪中団で一緒に旧満州への旅に出かけた間柄でもある。とはいえ、その関係がずっと続いていたわけではないし、また 8 日間にも及ぶ現地研修プランを組み立てるとなると、話は別である。研修では何を見学し、レクチャーを誰に依頼したらいいのだろうか。

「まずは短期間の研修を試してみてはどうか」という歴史研究所側のアドバイスに基づき、2010 年度と 11 年度の 2 年間、3 泊 4 日のプレ研修を実施した。その際、見学地候補を決める際の柱としたのが、学部名に含まれている「国際」と「文化」、それに自然との共存である。

「国際」では、飯田・下伊那の民族間関係の歴史と現在を中心に据えた。一見すると、長野県は内陸なので外国との関係が薄いのではないかと思われてしまいがちだが、満蒙開拓団・満蒙開拓青少年義勇軍やブラジル移民などとして、多くの住民が海外に移住した歴史をもつ。逆に、山間部の山仕事やインフラ整備などのために朝鮮人や中国人、さらには欧米人の戦争俘虜がこの地で自主的ないし強制的に労働を提供した。そうした人の移動の歴史に光を当てることが大事ではないか。異民族という点では、飯田線の建設に当たって、朝鮮人労働者のほか、アイヌ出身者の測量士で山地の測量技術に長けたカネトをはじめとするアイヌの人々が大きな役割を果たしたことも、当地にとって欠かせない史実である。

「文化」では、人形浄瑠璃や農村歌舞伎などの伝統文化の存在と、それが飯田人形劇フェスタなどの新しい文化創造につながっていることに興味をもった。同時に、童画と写真でむらの生活を記録し続けた阿智村の熊谷元一のように、いわば「こだわりの人士」が文化伝承に果たしている役割に着目した。というのは、「どうでもいい」ではなく、こだわりをもたないと、文化はやはりつながっていかないからである。

自然との共存では、実際に農業体験を取り入れたり、地域活性化の現場を見たり、豊か

な自然という好条件を利用したグリーンツーリズムについてのレクチャーを受けたりした。

これら三本柱はその後、たとえば第二点では地元の高校生と交流し、ともに地域文化の伝承を考えたり、第三点ではこの地で欠かせない存在になりつつある地域おこし協力隊などとの連携が深まるなど、各種の進展を見ているが、大きな骨組みは当初打ち出したものから変化していない。

(3) 事前学習授業をどんな構成で行なっているか？

2 年間のプレ研修での経験を経て、いよいよ 2012 年度から本研修が始まったが、初年度から幸い、事前学習を 1 コマ、正規の授業として立ち上げることができた。同時に、研修に参加する留学生や一般学生は、事前学習授業の履修を必修と定めた。

大学では各種の研修が行なわれるが、実は事前学習をどの程度行なってから現地に赴くかという点が決定的に重要である。とくに短期間の研修の場合、それがないと単なる物見遊山となり、「自然がきれいだった」「食べ物が美味しかった」といった、表面的な感想で終わる恐れがある。眼前に見えるものだけではなく、一見見えないものをどう認識していくかが、大学生として本来あるべき真の学びであろう。そのためには事前学習をしっかり行い、現地の特徴や抱える課題を見定め、それに自分としてどう切り込んでいくかを考えながら現地に赴く必要がある。

事前学習授業の実際は、シラバスからその部分を抜粋して一覧表にした＜第 1 表＞をご参照いただきたい。全 14 回の授業を、地域の概況や通史をざっとたどったあとで、飯田線建設史 2 回、満蒙開拓をはじめとする異民族との関係 4 回、そして文化関係 3 回、自然との共存 1 回で構成している。

ここではそのうち、満州移民や中国人強制連行などについて中心的に述べていきたい。

満州移民については全 3 回を充て、詳しく扱っている。第 1 回目は経済的・軍事的意図をもって遂行された満蒙開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍に関して、その概況を学ぶ。飯田市歴史研究所編の『満州移民：飯田下伊那からのメッセージ』や飯田市が発行した中学生向けの郷土史副読本などの記述も使いながら、満州移民の計画・実行段階から、戦後の死の逃避行、いわゆる中国残留孤児・残留婦人の発生、そして戦後開拓に至るまでの歴史を、トータルに取り上げている。とくに長野県、なかでも飯田・下伊那地方に渡航者が多かった事実に着目させている。

第 2 回目は、映画『蒼い記憶』の鑑賞を通して、この問題を再度、具体的に考察している。このアニメは、まさきまきの同名マンガをもとに、満蒙開拓青少年義勇軍をテーマにつくられたもので、なかなかの出来栄えである。とくに中国人側の視点を取り入れ、大陸雄飛を夢見て渡航した少年たちが、現地での現実に接する中で、自分たちが歓迎されざる者としてここにいる事実に徐々に気づいていく展開が巧みである。映画の中で登場する日

本体操（やまとばたらき）や青少年義勇軍の歌については、当時の新聞記事や楽譜を資料として引用して補足している。

第 3 回目は、これら 2 回の学習を踏まえて満州移民の現在、すなわち飯田・下伊那の人々が、この過酷な歴史をどう後世に伝えようとしているのかを探る。なかでも阿智村に民間でつくられた満蒙開拓平和記念館の運動や、それ以前から残留孤児の肉親捜しに尽力し、「残留孤児の父」 とも言われる阿智村の長岳寺住職 山本慈昭を大きく取り上げている。山本慈昭の項では、彼が自らの肉親も含む中国残留孤児の問題を中国側に提起するためには、まず平岡ダムの犠牲者など、戦時下にこの地に強制連行され命を落とした中国人の調査や遺骨返還など、日本側がやるべき責任を果たすことが先決だとの認識に至った点を強調している。この姿勢は満蒙開拓平和記念館の運動にも継承され、同館はたとえば水戸市にある「内原郷土史義勇軍資料館」などとは違い、満州移民の「被害」だけではなく、むしろ「加害」の面を大きく取り上げ、その「負の歴史」への直視を通じて中国との友好や相互理解を図ろうとする意図が明確である。そのことのもつ意味を、別途配付する同館の寺沢秀文館長のインタビュー記事「不都合な歴史も明らかにし学ぶ」（『東京新聞』2015 年 5 月 10 日付）などをもとに考えさせている。

第 3 回目ではほかに、中国帰国者としては例外的に公立学校の教師となった大橋春美さん（中国名：趙春艶）についても取り上げている。両国のはざまで自らのアイデンティティーに思い悩みながらも、双方をつなげるべく前向きに生きている二世の大橋さんと、息子で三世の遼太郎君。この二人を取り上げたテレビ番組『遼太郎のひまわり～日中友好の明日へ』を見せながら、満州移民がもたらした別の課題にも目を向けさせている。

「飯田・下伊那の多民族共生の現在」と題された次の回では、現在この地に住む外国人の実態や多文化共生をめぐる施策全般を取り上げているが、その中には満州移民の歴史と絡む内容も少なくない。たとえば、飯田市には中国帰国者を主対象とするデイサービスとして、10 年以上の歴史をもつ「宅老所ふれあい街道ニイハオ」と、認知症の利用者を念頭に置いた「羽場赤坂デイ」が民間で活動しており、それらをつくった人々の熱い想いを紹介している。

この回ではほかに、この地における中国人や朝鮮人、欧米人戦争俘虜の強制連行・強制労働についても取り上げている。代表的なものが天龍村の平岡ダムで、中国人犠牲者については戦後初期からの日中友好運動の中で取り上げられ、ダム湖畔に 1964 年、立派な追悼碑が建立、その後も定期的に慰霊法要が行なわれている。一方の欧米人俘虜に関しては、その監視員として動員された村人が戦後は戦犯とされ、死刑になった重たい歴史から、この問題から目を背ける傾向があった。しかし天龍村は 2000 年、村としていつまでもタブー視はよくないとして、捕虜の宿舎跡に追悼碑を設置、同時に村誌に平岡ダムの建設史に関して一章を割いて詳述し、この問題に一つの決着をつけた。小さな村におけるこの特筆す

べき取り組みについて、注目させている。

ほかにも、この地域には1920年代頃から朝鮮人労働者が流入したことで、山仕事に使う朝鮮式のしょいこ（編集部注：背負子、荷物を背中に括りつけて背負う運搬具）が普及し、戦後に至るまで便利だとして真似して作られ使われたこと、肉をタレに漬け込んで焼く方法を朝鮮人から教わり、それが現在の「日本一の焼肉の町 飯田市」の源流の一つとなっていること、などにも触れている。

(4) 現地研修ではどんな活動をしているか？

これらの事前学習を経て、8日間程度の現地研修に出ているが、そこでは実際にどこを訪れ、何を見て、現地のどんな人々と交流しているだろうか。

＜第2表＞は、2018年度の実際の研修スケジュール表である（大型台風の通過とその余波のため、最後の3日間は変更を余儀なくされた項目あり）。これをご覧いただければわかる通り、事前学習の柱に基づき、現地で実際の現場を訪れたり、関係者と交流することを通じて、認識をさらに深められるようなプログラムを組んである。

満州移民や中国人強制連行などについて触れれば、2日目の午後に、阿智村の長岳寺と満蒙開拓平和記念館を見学している。趣旨はいずれも、事前学習の項でみた通りである。

その晩には満蒙開拓平和記念館関係者、具体的にはスタッフ・ボランティアや体験者などとの懇親会を入れているが、この交流は記念館の建設以前から毎年組み入れているものである。参加する留学生にすれば、昼間見学した記念館を実際に運営している人たちと交流できるかけがえのない機会だし、記念館側にとっても展示が外国人、とくにこの問題と直接関係する中国人の若者にどう受け止められているかを確かめうる、貴重な場になっていると思われる。

翌3日目の午前中は、中国帰国者を主対象とするデイサービス「ふれあい街道ニイハオ」（鼎切石）を訪問する。施設長からまず設立の経緯について伺ったあとで、中国帰国者を中心とする利用者と交流する。具体的には、施設の指導員にしたがって一緒にリクリエーションをしたり、施設側で作成した日中両語による歌集をもとに、カラオケで歌を歌ったりなどしている。利用者の中には、日本語がかなり達者な人もいれば、長年にわたる中国生活の中でほとんど忘れている人、さらには帰国日本人の配偶者として来日した中国人もいる。留学生の中に中国人学生が含まれ、中国語を使っても交流できることは、相互にとって有益である。

その日の午後は、白山町にある日本語教室「Hand in hand 和楽」に参加する。飯田市内には、公民館で実施されているものを含め、外国人を対象とした日本語教室が複数あるが、中国帰国者がどの程度含まれるかは、施設によって異なる。ここの「Hand in hand 和楽」は、労働や結婚で近年日本に来るに至った外国人の比率が高いが、中国帰国者にももちろ

ん門戸は開けてある。おやきと雑貨の店を営む座光寺良子さんが店の 2 階を提供し、吉澤裕美子さんをはじめとするボランティアの皆さんの献身的な努力で、民間で活動が続けられている。学ぶ外国人の国籍が多岐にわたり、人数も多くて、活気あふれる場である。

4 日目からの下伊那郡下への一泊旅行では、初日に天龍村に行き、平岡ダム建設で亡くなった中国人の火葬場跡、日中友好運動の中で作られた中国人追悼碑、巨大な平岡ダムそのもの、会社建立の慰霊碑、そして欧米人戦争俘虜の追悼碑などを順次見学している。

以上はあくまでも今年度の研修内容だが、年度によってはさらに別の箇所を訪問するなど、内容に若干の変動がある。たとえば、これまで一回以上実施した関連項目を挙げれば、飯田市や喬木村・泰阜村で満州移民関連の慰霊碑類を見学した。年によっては、ふれあい街道ニイハオではなく、羽場赤坂デイのほうを訪ねたこともあったし、参加者の多くが集団自決した河野村開拓団で九死に一生を得た久保田諫さんの体験談を直接伺ったこともある。語り部として、この悲惨な歴史を後世に語り継ぐことを使命としている久保田さんの体験談には、文字通り圧倒される。

研修では、以上の満州移民や中国人強制連行関連以外にもいろいろな場所を見学しているが、詳しくはスケジュール表を見ていただくことにして、ここでは省略したい。

(5) おわりに―留学生の日本認識

以上、法政大学国際文化学部の SJ 国内研修について、ざっと追ってきた。事前学習授業と現地研修を経て、留学生の認識はどう変わるだろうか。

もちろん、一口に留学生といってもそれぞれ異なる背景をもって生きてきた人たちなので、その認識も個人によって異なるのは言うまでもない。ただし、一般的に言えば、「行って良かった」という声は少なくない。正直に言うと、「留学生は SJ 国内研修が必須、研修地は長野県南部」と知って、最初落胆する人も存在する。国際文化学部の研修なので、京都や奈良、あるいは沖縄などに行けるのではないかとの期待があり、「なんで長野に？」というわけである。しかし、終わると認識はある程度変わり、「自然が美しく、食べ物も美味しく、人情が厚い長野に行けて良かった」「自分では決して行かないであろう場所に行き、日本を多面的に知る契機になった」などの感想がよく寄せられる。

肝心の満州移民や中国人強制連行などについては、どうだろうか。こういう内容の研修をやっていると人に告げると、「微妙で難しいテーマなのに大丈夫か？」と、ある種の懸念を抱かれる場合がある。つまり、日本の侵略や日中の過去の衝突を扱うことが、いっそうの対立の火種を生むことにならないか、日本嫌いを募らせることにならないか、という不安である。

その気持ちはわからないでもないが、私はここ 8 年間の経験から、そのような心配は杞憂であると言いたい。いまの若者は、中国であれ、韓国であれ、自分を国家と完全に一体

化して物事を眺めているわけではない。国家への信頼や誇りは当然ありながらも、同時に冷静な目も持ち合わせている。また、日本に対しても、「侵略者」として固定的にみるのではなく、過去は過去として捉え、その上で好ましい現在や将来をつくるべきパートナーと考える。日本に留学する人々には、とりわけその傾向が強いように思われる。

そして何よりも、人として、個人として考える感性を持ち合わせている点も指摘できるのではないだろうか。国家や民族を背負った国民としてではなく、生活者としてのふつうの人間の視点である。客観性をもたせるため、SJ 国内研修を取り上げてくれた新聞記事から引用すると、プレ研修に研修生として参加した中国人の林丹さんは、「最初は開拓という言葉を聞き、侵略の間違いではないかと憤ったが、日本にも国策によって犠牲者となった多くの市民がいたことを知り、深く考えさせられた。平和を願う気持ちを互いに大切にできれば」(『南信州新聞』2011 年 9 月 9 日付) と心情を語った。平岡ダムの外国人強制労働について個人発表した中国人の区小勤さんは、「天龍村の人がマイナスの歴史に直面し、語り続け、より多くの人に知ってもらおうとしている姿勢に感動した」(『信濃毎日新聞』2014 年 9 月 11 日付) という。満蒙開拓や残留孤児について調べた韓国出身の禹尚秀君も、研修での発表を「歴史は決して恨みを深めるためにあるのではない。忘れないことが大切」(同前) と締めくくった。

私が研修やその事前学習授業で満州移民や中国人強制連行などを大きく取り上げているのは、そのような事実が存在したこともちろんだが、同時にその事実から目を背けず、その「負の歴史」をよりよい未来の構築のために活かそうとする地元の方々の営みに心打たれるからである。前述したように、5 年前に民間で満蒙開拓平和記念館をつくったのは、満蒙開拓にまつわる「加害」と「被害」の歴史の総体を語り伝え、そのことで新たな交流や友好の発信基地にすることを目指した、地元の志ある人々である。欧米人俘虜への過酷な待遇により、戦後は逆に監視に当たった村人が「戦犯」として死刑になる歴史をもつ天龍村は、欧米人捕虜の追悼碑を建て、村誌に平岡ダム建設における外国人労働の歴史を詳述することで、過去を直視する態度を示した。こうした、東京などの大都会ではおそらく不可能な取組みが、長野県の山間の小さな村で実現していることが意味するものは決して小さくないのではないだろうか。

こうした史実を取り上げると、「自虐史観」というような非難もあるが、私にとっては日本の悪をことさら強調するのが目的ではない。繰り返しになるが、国家としては過去の清算に未解決の部分があっても、民間で、あるいは地方の自治体で過去に真剣に向き合おうとしている営みにこそ着目したいがためである。

そして、この「負の過去」といかに向き合うかという課題は、日本のみならず中国、韓国、いやどこの国でも解決を求められるものではなかろうか。そういえば、授業で平岡ダムにおける外国人強制労働の歴史と正面から向き合う天龍村について扱ったところ、リア

クションペーパーでその姿勢を評価するとともに、「中国政府も天安門事件に対してそうした態度をみせてほしい」とコメントした中国系の学生もいた。どんな国家、組織、そして個人でも、誇らしい過去もあれば恥ずかしい過去もある。それぞれが栄光の過去だけを強調し、他者を過度に非難するのではなく、お互いが自らを謙虚に見つめる中から、真の対話や交流が可能となるのではないかと私は信じたい。

この研修が、留学生たちにとって、そうした普遍的な課題を考える契機になっているとすれば、担当する者としてやはりうれしい。実際には、研修の実施には多くの手間がかかり、厄介な事案が発生することもままあるが、交際貢献もこうした小さなところから始まるとすれば、今後とも来たるべき定年まで微力を尽くし続けたいと思う。

※筆者はすでに以下を書いていますので、より詳しくはこれらをご参照ください。

①「留学生を主対象とする国内研修実現への歩み―法政大学国際文化学部の教育実践の記録として」(熊田泰章編『国際文化研究への道：共生と連帯を求めて』、彩流社、2013年)

②「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために―国際系学部の事前学習授業の実際から」(大学連携会議「学輪 IIDA」機関誌『学輪』第2号、2016年)
http://gakurin-iida.jpn.org/archives/1530/でも閲覧可。

＜第１表＞　SA 事前学習授業内容（2018 年度）

回数	テーマ	学習内容
第 1 回	導入	本授業と「SJ 国内研修」の概要を説明する。受講希望者数によっては、選抜を実施することもあるので、初回の授業に必ず出席する こと。
第 2 回	飯田・下伊那の概況①	飯田・下伊那地域にある 1 市 3 町 10 村について、行政区分、地形、気候、交通、物産などの概況をみていく。天竜川の果たした役割、愛知県東部・静岡県西部との県境を越えたネットワーク（三遠南信）についても考える。
第 3 回	飯田・下伊那の概況②	前回に続いて、飯田市の成り立ちを考える。1937 年に成立した当初の市域に、1950 年代以降、周辺の 15 の自治体が合併していまの飯田市が形成されていることの意味、言い換えれば飯田市の統一性と多様性を具体的に考察する。
第 4 回	飯田・下伊那の歴史	飯田・下伊那地域が経てきた歴史の概要を、古代から現代まで通史的に学ぶ。戦後史部分では、飯田市のアイデンティティーの根幹にも関わる飯田大火、りんご並木、三六災害について知る。
第 5 回	飯田線建設史①	現在のＪＲ飯田線、とくに旧三信鉄道の建設史を、アイヌの測量士 カネトや朝鮮人労働者に焦点を当ててみていく。飯田駅前に記念碑が建つ伊原五郎兵衛についても知る。
第 6 回	飯田線建設史②	前回学んだカネトについて、近年、住民自身により飯田線沿線各地で上演されている合唱劇『カネト』を DVD 鑑賞しながら、再度考える。
第 7 回	満州移民の歴史①	1930 年代以降、この地域から多数渡って行った満蒙開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍について、その史実と背景を学ぶ。
第 8 回	満州移民の歴史②	前回学んだ満蒙開拓青少年義勇軍について、そのテーマでつくられたアニメ『蒼い記憶』を DVD 鑑賞しながら、再度考える。
第 9 回	満州移民の歴史③	現在、この地域の人々が、満州移民の歴史やその結果として生まれたいわゆる中国残留孤児・中国帰国者のことを、どう後世に伝えようとしているかを、阿智村に開館した満蒙開拓平和記念館などを例に探る。また、「残留孤児の父」 と称される阿智村の長岳寺住職、山本慈昭について知る。
第 10 回	飯田・下伊那の多民族共生の現在	外国人が増え、市として外国人集住都市会議に参加している飯田市における外国人の実態や、国際化・多文化共生の取り組みについて考察する。平岡ダム建設における外国人労働の歴史を、後世に正しく伝えようと努める天龍村の姿勢についても、あわせて考察する。
第 11 回	飯田・下伊那の文化①	人形浄瑠璃や歌舞伎など、この地域に残る各種の伝統民俗芸能や、それをもとにした現在の文化イベントについて知る。とりわけ、飯田市内にある黒田人形・今田人形について、映像で確認する。
第 12 回	飯田・下伊那の文化②	この地域の特色ある文化活動として、70 年以上の歴史を誇る郷土雑誌『伊那』の発刊や、活発な公民館活動について知る。あわせて、写真や童画で庶民の生活を記録してきた阿智村の熊谷元一についてもみていく。
第 13 回	飯田・下伊那の文化③	この地域ゆかりの文化人のうち、法政大学で学んだり教えたりした経験をもつ椋鳩十・西尾実・森田草平の 3 人について、自校教育の意味も含めて取り上げる。
第 14 回	まちづくりや自然との共生	早くからグリーンツーリズム、エコツーリズム、都市農村交流などを唱え、実践してきた飯田市の取り組みについて知る。山村留学がこの地域に果たしている役割や、1970 年に廃村となった大平宿の保存活用運動についても探る。地域おこし協力隊など、若者による地域活性化の活動にも触れる。

＜第２表＞　SJ 国内研修スケジュール表（2018 年度）

日目	学 習 内 容	午　前	午　後	夕方～夜
1 8/30（木）	飯田線乗車体験 飯田市内見学	東海道新幹線・飯田線で飯田へ 飯田線建設時の労働の苦労を追体験	伊原五郎兵衛の顕彰碑見学 観光案内所で各種チラシ入手 ホテルにチェックイン 市立図書館で、必要な郷土資料の閲覧・貸出し	川本喜八郎人形美術館見学 りんご並木はじめ市内散策
2 8/31（金）	美術博物館参観 満蒙開拓関連施設見学	飯田市美術博物館見学(屋上展望台も) 途中､プラネタリウムで地域のオリジナル映像作品鑑賞	信南交通バスで阿智村「こまんば」へ 長岳寺、満蒙開拓平和記念館見学 熊谷元一写真童画館見学	バスで飯田市内へ戻る 満蒙開拓平和記念館関係者との懇親会
3 9/1（土）	多文化共生施設での交流活動	中国帰国者を主対象とするデイサービス「ふれあい街道ニイハオ」訪問。設立の経緯を伺い、利用者と交流	日本語教室「Hand in hand 和楽」参加	
4 9/2（日）	下伊那郡１泊旅行１日目 平岡ダム見学 限界集落での農業収穫体験	JR 飯田線で平岡駅へ 天龍村の車で､平岡ダム建設で亡くなった中国人の火葬場跡、中国人追悼碑を見学。歩いて平岡ダムと、会社の慰霊碑、欧米人戦争俘虜の追悼碑を見学	龍泉閣のレストランで、永嶺誠一天龍村長と会食 JR 飯田線で温田駅へ 阿南町の車に乗り、かじかの湯で入浴 和合に行き、鈴ヶ沢ナスの収穫体験	焼ナスと五平餅を作って食べながら、和合の住民たちと交流 念仏踊りが奉納される林松寺ほかに分宿
5 9/3（月）	下伊那郡１泊旅行２日目 小学生との交流	和合小学校全校生徒との交流（法政側の出し物:韓国班＝伝統遊びのユンノリ､中国班＝中国の子どもの歌）	法政大学名誉教授西尾実の記念館見学 早稲田人形が奉納される早稲田神社見学 おどもカフェで、阿南町の地域おこし活動のレクチャー受講ほか	JR 飯田線で飯田に戻る
6 9/4（火）	自由行動日	明日の個人報告に向け､最終的な準備。ppt の作成（休養も）	同左	同左
7 9/5（水）	研修の総括 地元高校生との交流	市公民館へ行き､研修成果発表会開催	飯田風越高校へ行き、国際教養科２年生たちの前で個人発表、交流	研修全体の慰労会（法政の卒業生ほかの方々と一緒に）
8 9/6（木）	中央アルプス見学 帰京	JR 飯田線で駒ケ根駅へ バスとロープウェイで､3000m 級の中央アルプス見学	菅の台散策 駒ケ根バスターミナルから中央自動車道の高速バス乗車	バスタ新宿で解散

（たかやなぎ・としお：1956 年生まれ。法政大学国際文化学部教授。共著に『東京のなかの朝鮮―歩いて知る朝鮮と日本の歴史』『東京のコリアン・タウン―枝川物語』『国境を越えるヒューマニズム』など。論文に「映画『海を渡る友情』と北朝鮮帰国事業」「渡日初期の尹学準―密航・法政大学・帰国事業」などがある）

国家と宗教について

―天理教と旧満州との関わりについて思う―

エィミ　ツジモト

今春、「満州天理村–生琉里（ふるさと）の記憶」を出版した。

半世紀近くも前に入院した先の病室で、「天理村」と言う言葉とその存在を、ふと耳にした。それは、かつて日本の傀儡国家「満州国」が実在した北満州に、開拓団として入植した天理教教団の教徒が開拓した独自の村のことであった。以来、宗教社会学の視点から「満州天理村」の研究に打ち込む中で出会った天理教信者たちが抱く、その理不尽さに対する心奥の声を長い時を経てようやく世に訴えることができ、安堵しているところである。

我々が未来永劫なすべき義務とは・・・

かつて、既成宗教教団の多くは戦争に協力した。わずかではあるが、少数の人々が戦争反対を叫び、投獄され命を落とすものもいた。しかもあの時代、日本国中が戦争に異を唱える人々を「非国民」と指弾し、村八分にした。それなのに、敗戦後は多くの人々が口を揃え「自分たちは軍部に騙されていた」と弁解して今日に到る。そんな彼らは、時の指導者たちに迎合した責任を取るどころか、反省の意の表明さえないまま戦後７３年を迎えた。満州国の終焉は、１９４５年８月９日、つまり旧ソ連が侵攻してきたその日である。敗戦の色は、多くの開拓民たちも感じていたはずであるが、まさか頼みの関東軍が自分たちを見捨てるなどとは思いもしなかったに違いない。その時から、開拓民たちは「加害者」の立場に置きかわり、今では誰もが知る「死の逃避行」が始まっていった。馬賊や匪賊の襲撃から身を守り、ある開拓団では集団自決や「若い女性」の身を差し出す悲劇も起き、天理村では飢えに苦しむ村人たちのために幼子を満州人に引き渡すなど。また「馬賊」の首領の嫁となり村人を守った女性の存在もあり、およそ現代では考えられない「地獄」の様が展開された。この世に「地獄」など存在するはずもないが、「犠牲」になった人々や家族たちの「慟哭」の声を、生きて帰った人々とともに私たちは未来永劫に耳をすませて聞く義務があるといえよう。

国策に屈した宗教教団

さて、天理教団である。

彼らの宗教信条として教祖中山みきが言う「ひとはいちれつ みなきょうだい」というすばらしい信仰がある。教祖中山みきは、明治新政府樹立以後の神道を核とする「国体」の下で許される宗教として、他の宗教と同様に迫害を受け幾度となく投獄されたにも拘わらずその教義を貫いた。しかしその後、あろうことか教団は国策に迎合した。教祖中山みきの教え「おふでさき」による幾多の素晴らしい宗教信条を持つ天理教までが、である。

確かにあの時代、国策への協力は「宗教教団」を守りぬくための意思として、やむなくというのが教団の意向であるかもしれない。

だが先の戦争において、戦後その「残虐性」で世界中を震撼させた人体実験機関「７３１部隊」に、幼子まで協力させていた事実に弁解の余地はない。純粋な小学生たちの心を、

お国のためにと原野を駆け回らせ実験用の「ねずみ」を捕獲させた。その「ご褒美」として金銭提供で騙すなど、およそ教育者や大人のするべきことではなかったはず。たとえやむを得なかったこととしても、当時関わった大人達は、せめて敗戦後「謝る」だけの良心はもってしかるべきだった。あの時代に天理教の恩恵を受けた子供達は、長じるにつれ天理村での経験がもたらす「加害」の意識に苛まれ「教祖（親様一おやさま）の教え」の矛盾に悩んだ。たとえ戦後の復興がどんなに素晴らしくとも、彼らにとって過去の「記憶」は心の奥底に刻まれており、戦後自らその名を明かし「加害」への悔悟を表明し、癒えぬ心の傷を終生背負い続けた人たち。また他方には、語りたくとも語ることを許されない境遇の中で、戦後を生き抜かねばならなかった旧天理村の子供達の声なき声もある。そんな彼らの声こそ、わたくしたちは忘れてはならないし、決して忘れ去られるようなことがあってはならないのだ。それだけに今日天理教の指導的立場にある人々は、彼らの勇気ある発言を決して忘れることもそしることもあってはならないだろう。

国家と宗教の関わり

戦後天理教団は、天理村の「引揚者」たちには大いなる救いの手を差し伸べた。だが一方で、誇れるはずの信仰心によって布教に勤しもうとした純真な信者たちの姿勢が、「加害者」となりうる、いやそうなってしまった歴史の悲劇と逆説を前に、わたくしは「国家と宗教」のあり方について、現代の人々が真摯に向き合うべき「本質」を見る思いがしている。

洋の東西を問わず「国家と宗教」の関わりは永遠の課題であろう。人間の長い歴史を前に「宗教と国家」の関係を振り返った時、たしかに宗教が国家の在り方を正そうとした時期もあった。第一次大戦後のアメリカは、再びヨーロッパ諸国の戦争に関与してはならぬと、プロテスタンを中心にキリスト者たちの反省するところとなる。日本を例にとると、日清戦争において日本基督教団は、いち早く信者たちを病院に差し向け負傷兵を慰問したり、戦死者の遺族のために弔慰金を差し出すなど「救済」の手をさしのべた。キリスト教は西洋の宗教であり、彼らの行動はヨーロッパ史上の幾多の戦場体験に基づいた負傷者や戦死者に向けた宗教的実践行動であるが、当時の日本社会では注視され称賛された。

その一方で世の人々は、同じ宗教でありながら一体日本の仏教僧侶たちは何をしているのかと大いに批判した。このような批判もあってか、不殺生を旨とし戦争すなわち殺生に距離を置いていた仏教者たちが、日露戦争では大いに貢献する。勇んで救済にあたり、名僧と世間で称される僧侶たちは従軍布教師となって戦場に出かけ、兵士たちを慰問した。
だが日本仏教に限らず多くの宗教者達が、国家に利用されその手先となって戦争協力してしまった歴史の方がはるかに長いのだ。現在では戦争に協力した仏教者たちは非難されているが、前述の通り明治初期において仏教も天理教も同様に「弾圧」の対象となっていた。

宗教者たちの責任とは・・・

私たちが改めて考えなければならないのは、戦場で兵士が「敵」を殺めようとする時、あるいは殺められる時、自分たちの行為は正しくまた理にかなった行為なのだと正当化しようとすることである。 確かに「お国のため」という愛国心の「理念」は大きな役割を果たすが、それだけでは精神衛生上不十分である。そこで必要となるのは宗教者たちの存在とその助力である。彼らの宗教的説教は戦場の兵士の士気を高め、「戦場の殺生」の正当

性を精神的に裏付けていく。 それが禅僧が言う「剣禅一如」、つまり禅の精神と武の精神は一体であり、瞑想することで「無我の境地になり」敵に突込んでいくことが容易になるのだと、禅僧は煽る。これぞ本末転倒。浄土真宗は、死ねば「浄土」に行けることが約束されると「念仏突撃」を説き、「死」の恐怖を解き放とうとした。この様に、兵士たちはそれぞれ宗教者の教えと励ましがあるからこそ、人を殺める行為を正当化しやすくなるというもの。国家指導者達はここに宗教の価値を見出し「着眼」し利用する。

その一方で、反対する宗教者たちを徹底的に弾圧する。 教祖中山みきの時代の天理教がその例であった。 天理教の教義「おふでさき」が語るところは決して好戦的な宗教ではない。しかし洋の東西を問わず、どの国においても戦争がはじまると国家は宗教者たちを利用し、反対すれば弾圧する。今を生きる私たちは、この点を直視しなければならない。それには、過ぎた日の過ちから決して目を背けてはならない。わたくしたちは、「過去を変えることはできなくとも、過去の歴史から学ぶことはできる」のだ。

問題の本質は、いかなる宗教を信仰しようとも、自分たちの信じた宗教が国家に翻弄された事実を忘れることなく、国家への迎合を未然に防止する勇気と行動なのである。先の戦争において、国家の手先となって国家に欺かれ愚弄された苦い経験から「国家権力の本質」と「宗教の価値」を再考し、二度と国家によって宗教信条を利用されてはならない事実を、天理教を含め全ての宗教教団は学ばなければならない。

奇しくも天理教団が北満洲に信者達を送り出す決定に際して、中核的役割を果たした「天理教青年団」は、この秋結成百年周年の節目を迎えるという。今となっては幻の国“満州国”に存在した「満州天理村」ではあるが、その歴史的存在の事実はあらためて今を生きるわたくし達に「戦争の愚かさ」と「宗教と国家」の関わりを学ばさせてくれるまぎれもない「教訓の地」であることに感謝したい。

（エィミ　ツジモト：ジャーナリスト。アメリカ・ワシントン州出身の米国日系４世。ヨーロッパ、オセアニア、日本に在住し日系移民の歴史などを執筆。著書に『消えた遺骨―フェザーストン捕虜収容所暴動事件の真実』、共著に『漂流するトモダチ―アメリカの被ばく裁判』などがある）

怒り憎しみと報復の連鎖を断ち切って

「日中平和友好条約」40 周年にあたり、
撫順と方正に平和と友好の歴史を再認識する

姫田　光義

≪解説≫

本講演は今年、2018 年 6 月 10 日（日）第 14 回方正友好交流の会総会後の記念講演の採録である。姫田光義さんについてのプロフィールは、本稿の最終頁に姫田さんの自己紹介が出ているので、お読みいただきたい。

姫田さんに最初にお目にかかったのはいつだったか。ある会合後の二次会でお会いし、方正日本人公墓についてご意見をお聞きしたところ、「中国の仁愛思想の表われと言えるだろう」という言葉に、意を強くしたことを覚えている。

中国の＜文化大革命＞については、当時の意識的な学生などの若者たちは大いに共感したものだった。私も 1968 年以降はその一人であり、今でも「精神労働と肉体労働の統一」とか知識偏重に対する批判や「造反有理」などの思想は、＜パリ五月革命＞に対する共感と共に、今でも熱い気持ちが心の底に横たわっているように感じる。

そういう時代状況の中、姫田さんが中国近現代史研究家として実に冷静な眼で当時の中国の政治状況を観察していたということに驚くとともに畏敬の念を持っている。

さて、講演は「この道」（北原白秋作詞、山田耕筰作曲の童謡）の替え歌を姫田さんが歌うところから始まった。**（大類）**

＜この道は～いつか来た道～ああそうだよ、人が鬼へと～変わる道だよ＞

（姫田さん唄う）

戦争で人を殺すということは・・・

私も 80 歳になりまして、色々とやり残したことを考えます。最近私が一番心にかかっていることは日本の行く末です。日本は今、政治、教育、世論形成、どんどんと戦前のよう

な国へ帰っていく。換言すればどんどんと戦争ができる国へと戻って行くのではないか。そしてそのために人を平気で殺すことのできる「鬼」を育て上げるような政治・教育・世論が作られているのではないかということです。誰にでもわかっているはずですが、戦争は無差別の大量殺人です。一人や数人の殺人事件には大騒ぎし、犠牲者に対し情深く同情し哀悼の念を表す日本人が、なぜかこの情け容赦ない残酷な大量殺人、とりわけ異国の人々に対する殺害加害には、無理解・無関心なのです。自分はそんな目に合わないし決してやりもしないと、思い込んでいるからでしょうか。そしてこれも誰にでもわかっているはずなのですが、殺戮・殺人は人を差別し蔑視し、更に憎しみを掻き立てることなしにはできないということです。

サム・キーンの『敵の顔』という本があります。1994 年の本です。第一次世界大戦から現代までの戦争を研究されて、「プロパガンダ(宣伝)はテクノロジー(高度な武器のこと)に先行する」――戦争前夜にはどこの国も敵の顔をいかに憎々しく酷薄に描いているか、と書いています。70 歳以上の方はご存知でしょう、私たちが軍国少年として教わっていた時代。漫画の『のらくろ』ですが、中国人が豚で、朝鮮人が猿で、そして日本人が忠実で勇敢な犬だとなっています。豚、猿、犬。日本人の例えに関しては正しいと思います。忠実すぎて、天皇の命令と言われればなんでもやってしまう。怖いのは教育と訓練によって殺人が習慣のようになって罪悪感が麻痺してしまうことです。

最近のある新聞に、自衛隊員のインタビュー記事が出ていました。それによると、射撃訓練で、これまではずっと遠くの人形の標的を撃っていたのが、イラク派兵以降その標的がどんどんと顔や表情が見えるほど近くなり、最初は抵抗があり怖くて正視できなかったのに、繰り返し慣れてくると平気で撃てるようになったというのです。それを読んで、私はすぐに、後ほどお話する元戦犯たちの言葉を思い出しました。

新兵の頃に、中国人を刺殺する訓練があった。標的ではなく、実際の人間です。それを刺し殺す。そんなことは誰もしたくない。怖くて抵抗があったが上官の命令は天皇の命令だと強制され、仕方なく実践している間に慣れてしまって簡単にできるようになったと言っています。このような事例は人体実験をやっていた 731 部隊関係者も証言しています。まさに人が鬼に変わった瞬間です。これまた悪魔の飽食であります。

方正日本人公墓との出会い

前置きが長くなりましたが、私が方正を知ったのは、中央大学退職後、撫順の奇蹟を受け継ぐ会代表となり、撫順戦犯管理所をほぼ毎年訪れるようになりましてから、本会のベテランの方々には申し訳ないですが人に誘われて何気なく立ち寄った、2010 年 6 月 21 日のことです。その方正日本人公墓で、撫順にも負けずとも劣らない、素晴らしい感動を与えられたのであります。

経歴に触れたついでにここでちょっと横道にそれますが、間接的には関わってきますの

で、私の撫順と方正に至るまでの経緯・経験を、少しお話ししておきたいと思います。

そもそも私が平和とか日中友好関係とかを認識するようになったのは、お恥ずかしいことながら大学生になって東洋史学を専攻するようになってからです。当時、東洋史・中国史を学ぶのに、中国の唯一の代表とされていたのは蒋介石政権の台湾中華民国ですから、中国には行けない、中国人には会えない。中国語を学んだのはお一人だけいらした華僑の先生です。中国は憧れつつも遠い隣国・隣人でした。

中国大陸の中華人民共和国となぜ交流できないのか。なぜ台湾の国民党政権が中国の唯一の代表なのか。そんな疑問を感じ始めたのが、中国への関心の始まりでした。ですから、中国のことを勉強したくても、何も資料がない。今考えると笑ってしまうのですが、学園祭で極めて乏しい資料を使って「中国の実情」と称し、手書きのステッカーなどで展示したり講演したりしていたものです。そのときの展示物って何かと言いますと、「人民画報」とか「中国画報」とか本当に限られた雑誌や新聞です。それを貼って、横に勉強したばかりの中国語や中国の現状をマジックで描いた。結構、沢山の人々が見に来てくれました。やっぱり皆、中国に関心を持ちながら、接触できない、中国へ行けないもどかしさがあったのです。そして、1960 年の安保闘争になりました。安保闘争は、日米安保条約への反対と共に、日中関係の正常化もテーマだったのです。私は四年生でしたから、毎日国会前へデモに行きました。羽田のハガティ事件の際も、羽田空港に行きました。私はハガティの車の下にいました。車の上にいた友人は捕まって、車の下にいた私は捕まらなかった。安保闘争のなかで、日中国交正常化もしなければならないと考えていましたが、時代はまだ冷戦時代でした。

ところが、大学院生になって 1965 年夏に、「第一回学生訪中団」というのに参加しました。学生たちやいろいろな団体の人たちが、毎日外務省や法務省に座り込みまでして、実現しようとしたのです。日本の外務省はパスポートを出してくれない。国交のない中国へ行ってはダメだと言う。それに抗する激しい闘いを経て、実現した日中青年交流でした。当時を知る方からは必ず「姫田さん、第一回日中青年友好交流祭に参加したのですか？」と聞かれるのですが、私はまだ大学院生でそんなに偉くはありません。そうではなく「第一回学生訪中参観団」に参加して、香港から広州に入り、広州から上海、北京と来ました。要するに観光団ですから、意識の低い気軽な団だったのですが、たまたま北京に行った時に、この「第一回日中青年友好交流祭」代表団と合流させられたのです。私たちは意識が低いメンバーだったので、「そんな政治的なイベントに参加していいのか」と徹夜で議論しました。私はせっかく北京に来たのだから人民大会堂に行くべきだと主張しました。そんなことで、人民大会堂に行きました。

毛沢東、周恩来らと人民大会堂で出会う

今でも中国人に話すと感動してくれるのですが、人民大会堂で毛沢東、劉少奇、周恩来、鄧小平、彭真、康生、賀龍、郭沫若、廖承志、といった写真と書物でしか知らなかった当時の主要な指導部の人々にお会いし握手することができたのでした。

エドガー・スノーやアグネス・スメドレーの本でしか知らなかった指導者たちです。姿がなかったのは林彪ぐらいです。その時の私も写っている写真は家宝です。その話をすると、中国の方は皆驚いて、私と「握手してくれ」と言います(笑)。後輩の笠原十九司が、翌年66年の学生訪中団に参加しているのですが、その時にはバスのなかで東方紅ばかり歌わされて毛沢東語録を振り回して、そんなのばかりだったと話していました。65年と66年のたった一年の違いが、ものすごく大きな中国の転換点だった。そしてそれが、実は今日の主題である、方正日本人公墓や撫順戦犯管理所にも関わってくるわけです。

皆さんご存知のように方正日本人公墓は1963年に作られておりますけれども、「あんなもの、なぜ日本人を祀るのか」と壊されそうになった時に、周恩来がそれを止めたという話もあります。中国人から見ればなぜ侵略者として満州へ来た日本人を手厚く葬り守らなければならないのか、そう思うのは当然であります。そして私たちがやっている撫順戦犯管理所。1956年の軍事裁判から64年の間に、1170人の元戦犯たちが全員無事に帰ってきました。これもまた中国人から見ると、なんで戦犯たちの、そういうひどい鬼のような日本人を許すのか、という感情が起こってくるのは当たり前です。

方正公墓を訪ねたときに、私は涙が出ました。とりわけ感動させられたのは、麻山事件の犠牲者が祀られていることでした。この事件については中村雪子さんという方が、1983年に『麻山事件』を草思社から刊行されています。麻山事件の490人の遺骨が中日友好園林に引き取られて祀られたのは白科長のお話では1984年10月18日だと。よって『麻山事件』の本に書かれていないのは当然だったのですね。しかしそれにしても、中村さんのお書きになっているこの悲惨な事件の遺骨も、中国の人たちはなぜ手厚く集めてくれたのでしょうか。

白課長のお話では、敗戦後ここに15000人もの日本人が避難して来て、そのうち5000人が死亡、5000人が離れて行き、5000人が残った。そして私が行った2010年現在でも、中国人養父母に育てられた13人が残留孤児として今もいらっしゃるということでした。残留という言葉は嫌ですね、残ったのではなく捨てられた、棄民です。

さて、方正公墓に関しては、機関誌「星火方正」の中に、大類さんのお書きになられたものなど沢山あります。著名な方々も訪問されています。加藤紘一さん、「星火方正」第２号に2003年訪問とあります。宮本雄二大使、「星火方正」第５号/第14号/第17号に出ています。丹羽宇一郎大使も、「星火方正」第17号に大類さんのインタビュー記事が出ています。丹羽宇一郎さんが書かれた『中国の大問題』という本にも方正のことが書かれていました。その後に出された『戦争の大問題』という本には、撫順のことがしっかりと書

かれています。

余談になりますが、加藤紘一さんは残念ながら総理大臣になり損ねた方です。彼が外務省中国課の事務官で、私が日本国際問題研究所研究員だった頃にお付き合いがありました。72 年から 73 年、当時唯一の対中国窓口だった香港総領事館に私は特別研究員として推薦されて派遣されたのです。その時に彼はこう言ったのです。姫田さんの身元調査をやりました。あなたが共産主義者・共産党員ではないことが分かりましたので安心して行ってください、と。公安が調べたのですね、私の身の潔白を(笑)。

72 年、田中訪中、73 年、ドルショックです。おとなしい外交官が、ドルショックの時には騒ぎました。それまで外交官はドルで給料をもらっていた。360 円の時代です。それが一挙に 142 円くらいに下落した。さすがにおとなしい外交官も、給料を日本円にしてくれと。加藤さんがもし総理大臣になっていたら、総理としても方正を訪ねて、お詫びと感謝を言ってくれれば、中国の人たちも納得してくれたのではないでしょうか。

撫順戦犯管理所について

ここで休憩代わりに見て頂きたい映像があります。2010 年に私が方正公墓を訪れた際の映像です。遠藤さんというお坊さんが読経し私達も黙とうしている場面ですが、何とこの遠藤さんは、1965 年の時に訪中した宗教関係学生団体の 10 名のうちのお一人だったんです。2010 年のこの時には、読経をあげることが許されていましたが、翌 2011 年からは、一切許されなくなったと聞いています。2010 年も、ひとつの節目だったのですね。

次に、撫順戦犯管理所についての NHK の番組です。

＜（映像ナレーション）元所長の金源さんは、日本人戦犯を寛大に扱ったとして、文化大革命で激しい批判をあびます。「金源打倒！金源を焼いて殺そう！」と。金源さんはかつて所長を務めていた戦犯管理所に収容され、紅衛兵から思想改造を求められます。＞

私も出た番組なのですが、撫順戦犯管理所について、1950 年代に中国側が撮影記録した膨大なフィルムの検証番組でした。中国がいかに戦犯たちを人間として扱ったか、裁判の判決がいかに寛大だったかを、NHK にしてはめずらしく克明に映し出しています。

次の映像が、1965 年に、日本からの訪中団を初めて迎えた中国側が撮ってくれた映像です。これを見ると、中国側がどれだけ日中国交回復を望んでいたかが分かります。ものすごい熱烈歓迎です。日中の青年たちが、本当に喜んで出向き、そして喜んで迎えてくれました。翌年から文化大革命ですから、この映像も中国ではアウトだったと思います。たまたまこの映像を NHK が持っていて、私の手に届いたのです。

ついでに私の家宝をお見せします。真ん中に毛沢東。劉少奇、周恩来、彭真、賀龍、郭沫若、すごいですね。朱徳と林彪はいません。この時は病気だと言われていた。この写真も恐らく中国ではアウトでしょう。文革の時に、毛沢東以外は全員やられていますから。

文化大革命に関しては 、私も色々なものを書きました。政治的にではなくて、文化大革命に対して学術的に歴史研究者として、黙っておれないという面があります。劉少奇、鄧小平、周恩来もそうですが、歴史的な評価をめぐって、文化大革命はかなり乱暴な議論でこうした人々を消していくわけです。とりわけ私が納得できなかったのは、太平天国の一番最後の英雄と言われている李秀成と、中国共産党二代目の総書記と言われる瞿秋白についてです。

1864 年に清朝政府に処刑された李秀成は『李秀成自述』という供述書を、1935 年に処刑された瞿秋白は『多余的話』(余計な話)という文書を残しています。この二人のことを、文革中の紅衛兵たちは、敵に投降した革命家にあるまじき情けない裏切り者、として猛烈に批判したのです。

私は、実は卒論も修論も、太平天国について書きました。李秀成は、あわや上海攻略までいきそうになった英雄で、私は英雄好きですから、供述書には当然改ざんもあるのではないかと考える。瞿秋白も、初期の共産党の最高指導者の一人です。彼はインテリですから、やむにやまれず革命をするのだと『多余的話』に書いている。

私もインテリの端くれとして、瞿秋白の書いている悩み、そういったところには共感できて大好きなのです。ところが紅衛兵たちは、どちらも本人が書いたものだといって批判し、歴史を変えてしまった。劉少奇もそうです。中国には 1946 年の平和と民主主義の新段階と言われる時期がありました。これが劉少奇の投降路線だと言って、批判されるわけです。文革の話をし始めると、横道にそれてしまいますね。

話を撫順戦犯管理所に戻します。先ほどの NHK の番組以外にも、元戦犯たちの書き残されたものがたくさんあります。また映像としても『戦犯たちの告白』や『泥にまみれた靴で…』などがあります。また 2014 年でしたか、香港フェニックステレビが戦犯管理所・戦犯裁判・元戦犯たちの証言など大変詳細な番組『陽光の下の囚徒』を作っています。何時間、何週間にもわたる大作です。この番組を観た香港や中国の人々がどのように感じ取ったかを、私は聞きたかったのですが、残念ながら聞けませんでした。

以上を前提に、本来ならここから中国帰還者連絡会の結成から 2002 年に撫順の奇蹟を受け継ぐ会結成に至る経緯について、詳細にお話したいところですが、長くなってしまいますからお手元に配布した資料をご覧ください。

撫順戦犯裁判について中国でも随分お話をしてきました。歴史的事実を題材にした『再生の大地』という合唱曲を、ほぼ毎年中国で歌い中国の人々に聞いていただいています。今年も 9 月に方正と撫順に行くつもりです。撫順の高校の文化祭に出演してくれと言われています。2015 年には国際放送局で全国放映されました。私は中国語で挨拶しましたが、事前に原稿をチェックされました。今日のような余談は言えません。全国放映のテロップもちょっとおかしかったです。平均年齢 70 歳の日本人が私費でやって来たと。一昨年も東

北の遼寧大学へ行きました。昨年は南京事件 80 周年で南京も訪ねました。

また、必読文献として大沢武司著『毛沢東の対日戦犯処理』(2016 年中公新書)をあげておきます。また、戦犯のご遺族の方で前衆議院議員の伊東秀子さんが書かれた『父の遺言 戦争は人間を「狂気」にする』(2016 年花伝社)もぜひお読みください。

撫順の奇蹟とは・・・

私たちは歴史事実を元にした組曲『再生の大地』(大門高子作詞・安藤瑞樹作曲)をずっと歌っています。この歌を歌っていると、涙が止まりません。撫順戦犯管理所の職員たちも皆被害者です。家族や親せきや友人が日本人に殺されている人たちです。それがなぜ、寛大に、戦犯といえども人間だ、必ず鬼から人間に目覚めるはずだ、といって白米を食べさせ、自由に体操をさせて、学習をさせたのか。上からの命令ですから、地元には反発もあったといいます。

一昨年 101 歳で亡くなられた元戦犯の方は、兵隊にとられて 5 年間、シベリアで 5 年間、撫順戦犯管理所で 6 年間、十数年間もたらい回しにされて帰ってきたら、出征する時に約束した、いいなずけ（許嫁）の方がまだ待っておられたそうです。＜命ある限り～＞と歌うと、泣けて来ます。一昨年その方のお別れ会で、 その十数年待たれていた奥様がお棺にすがって「わたしもすぐにいくからね」と泣かれていました。

戦犯たちが帰ってきたのは、冷戦時代です。最初に帰ってきたのが 1956 年、最後のひとたちが 64 年です。冷戦時代ですから、日本では今では想像もできないひどい苦労、偏見、差別がありました。そうしたひどい差別、逆風のなかで、 中国帰還者連絡会を作られた。

被害者である中国人と加害者であった日本人との間の、憎しみと報復の連鎖を断ち切って育て上げられた友情物語、それを象徴的に言い表しているのか撫順の奇蹟です。この世界的にも稀有な歴史真実を日本人はほとんど知らないだけでなく、むしろその事実の記憶を抹殺しようとする風潮が強かった。赤狩り、レッドパージ、赤に洗脳された中共の手先などと。中国人側も、文革のような一時期に、この事実を否定的に評価しようとする傾向があった。もう皆さまご覧になった通りです。この番組でも管理所の職員たちが文革では迫害を受けたことが、元所長の金源さんの映像からもよくわかります。

世界で 1000 人以上の日本人が戦犯として処刑されている。中国はどうか。中国の蒋介石政権は 130 余人処刑しています。その中には、南京 100 人斬り競争の人たち、そして香港総督。蒋介石の方針である「徳を以って怨みに報いる」。これによって一番得したのは、支那派遣軍総司令官の岡村寧次です。1949 年に無事に復員しています。それから、山西省日本軍残留問題の澄田賚四郎ですね。1949 年に復員しています。

一方では 130 余人、処刑されました。私が残念でたまらないのは、この中には、植民地だった朝鮮人と台湾人が含まれていたということです。日本の支配下にあったから日本人

とされ、罪に問われた。1965 年の日韓基本条約により巣鴨に拘留されていた韓国人が釈放されます。釈放された時は韓国人です。何の補償もなかった。この方は、怒りと悲しみのために、自殺してしまった。

「方正」と「撫順」の共通性と異質性

台湾映画に『悲情城市』という有名な作品があります。この映画の一つのテーマは、日本軍に雇われて戦争に徴用された台湾人。戦犯にさせられそうになった老人が愛陸から来た、気が狂ったふりをして逃げ回る。台湾には、日本が去って、中国の国民党がやって来た。その時に、台湾の人々は何と言ったか。「狼去りて、豚来たる」。狼（あるいは犬〔日本人〕）はうるさくても番犬として役に立つが、豚〔大陸から来た中国人軍隊〕はただ食り食うのみで役に立たないと。これに反抗して、台湾の人々が蜂起したのが、有名な二・二八事件です。

私の友人の奥様で、その犠牲者二・二八事件の会の副理事長までやっていた方がいます。日本人を追い出して、やっと安心して生活できると思っていた台湾人を、中国大陸から来た軍人や役人は何と言ったか。「お前たちは日本の犬だ、だからお前たちをこき使っていいんだ」。大陸からやって来た国民党政権が余りにもひどかった。まだ日本の支配時の方がましだったと。日本人は歓迎されたが、私は情けないと思う。しっかりと謝罪したことがあるのか。

最後に私がこういうことをお話するのは、歴史の事実として、撫順の奇蹟を世界記憶遺産に登録しないと忘れられますよと。これを登録するためには、中国側の協力が必要です。資料はすべて中国にありますから。シベリア抑留からの引き揚げ、舞鶴への生還が、世界記憶遺産に登録されていることをご存知ですか。もちろんシベリア抑留の過酷さ悲惨さは、日本人はよく知っています。一方、撫順戦犯管理所からの引き揚げの記憶が、日本では大切にされていないことが私は残念です。

昨今の国際情勢の中、憎しみと報復の連鎖が断ち切れないでいつまでも紛争が生起している状況は、冒頭にお話ししたように人を鬼に変えていく過程を痛切に示しています。他方、方正に表されている中国人の姿勢・信念・精神といい、撫順の奇蹟に表されている歴史事実といい、いずれもしっかりと、「鬼を人に変えて行った、鬼が人に変わって行った」ことを示しています。これを前向きに理解し受け継いでいくべき事柄だと信じて、私たちは『再生の大地』を歌います。この歴史事実とその精神が、とても重要かつ有意義だと信じて、これからも歌い続けると同時に、この撫順の奇蹟を世界記憶遺産として登録し、永遠に後世に伝え残したいと願っています。

以上のお話から、方正と撫順の共通性と異質性とがご理解いただけると思います。日本と中国とは、正に、引っ越しのできない隣人同士です。隣人同士が将来のことを考える時

に、どうしても思わなければならないこと。中国人から見れば被害と寛容であり、日本人から言えば加害と再生と言えましょう。こうして、怒りと憎しみと報復の連鎖を断ち切って、真の友好関係が形成されていくと私は信じます。

最後にこれを思い語る時にいつも連想する言葉が二つあります。一つは故日野原重明さんが子どもたちを教える時の言葉「きちんと自分のやったことを認めて謝りなさい、謝られたらすぐに許してあげなさい、その両方が、仲良くなるためには必要だよ」と。

もう一つは、1992 年に私が司会者の一人だった日本で初めての従軍慰安婦に関する国際公聴会での言葉です。ここには中国、韓国、台湾の元従軍慰安婦の女性が参加しました。日本軍占領下にあったインドネシアで慰安婦にさせられてしまったオランダ人、現在オーストラリア人の女性ですが、そのお嬢さんが「ぜひ日本の人に話して来ましょう」とお母様の背中を押し付き添いで来日された。その女性が、最後に言った言葉です。

「犯された罪は許します、だけど犯された罪そのものは絶対に忘れません」

＜この道は〜いつか来た道〜ああそうだよ、鬼が人へと〜変わる道だよ＞（姫田さん唄う）

鬼を二度と作らないために、方正をいつまでも語りましょう。撫順をいつまでもご理解ください。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

【質疑応答】

≪情報≫

質問ではないのですが、撫順の奇蹟を受け継ぐ会の荒川です。今日はありがとうございます。会報をお持ちしましたので、よろしければお持ちください。それから、『中帰連平和記念館』が埼玉県の鶴ヶ島にあります。元戦犯の手記など色々な資料があります。よろしければ足を運んでみてください。私は『再生の大地』という撫順戦犯管理所を物語にした朗読劇の代表をしています。全 12 曲です。踊りや寸劇もあり、とても分かりやすい内容です。こちらの公演もぜひお聞きになってみてください。

≪質問≫

「方正の会」の会員が高齢化して、将来への不安があるのですが、撫順の奇蹟を受け継ぐ会では、どのような形で受け継がれていこうとされているのでしょうか？

≪姫田≫

それは今日私が聞こうと思っていたんです。撫順戦犯管理所の『再生の大地』を歌うメンバーも、中国へ行った時が平均 70 歳のと言われて、皆もう 80 歳近いです。撫順の奇蹟を受け継ぐ会は、2002 年に、戦犯のご老人たちから受け継いだわけです。当時は若い人もいた。若い人は仕事や家庭生活もあって、抜けていくんです。支部も 10 ヵ所あったのです

が、どんどん休会状態になっています。その原因は、老齢化です。お互いに教え合っていきましょう。こういう講演会をどんどん開いて、講演会の参加者も失礼ですが高齢の方が多いんですよね。クラーク博士の「Boys, be ambitious」の言葉には後半があったそうです。「Boys, be ambitious like this old man」「青年よ大志を抱け、この老人のように」です。

この後半を知って、感動しました。この言葉を今、80 歳になって思っていますし、そのためにも、世界記憶遺産にするということは、とても大切なことです。撫順が記憶遺産に登録しようとなれば、当然、方正もという話に繋がるでしょう。中国人の寛大な精神が共通していますから。

中国は被害のことばかりが記憶遺産になっているんです。南京虐殺紀念館、七三一部隊記念館も申請しようとしています、従軍慰安婦も。それは絶対に正しいけれど、なぜ中国人の誇りになることを言わないのか。毎年中国大使館でも話をしていますが、色々と問題はあります。日中関係。今中国側がそんなことを言ったら、安倍さんは嫌な顔をしますよ。そもそも戦犯が犯した歴史事実を否定している人ですから。三光作戦なんてなかった、従軍慰安婦なんてなかった、それが日本の歴史認識です。教科書にも書かれなくなった。来年の入学試験から消されますよ。だからこそ、撫順と方正を世界の人々に訴えていく。私はそこにしか、道はないと思っています。

≪質問≫

方正日本人公墓の中日友好園林を、中国政府が愛国主義教育基地にしようという動きがあります。私が行った九一八博物館でも、中国の子どもたちが参観して、その感想文を見ると「日本人は獣だ、人間じゃない」みたいなことが書かれています。そこを出ると、江沢民の筆で「九一八を決して忘れるな！」というスローガンがあります。友好園林を愛国主義教育基地にしようという話は、周恩来などの寛大な精神とは異なるものではないか、という危惧があります。日本の文学者の代表団が 60 年代に訪中した時に、日本側が先の侵略戦争への謝罪を表明したのに対して、中国側の外相・陳毅はこう発言している――

「日本が忘れないと言い、中国が忘れると言う関係は、良い関係です。逆に、中国が忘れないと言い、日本が忘れると言う関係は、良くない関係です」

正に今、その良くない関係になりつつあります。どうすれば良いのでしょうか？

≪姫田≫

歴史認識の問題が一番大事だと私は思っています。歴史認識は教育と社会風潮の両方から影響されますね。社会風潮は、広告欄で書籍や雑誌の見出しを見ただけでも歴史を否定しようとする動きは、たくさんあります。老齢化の欠点は、電子媒体を使えないことです。トランプを見てください。一日で 3000 万人が彼の発言を読んだ。今朝もトランプのめちゃくちゃな話があっという間に広がる。教育で負け、宣伝で負けている。教育は政治闘争ですから、文科省の大臣を変えないと、どうしようもない。なんとか電子媒体、宣伝。ビッ

グコミックの山本おさむさんのレッドバージという漫画をもっと読んでもらいたい。ご存知ですか、かわぐちかいじの漫画では、尖閣列島でもう日中が戦争しているんです。知らない方は幸せです。昭和天皇という連載漫画も描いています。よっぽど我々がしっかりしないと。どうしたら良いのか、大類さんが言うべきでしょう。教えてください。皆で考えましょう。心配です。

≪質問≫

大門と申します。南京事件の件で 20 年前に『紫金草物語』という組曲を書き、撫順のことを組曲『再生の大地』に書き、次回は方正・残留孤児のことを第三作目にしたいと考えています。南京事件のことですが、中国で演奏会をやりますと、老人が来られるのも感動するが今度は若い人を連れてきてくれと言われます。日本の国内でも若い人に聞いてもらいたいと思い、大学での公演も取り組んでいます。南京の虐殺記念館には、中国の若者がデート気分でも来ているんです。虐殺記念館は、友人としての日本人がいるということを知らせようとしてくれます。戦争を憎む、日本人も同じ考えなんだと、伝えてくれています。南京は平和都市宣言で、平和への取り組みを進めているところです。日本人も友人として一緒に平和を発信しましょうと言われる。ここ数年の動きは恐ろしいが、やれることを地道にやっていこうと思います。戦争を語り継ぐためには、拙い歌でも役に立っているのではないかと感じます。方正についても、色々と教えていただきたい。

≪姫田≫

大類さん、方正の白課長のお話だと、2010 年の時に残留孤児が 13 人いると具体的におっしゃっていましたが、どうなんですか？　お会いされたことはありますか？

≪大類≫

中国でお会いしたことはないのですが、本人は残留孤児だと言っているのに厚生労働省の要件が揃わなくて認定されず帰国できない方とはお会いしました。映画『嗚呼、満蒙開拓団』にも出ています。宮本大使も当時ポケットマネーでも帰したいと言われていました。

私から姫田さんへの質問ですが、文化大革命についてですね。昨年の総会で、西園寺一晃さんが講演されて、講演そのものは多くの方が感動してくれました。その後の会報で文革のことを 2、3 行でも加筆して欲しいという希望が寄せられたのですが、西園寺さんは数行ではとても語れないということで、講演記録だけの掲載になりました。

文革の時に、始まった当初は戸惑ったり、あるいは中国の官僚主義的な疎外性に対して一部の政治団体からは批判的な論調がありました。私は、東ヨーロッパへ行ってポーランドの現実などを見ると、非常に抑圧的な社会主義体制の状況を見る中で、1968 年ぐらいから中国の文化大革命は、ちょっとすごいと見るようになりました。精神労働と肉体労働の統一とか、知的労働への批判とか共感するところもありました。日本の中国研究家でも「魂

に触れる革命」とか言って、かなり文革に共感した中国研究者や学生が多かった。その後文革はひどい状況になったので、反省の声が多数を占めました。姫田さんは非常にクールに当時から分析されていた。そのおかげで逆に批判もされたのでしょう。文革を受けとめた当時の日本の知識人の有り様とかをどう見るか、お話いただけますか。

≪姫田≫

文革は私たち学生の頃、大学院生だった頃に始まりました。安藤彦太郎さんに一番影響を受けましたね。それから新島淳良さんも。みんな文革の熱烈な支持者でした。私の同期の狭間直樹さんが私にはっきり言ったことがあります。「文革を支持しないものに中国革命を研究する資格はない」と。数年前に彼に会った時にそんなこと言われたと話したら、覚えてないと(笑)。狭間さんも『中国社会主義の黎明』という本をお書きになっている。

少し歴史を紐解くと、66 年に文革は始まります。50 年代から学術団体が来て、64 年には近代史の劉大年が来ています。私たちは東京教育大学でその歓迎集会をやりました。その前後に、現在駒込にある東洋文庫に、アメリカのアジアフォード財団からお金が注ぎ込まれるということで、反対運動をやりました。これは安保の学術版であると。私の友人が「姫田さんアメリカでは有名ですよ、スタンフォード大学の資料のなかに、アジアフォード財団に反対している姫田さんの名前が出てました」、と。アジアフォード財団に反対する、日中友好運動をやる、そういう流れの中で文革が出てきたから、文革は「魂に触れる戦いだ」と、それは、私たちは熱烈に歓迎しました。

ところが学術的な問題、それから特に林彪事件ですね。私が香港にいた頃に、日本の知識人とマスメディアは林彪事件なんか何も言わなかったです。1971～72 年です。香港では林彪事件の資料がたくさん出ているわけです。「五七一工程紀要」（クーデター計画書）も香港では既に出ていました。それを日本の学者やマスメディアはガセネタだと言った。朝日も毎日も、文革はすごいと思い込んでいる。大宅壮一は「ジャリ革命」と批判しましたが、同調する人は少なかった。安保闘争から流れていく平和主義と民主主義といった戦いの流れの上に、文化大革命が最初は現れた。そして同時に、中ソ論争が公然化する過程でもあった。平和共存なんてナンセンスだと。

ここに、慶応大学教授の大西広さんがいらっしゃいます。大西さん如何でしょうか。

≪大西広≫

今のやり取り伺っていました。世界遺産にしようというのは、まったく賛成です。これがなぜうまく動かないかという理由を考えます。戦犯も中国は寛大に扱った、そういうスジで取り扱って欲しいと我々は思って訴えている。ところが、今日の映像にもありましたが、文化大革命の時にはそうじゃなかった。所長だった金源さんがあんな目にあうわけです。日本人の多くは、中国といえば中国共産党だということになって、文化大革命に代表されるようなイメージですね。中国はそういう寛大な国だと我々は言う、いやそんなこと

ないと、文革の時は酷かったと。寛大だと言ってもそれが中国の姿ではないのではないか、そこが払拭されないとストンと落ちない。

大類さんと私が同じような感覚を持つのは、ここにおられる多くの方が年齢的に文化大革命を体験してないので、ある種、なんというか憧れの気持ちがわかるんです。普通と逆ですね。普通は我々の世代は、文革はダメだという世代です。我々は殴られたこともありませんし、酷い経験もないので、若者たちがあの時に歓迎してついて行ったというのは、すごく理解できる。

何を問題にしたいかと言うと、私は現在慶応大学の経済学部でマルクス経済学を教えていますのでマルクス主義評価という視角からの問題提起です。というのは、撫順の奇蹟は中国なりの共産主義・マルクス主義の真逆の立場が可能としたのか、いやいや、マルクス主義もなかなか良いところもあるという話だったのか、という問題です。この辺がぐちゃぐちゃになっているのです。一人一人の意見、視点がばらばらなんです。そこがすっきり行かない理由のような気がするんです。私はマルクス経済学を慶応で教えている人間なので、やはり帝国主義戦争では日本国民も被害者であると、こういうスローガンがマルクス主義にはあって、その考え方の背景には国と国の対立よりも階級間の対立の方が大切だと、支配階級が他国との戦争に非支配階級を動員したという考えが大事と思います。そして、その延長で日本国民も被害者だと、そういう構造ですよね。この辺も一言触れて欲しかった。でもその一言で解決するほど、この問題は簡単ではないので、繰り返しになりますが、我々の理解はまとまっていない、ストンと落ちないんですね。

≪姫田≫

大類さんが答えてくれたような気がしますが、そうなんですよ、文革の初期の頃はマルクスレーニン主義・毛沢東思想万歳なんですよ。それは冷戦状況の中で帝国主義安保に反対するという状況の下でのマルクスレーニン主義・毛沢東思想ですから、飛びついてしまうんです。どうしたらベトナム戦争を終わらせられるのか、アメリカ帝国主義に反対できるか、もやもやそう思っていた若者や学者たちが、やっぱり最初に飛びついたのはそこですよね。知的なものだと思った。ところがそうではなかった。ここに『文革大笑話』、文革の大いなる笑い話という本がありますけれども、香港の本です。批判どころか笑いものにしている。漫画化されている。

ごめんなさい、大事なことを言い忘れていました。撫順の第三の奇蹟を言い忘れていました。撫順の奇蹟と言われる歴史事実の中で、もうひとつ輝いている事実が存在するのです。それは中国の文革の影響によって、日中友好協会も大分裂し、中帰連は 1967 年に分裂してしまったのです。文革がどれだけ日本に大きな影響を与えたか、中帰連を見れば分かります。しかし、その苦しい時期を乗り越えて 86 年に再統一を実現しました。金源さんたちが文革の終わった後に訪日して、どうか双方仲良くしてください、そして日中友好と平

和のために尽力してください、と言われたのがきっかけで、再統一したのです。これを私は第三の奇蹟だと思っています。この件については前述の大沢さんの著書に詳しいのですが、いずれにせよ、歴史上で分裂した組織が様々な思惑や恨みつらみを乗り越えて再統一を果たしたということは、極めて少ないことです。

この再統一にあたって、双方の重要な立場にあった絵鳩毅さんや高橋哲郎さんが、同じ言葉で再統一の根本原則を語っておられます。それは「小異を残して大同につく」ということです。大同とは言うまでもなく反戦平和と日中友好です。おひとりおひとりの苦渋に満ちた選択の結果を一言で表せば、この言葉に尽きるということでしょう。その経緯については『帰ってきた戦犯たちの後半生』(1996 年新風書房)という大著に詳しく書かれています。これを読むと、二つの分裂した組織の双方がいかに苦悩苦闘しつつ再統一に踏み切ったかが、感動させられながら理解できましたが、それと同時に、現在の自分たちがいかに「小異」を言いたてて「大同」につくことが難しいか、という反省をも強いられました。

「小異を残して大同につく」これを言ったのは 1972 年に田中角栄が訪中して宴会の席で言ったんです。なぜこれを今思い出したか、文革は必ず小さいことで揉めるんです。皆さんもそうですね、誰かと意見の対立があったりする、それに対して自分が正しいとガンガン言います。言われた方も言い返す。どんどん、本来なら大したことのない話なのに感情的な対立になって決裂になってしまう。

文化大革命は毛沢東思想万歳と言って、毛沢東思想って何なの？　牛を大事にすることなの？　上海の紅衛兵たちが 1 年かかってパンダを捕えたことが毛沢東思想万歳だと。パンダを捕えるのに 1 年かかったことが、なぜ勝利万歳なのか、とこの本は笑っているのです。それなら半年ならいいのか、3 ヶ月ならいいのか、どんどん議論していくわけです。どんどんくだらなくなる。

中帰連が文革の影響で分裂した時に殴り合ったとか罵りあったとか、私は知らないので気楽に話せます。72 年に香港で林彪事件を研究して本を出しました。これは世界で私が初めてです。

毎日新聞で対談したアメリカのマイケル・カオという方が、「姫田先生、林彪事件について世界で最初に書いたのはあなたですよ」と。なぜ日本で林彪事件がガセネタだとか言われたのか。林彪万歳と言って 71 年に本を出した人がいます。出した途端に林彪が失脚した。笑えますか？笑えないですよ。本気でそう信じていた、林彪と四人組は素晴らしいと。香港に行ったらこれは女房と女房の戦いだと。毛沢東夫人と劉少奇夫人の戦いだと。そういう下世話な話はいいとして、マルクスレーニン主義・毛沢東思想が世界の反帝闘争と平和と民主主義のために必然だと思っていたところがあるよね。

丹羽さん（注：元中国大使・丹羽宇一郎）に聞きたい。気楽に来てくれるでしょう。丹羽さんも 61 年に就職しています。60 年安保を経て伊藤忠商事に入って、それから文革をどう理解し向き合ったのか。聞きたいですね。

≪質問≫

世界記憶遺産という発想ですけれども、日本からは去年、朝鮮通信使と上野三碑が記憶遺産に登録されました。例えば朝鮮通信使をやるには日本と韓国の両方の協力がなければとてもじゃないけれども登録されない。もし記憶遺産を申請するならば、中国側はどういう反応を示すのだろうか。逆に言うと中国側から出すのが筋ではないだろうか。例えば方正も同じですね。中国側からユネスコに申請するのであれば面白い動きだと思いますが、その辺はいかがでしょうか。先生は日本の立場から記憶遺産に申請したいというお考えでしょうか。

≪姫田≫

それは核心的な問題ですね。大沢君と私で記憶遺産登録の道筋、申請書まで準備していました。でも申請を出すのはどこに出すのかというと、ユネスコの場合は政府を通して出すのです。申請は偶数年で、次は 20 年です。それをやるには中国側がうんと言わないとダメです。2010 年にも反日運動がありましたし、難しいですね。中国には、日本に対して優しいことを言う人に対して批判するグループがまだいるのです。

先ほど大類さんが言った二分論がありますね。この二分論にも真っ向から反対している中国人がいるのです。撫順の戦犯の扱い方は間違っていると、周恩来も批判されています。中国側の意思が統一されて、日本側も安倍内閣の間は無理だと思いますが文科省で多少とも動いてくれれば。世界記憶遺産にしなければならないと私が思うのは、必ずこの先、歴史事実として消されていくからです。このままいくと、撫順の奇蹟を受け継ぐ会だって消えていきます。方正も同じです。両方が頑張っていかないと、この貴重な歴史事実そのものが消されてしまう。私はそれを恐れています。ご指摘ありがとうございます。

≪質問≫

15000 人が避難してきた中で、5000 人がなくなった主な原因は何でしょうか。

≪大類≫

方正で亡くなった 5000 人ですね。方正に行けば関東軍の補給基地があるということでともかく方正へ行こうということで集まってきた。そこで収容所に入ったんですけれども、発疹チフスなどの伝染病や餓死、寒さで冬を越せなかった。主にそういった理由です。

≪司会・森一彦≫　お時間ですので、以上で講演会を終了します。姫田さん、ありがとうございました（拍手）。

姫田光義（ひめた・みつよし）さんの自己紹介

1937 年、神戸生まれ神戸育ち。小学校 1 年生で縁故疎開（2 年生の夏まで 5 回も転校）、家は大空襲で焼失（疎開から戻った家はまたもや阪神淡路大震災で焼失）。この少年時代の空襲と病の恐怖感が今の平和と安寧を希求する原点（死の恐怖は感じていなかったが）。57 年に東京教育大学東洋史専攻に入学して初めて日中関係の不正常さを認識。うたごえ運動や 60 年安保に関わりながら日中友好運動にも関わる。65 年初訪中、その直後に「文化大革命」発生、歴史研究者として文革の歴史認識を批判する（文革批判の歴史論文）。

日本国際問題研究員時代の 72 年から 73 年、日本国駐香港総領事館特別研究員（加藤紘一さんの推薦で）現代中国・中国現代史の研究に専念（林彪事件関連著作）。75 年、中央大学に就職。ほぼ毎年、学生引率で訪中するも、撫順も方正も知らなかった！！

88 年から 89 年、天津南開大学に遊学（三光作戦関連著作。これを読んでくださった中帰連の方々から初めてお呼びがかかった）、「六四」に際会して台湾に避難（民主化運動関連著作、『アエラ』89 年 7 月号に「拝啓、鄧小平さま」を書き中央大学教授会から帰国命令を受ける）。2008 年、退職；現在、中央大学名誉教授、「中国帰還者連絡会」の後継組織「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」代表、雑誌『中帰連』発行人、「NPO 中帰連平和記念館」理事、「再生の大地；撫順戦犯管理所物語」団長、「旧陸軍登戸研究所（現在、明治大学平和教育資料館）保存の会」共同代表など。

『中帰連平和記念館』

住所：〒350-1175　埼玉県川越市笠幡 1948-6

最寄駅：東武東上線「鶴ヶ島駅」西口（タクシー10 分）

ＪＲ川越線「笠幡駅」徒歩 25 分

【開館日】「水、土、日」10:30～16:30(なるべく事前にご連絡下さい)

TEL&FAX：049-236-4711

E-mail：npo-kinenkan@nifty.com　HP: http://npo-chuukiren.jimdo.com/

対立・侵略・追放・和解

～ドイツ・ポーランド関係史から考える東アジアの隣国関係～（下）

木村護郎クリストフ

４．戦後の和解に向けた里程標

ドイツとポーランドは、戦後どのように関係を築いていったのでしょうか。東ドイツ（ドイツ民主共和国）の場合は、政府レベルでは同じ社会主義国としてポーランドと少なくとも表面的には友好関係を結ぶのですが、西ドイツ（ドイツ連邦共和国）では、西の隣国フランスをはじめ西側との関係修復を優先しており、ポーランドとの関係では、1945 年から 20 年間は目立った動きはなかったといえるでしょう。

その最初の一歩を踏み出したのが、1965 年にドイツのプロテスタント教会が出した『東方覚書』と呼ばれる薄い冊子でした。この冊子は、戦後 20 年たってもまだ東の隣人との関係が途絶えているという現状認識から出発して、その理由を問います。その理由は何かと言うと、ポーランド人からすると、ドイツ人が侵攻してきてポーランドを占領して支配したことが許せないという感情がある。一方、ドイツ人の方は、戦後、国境が変更されて、もともとドイツだった東方地域がポーランド領（およびソ連領）とされ、ドイツ系住民は追放された。そのことで、ポーランド人もドイツ人も相手国に対して否定的な感覚を持って今日に至っているということが書かれています。

そのうえで、同冊子は、この状況を打破するために、思い切ったことを述べています。すなわち、ドイツとポーランドがそれぞれ自分の立場の正当性を主張し合うだけでは、解決は得られないと指摘します。どちらもそれなりに正当性があるわけです。ポーランド人はドイツ人に支配されたということが言えるし、ドイツ人は、ポーランド人に追放されたということを言える。しかしどちらもこのように被害を主張しているだけでは、打開の道は見いだせない。よって、これ以上、（国際）法的な主張をそれぞれが繰り広げることは解決をもたらさないので、妥協を探さなければならないとしています。そして、和解には双方の意思が必要だが、まずドイツ側が自分の立場に固執することをやめる必要があると述べています。

具体的には、ドイツ系住民の追放は不正であったことを強調したうえで、ドイツが東方の旧領土に対する返還要求をやめて戦後のポーランドとの新しい国境を認めるべきことを示唆するのです。

これは当時としてはすごく思いきった提言でした。戦前の領土の４分の１を失ったことを認めよというのですから。日本の場合 ― ちなみに日本は全ての隣国と領土問題を抱える世界で唯一の国なのだそうです ― 例えば、尖閣諸島や竹島や北方諸島を放棄すると政

治家が言ったら、大事件になると思います。ドイツが戦後、ポーランドの管理下におかれた地域をポーランド領と認めることは、日本の国境地域の島々とは比較にならないほど大きな領域を放棄することにつながることでした。

一方、ポーランド側からも、同じ時期に働きかけがありました。全く示し合わせたわけではなくほぼ同時期に、ポーランドのカトリック教会の司教たちがドイツの司教たちに書簡を送ります。この手紙では、まず数ページにわたって、ポーランドがドイツ人にひどいことをされた歴史を述べています。「こんなにひどいことをあなたたちの国はしてきたのです」ということを訴えているといえます。しかし、最後に、ドイツ人の避難民もひどい目に遭ったことを述べてドイツ人たちの苦難にも言及します。そして、「私たちは手をあなたたちにさしのべ、(...)赦します。また赦しを請います。」と述べるに至るのです。

この二つの文書には興味深い共通点があります。まず、どちらも自国民の被害や苦難を明確に述べています。ドイツ側の教会の文書では、ドイツ系住民の追放は明らかに不当であると書いてありますし、ポーランド側の文書には、それこそポーランド史の苦難がこれでもかというくらい書きつらねてあります。しかしそれで終わり、ではないのが大切な点です。どちらの文書も、「だから謝れ」と相手国を非難するのではなく、あえて自分たちから和解に向けた一歩を踏み出す姿勢を打ち出しています。これは、通常、隣人との間で語られることが多い、罪の赦しと和解というキリスト教の精神を隣国関係にあてはめたものでした。

この２つの文書について、国内の反応はどうだったと思いますか。「教会は良いことをしてくれた」と歓迎されたと思いますか。それぞれの政府や世論の反応は全く逆でした。教会に対して、「売国者」、「裏切り者」、「越権行為」という批判が政治家からも人々の間からもあがりました。なぜ教会がこの問題に首をつっこむのだ、しかもあまりにも譲歩的な主張をするのか、という疑問や怒りがあったことでしょう。ドイツでは、ヒトラーが占領したのではなく以前から数百年もドイツ人が住んできた地域を失うことにつながる提言は、無理解をもって受けとめられました。またポーランドでは、ナチス・ドイツがドイツ系住民の存在を理由に一方的に侵攻してきたから最終的にドイツ系住民が追い出されることになったのに、なぜ自分たちがドイツ人に赦しを請う必要があるのだ、という反発がありました。

しかしこれらの文書が、それぞれの国のアイデンティティとも結びついた、どちらかというと保守的な立場とみられる教会から出されたことはやはりインパクトを持つ出来事でした。宗教改革の発祥の地ドイツでプロテスタント教会はしばしばナショナリズムと結びついてきましたし、ポーランドはカトリック教会が強い国で、高位聖職者である司教は大きな影響力を持っていました。このような存在感をもつ教会が、膠着していた状況をときほぐし、国民の意識のなかに、問題解決に向けた考え方の可能性を示したのです。

その後、ドイツでは 1969 年にブラントが首相に就任し、1970 年にはポーランドと条約を結んで国交を回復し、国境の現状を尊重することを確約します。ブラントはその一連の

東方外交でノーベル平和賞を受賞しますが、その地ならしとして、いわば和解の糸口としての役割を果たしたのが、これらの教会文書でした。ドイツのボンにある歴史博物館（「歴史の家」）には、ポーランドとの和解につながるものとして、ブラントの結んだ条約の展示の前に、教会の文書が展示されています。

ブラントの東方外交は、国内政治的には、薄氷を渡るような危ういものであり、ドイツ連邦議会でかろうじてぎりぎりのところで認められたものでしたが、そこまでいくこと自体、それ以前の、教会などによる世論の喚起なしには不可能だったでしょう。

それ以後、歴史との向き合い方についてさまざまな動きがありました。有名なのは、1977年に出された「ドイツ・ポーランド教科書勧告」です。ドイツとポーランドでお互いに関する歴史や地理を教える際の、共通のお薦めをドイツとポーランドの学者が一緒になって作りました。その後、時代が少しとびますが、歴史教育に関しては、近年、紆余曲折を経て、共通の歴史教科書をつくる動きが進められてきました。

もう一つ有名なのが、ドイツのヴァイツゼッカー大統領による戦後40周年記念演説です。この演説は、過去を心に刻むということで日本でもよく知られていますが、この演説の一つの要点は「追放」とどう向き合うかでした。関連する部分を二か所引用しましょう（強調は木村）。

「[ドイツが降伏した]5月8日になってから多くの人々の深刻な辛酸が始まり、その後もつづいていったことは忘れようもありません。しかしながら、故郷を追われ、隷属に陥った原因は、戦いが終わったところにあるのではありません。戦いが始まったところに、戦いへと通じていったあの暴力支配が開始されたところにこそ、その原因はあるのです（拍手）。**1945年5月8日と[ヒトラーが政権についた]1933年1月30日とを切り離すことは許されないのであります**（拍手）。」（岩波ブックレット『荒れ野の40年』10頁）

「何百万ものドイツ人が西への移動を強いられたあと、何百万のポーランド人が、そして何百万のロシア人が移動してまいりました。（…）この人びとに（…）持続的な将来の安全を確保すること（は…）**法律上の主張で争うよりも、理解し合わねばならぬという誡めを優先させることであります**（拍手）。」（同上、25頁）

追放を含めたドイツ人の苦難の原因を敗戦にみるのではなく、ヒトラーが政権についたことにみるという姿勢はその後、ドイツにおける公認の歴史観の基調になっていきます。さらに、法律上の正当性を主張しあうのではなく相互理解が必要であるという趣旨は、1965年の教会文書をふまえています。1985年当時、西ドイツはまだポーランドとの国境を最終的に認めていませんでしたが、ヴァイツゼッカーの演説は、国境承認に向けた後押しをするものでした。その5年後にドイツが統一することになった時、ドイツはポーランドとの国境を条約で正式に承認します。ドイツ統一を認めてもらうための取引という側面は否めませんが、このときにはすでにドイツの世論の大勢は、この国境承認に賛成でした。

その 10 年後には、ポーランド外務大臣のバルトシェフスキがドイツ連邦議会での終戦 50 周年行事における唯一の外国からの来賓として終戦 50 周年記念演説を行います。バルトシェフスキは、ナチスに抵抗してアウシュビッツの囚人になっていた経歴を持つ人です。そのような人が、ドイツ人強制移住の悲劇について、「数多くのドイツ人がその被害に遭ったこと、また加害者にはポーランド人も含まれていることを思い起します」、「私たちは戦争の結果、故郷を失った罪のないドイツ人たち一人一人の運命と苦難を悼みます」と述べました。当時のドイツ人の被追放者団体の機関誌をみると、ポーランド外相がドイツ人の被害とポーランド人の加害に言及したことが大きくとりあげられていました。

このような目立った出来事はあるものの、ドイツ人「追放」（ポーランド側では住民移動といった言い方がなされた）の語り方をめぐる対立はその後も続きました。記憶をめぐる対立を緩和していくべく、2004 年にポーランドなどの旧社会主義圏諸国がヨーロッパ連合に加盟した後の 2005 年に、ドイツ、ポーランド、スロヴァキア、ハンガリーの各国の文化担当大臣の声明に基づいて、「記憶」の対話をめざす「記憶と連帯のヨーロッパ・ネットワーク」（事務局はワルシャワ）が設立されます。それからまた 10 年たって、2015 年に同名の研究所が設置されています。

その一連の動きの中で、先ほど述べたボンの歴史博物館がドイツ人の「避難と追放」に関する展示を企画します。その準備過程で、2002 年にドイツ、ポーランド、チェコで意識調査を行って、避難・追放についてどう考えているかということを調査して、その結果をドイツ語、ポーランド語、チェコ語で刊行しています。展示は 2005 年から 2006 年にかけて行われ、展示カタログもドイツ語とポーランド語で刊行されています。

この展示の資料を見ると、二つの大きな特徴が見えてきます。一つは、ドイツ人の避難・追放だけをとりあげるのではなく、「追放の世紀」(Jahrhundert der Vertreibungen)のさまざまな住民追放のなかに位置付けていることです。第一次世界大戦後の国境線引き直しから 1990 年代のユーゴスラビアの紛争まで、避難を余儀なくされたり追放されたりした人々が多くいました。つまりドイツ人だけが被害を受けたのではなく、さまざまな強制移住の歴史の中にドイツ人の避難や追放という現象もあるということです。そのうえで、第二次世界大戦に伴う住民移動 2000 万のうち 1200 万人以上はドイツ人だったということが提示されています。

もう一つの特徴は、1939 年のナチスのポーランド侵攻が、戦後のドイツ人の悲劇のそもそも出発点であったことを明確にしていることです。最初に強制移住を始めたのはナチスだったのです。ナチスは占領したポーランドの西部をドイツ領として、多くのポーランド人を住みなれた土地から追い出しました。同じことを後にポーランド側がドイツ人に対して行ったともいえます。その意味で、追放という発想はもともとヒトラーのものであったことをはっきりさせるところから展示は始まっています。

戦後ドイツの歩みを展示する現在の同博物館の常設展示にもドイツ系住民の避難・追放の展示コーナーがありますが、そこを見る前に、ナチス・ドイツの蛮行に関する展示が置

かれています。なお、博物館の常設展の中で避難・追放をとりあげているのは一部屋だけなのですが、博物館附属の売店では、「避難・追放」関連の書籍を並べたコーナーが壁の一面を占めており、この出来事がドイツ現代史のなかで大きな関心を寄せられていることが、むしろ展示以外の点からうかがえました。

一方、ポーランドの方では、2017 年に、第二次大戦の発端の一つとなったグダンスク（ドイツ名ダンチヒ）に第二次世界大戦博物館ができました。とても充実した博物館で、アジアのことも含めて、第二次世界大戦を網羅的に扱おうとするきわめて意欲的な博物館です。私は 2018 年 3 月、この博物館に 7 時間ぐらいいましたが、じっくり見るには到底足りないほどでした。

この博物館にも、強制移住の展示室があります。床にはユーラシア大陸の大きな地図が描かれ、ヒトラーやスターリンによる大規模な強制移住をはじめとする第二次世界大戦に伴う人口移動が綿密に展示・解説されています。ここでも、ドイツとポーランドの関連では、まずナチス・ドイツがポーランド人、ユダヤ人などを追い出したということがとりあげられたうえで、ドイツ人が強制移住をさせられたということが扱われています。上にあげた二つの特徴について、ドイツとポーランドの両博物館の展示の構想は同じ基盤に立っていることが確認できました。もちろんどこに重点を置くかは異なります。ボンの博物館ではドイツ人の避難が重点事項ですし、グダンスクの博物館ではポーランド人が追い出されたことが重点的にとりあげられていましたが、これらの出来事をどのような流れにどのように位置付けるかについては、２つの博物館には共通理解があることがうかがえました。

５．故郷の未来のために　～元ナチス親衛隊員の和解に向けた活動～

ここまで、和解や記憶の対話に向けた事柄をいくつかとりあげてきましたが、ふたたび具体例にたちかえって、私にとって大叔父にあたる祖母の弟の活動を、多くの市民レベルの取り組みの一例としてご紹介したいと思います。彼は、住んでいたポーランド領ラーヴィチ（ポーランド語ではラヴィチ）で、将来、家業の工場を継いでポーランドで商売ができるようにという父親の方針で、私立のドイツ人学校ではなくポーランドの公立学校に入学し、ことばがわからず落ちこぼれかけたとのことでしたが、ポーランドのボーイスカウトに参加し、そこで友人を得て次第になじんでいったとのことでした。

写真１　1942 年の祖母とその弟（制服にナチス親衛隊の徽章がみえる）

しかしその後、ナチス・ドイツの侵攻によって住んでいたポーランド西部のラーヴィチ市がドイツに編入された後、大叔父は、「晴れて」ドイツ領となった故郷を守るべく、自ら志願してナチス親衛隊に入ります。写真１は、1942 年の祖母と弟の写真で、大叔父は武装親衛隊の制服を着ています。そして、戦後、復員するのですが、故郷と財産を失ったのみならず、元ナチということで、婚約していた人にも婚約を破棄され、失意と傷心のうちに、当時、労働者を募集していたドイツ西部のルール地域の炭鉱に行って炭鉱夫として働きました。

その後、ずっと故郷との縁はなかったのですが、退職後の 1993 年、ポーランド出身のドイツ人の集まりに出て他のラーヴィチ出身者と出会い、東ヨーロッパの体制転換後で自由に行けるようになった故郷を戦後はじめて訪れます。そして、ドイツ各地に住む同郷人のつながりとともに故郷とのつながりを再びつくりだすべく、1996 年にラーヴィチ同郷人会を作ります。標語は「過去を忘れずに未来を見る」というものでした。ラーヴィチ市と同郷人会は協定を結び、青年交流や故郷の発展のための支援を行うようになりました。

その交流の一環として、私も学生時代の 1999 年に同郷人会の人たちと初めて祖母の故郷ラーヴィチを訪ねました。そのとき、かつて祖母の住んでいた家の向かいに住むポーランド人の家に泊めてもらいました。この家族は 1939 年、ドイツ軍の侵攻後に東方に追放され、6 年後の 1945 年、今度は向かいの祖母の家族が西方に追放されたのですが、かつてこういった悲劇のあった場所に今、孫の自分がお世話になっていることに、感慨深い思いでした。

祖母の弟は 2011 年に亡くなりましたが、現地のポーランド人司祭と兄弟と呼び合うほどになった故郷の教会には 2014 年、大叔父を記念する石碑が建てられました（写真２）。

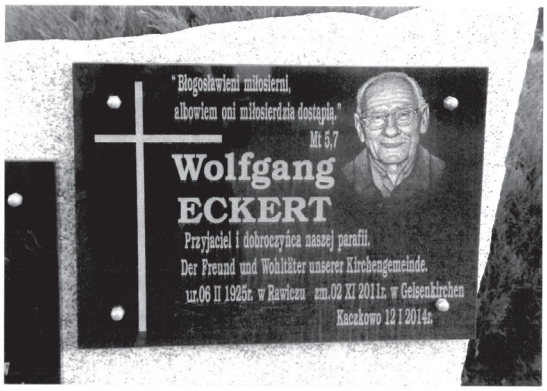


写真２　故郷のラーヴィチ郊外の教会に 2014 年に建てられた大叔父の記念碑

一度、大叔父に、ポーランドの人たちとの関係をうまく築くことができた秘訣は何かと聞いたことがあります。その答えは次のようなものでした(2004 年 12 月 16 日付け私信)。

「私が[関係づくりに]成功した秘訣は、自分が経験したとおりの真実を言うことです。その際、自分が戦時中、自ら武装親衛隊に志願してドイツのために戦ったことも隠しませんし、自分がポーランドの学校に通ってポーランドのボーイスカウトの一員だったことも言います。」

自分が関わったことを全て隠しだてせずに伝えるということが、信頼関係をもたらす自分のやり方だということです。かつてナチスの親衛隊員であったことをポーランド人の前で言うことはなかなか勇気がいることだったと思います。と同時に、大叔父は、和解を望むことも明確にして、故郷への惜しみない援助を行い、和解の気持ちを行動で示しました。また、ドイツ人の被追放者の間でポーランドに残されたかつての財産を取り戻そうとする動きが出たことに違和感を抱き、多くの同郷人会が加盟するドイツ人被追放者同盟には参加せず、独自の同郷人会活動を貫きました。

ここでとりあげた大叔父の 1990 年代以降の活動は、珍しい例ではなく、類似する多くの市民活動の一つでした。ポーランドで労働組合「連帯」への弾圧から戒厳令がしかれた 1980 年代から多くのドイツの市民がポーランド市民に向けて行ってきた草の根の支援活動は、ポーランドにおいてドイツ人観を向上させることに貢献したと言われています。

６．日本の私たちへの示唆

避難・追放をめぐるドイツ・ポーランド関係は複雑で、今回はいくつかの点をとりあげることしかできませんでしたが、この問題をめぐって、ドイツ・ポーランドの間の和解を

目指す人々によって培われてきた歴史観があるとすれば、次のような点があげられるでしょう。これらはある程度の広がりと影響力をもってきたものの、決して盤石なものではなく、ドイツとポーランドの関係は歴史認識をめぐって絶えず揺れ動いています。しかしそのなかで、今回とりあげたような出来事や活動を経て、一定の共通理解ないし方針として出てきたものであると思います。

①対話的な歴史観

一つ目は、独りよがりな歴史観を超えるということです。被追放者のドイツ人からみると、自分たちが被害者という意識が強いわけです。ところがポーランド人と話してみると、ドイツ人が受けた当然の報いだと思っているということが分かる。そしてポーランド人の苦難を知る。そういった対話を積み重ねながら歴史をみていくということです。

②多面的な歴史観

一つ目の点と関連するのは、ドイツ人もポーランド人も、自分たちは被害者であるだけではなくて、加害者の面をも持っているという、多面的な歴史観を持つことです。

③出来事の流れを切り離さない歴史観

さらには、出来事の流れの中で一部だけを切り離さないことがあげられます。つまり追放のみを単独でとりあげるのではなく、ヴァイツゼッカー大統領が言ったように、ヒトラーが政権に就いたことなくして敗戦後の混乱や追放はないということです。標語的に言うと、「1.30 なくして 5.8 なし」となるでしょうか。日本について言うと、「9.18 なくして 8.15 なし」（満州事変なくして引き揚げなし）ということになるかもしれません。

④多様な担い手による和解の動き

また、政府と民間の両面から和解の動きが行われたということも重要だと思います。おそらく政府だけだったらできなかったし、民間だけでもできなかった。それが合わせて初めてできることがあったのではないでしょうか。今日とりあげた例でいえば、教会が一歩を踏み出して、それをブラント首相がつなげて政策を進め、また社会主義圏の体制転換からドイツ統一にかけての公的な国境承認を経て大叔父のような市民レベルの活動がなされたといったように。

今回は、戦後の和解に向けた動きに焦点をあてたので、ドイツ・ポーランド関係は、日中や日韓の関係に比べて順調にみえたかもしれません。確かにそういう側面はあるのですが、実際にはくりかえし、問題がおきています。「めでたしめでたし」という終わりはないのです。近年も、いつまでドイツは犯罪者扱いなんだと、過去への批判的な取り組みをやめて自国の「誇り」（自己満足？）を取り戻すべきだという声がドイツで起きたり、ポーランドの政治家が、ドイツ批判を行うことで「愛国心」（自らの政党への支持？）を高めようとするようなことが起きています。そのなかで、上の４つの点を含む、過去への取り組みを続けていこうという「記憶の文化」がみられるのも事実です。

数年前、ドイツの文化大臣が来日した時に、講演で、ドイツの文化政策には柱が３つあ

ると言っていました。一つは、現代の芸術の振興。もう一つは、例えば、ケルン大聖堂のような世界遺産を含む歴史的な文化財の保護です。そして文化政策の３つ目の柱が記憶の文化を促進することだというのです。

歴史との向き合い方に関して、東アジアに関してどうしてもふれておきたいのが、「自尊史観」と「非難史観」です。日本において過去の過ちを認めることを「自虐史観」と呼び、自国の良い面のみを強調する態度は「自尊史観」といえるかもしれません。一方、韓国や中国には、日本を非難することにアイデンティティを見出す「非難史観」が見られるようです。そういう他国批判の背景にも「自尊史観」が潜み、他方で、中韓に対して嫌中嫌韓本などでうっぷんばらしをするかのような日本の一部でみられる態度にも「非難史観」が宿るようにみえます。二重写しになった「自尊史観」と「非難史観」の間には、「歴史戦」しかありえません。ここには、どちらにも、あたかも「過ちを認めたら負け」、「赦したら負け」、「譲歩したら負け」といった考え方があるようにみえます。

このような考え方はドイツとポーランドの間にもみられますが、ここではあえて、異なる発想の例を、ドイツとポーランドのそれぞれから紹介したいとおもいます。

1995 年にドイツ連邦議会で行われた追放から 50 年を記念する会で、保守政党、キリスト教社会同盟のシュトイバー党首は次のように述べています。

「私たちの戦後経験が示すのは、罪を認めることで損をすることは何もないということです。逆に、そのことによってはじめてヨーロッパ、そして世界に友人たちを得たのです。」（CDU/CSU-Fraktion im Deutschen Bundestag 1995: *Botschafter der Aussöhnung. Union würdigt im Bundestag Beitrag der deutschen Heimatvertriebenen zum Wiederaufbau in Deutschland und zum Frieden in Europa.* Bonn. S.30）

当時（および現在）のドイツの政権を担う保守政党の党首がこのように述べていることはやはり押さえておくべきでしょう。このような態度を弱さの証とみるのは見当違いもはなはだしいことです。一方、純粋に人道的な態度とみるのもナイーブにすぎるでしょう。自国の過ちを認めるような態度は、「歴史リスク」を軽減する戦略的な意味もあるという見方もあります（熊谷徹『日本とドイツ　ふたつの「戦後」』集英社新書 2015）。

また、ドイツの加害への赦しをしたためたポーランドのカトリック司教の一人は、「最初に赦した方が勝者なのです。」と述べています（Zyzik, Krzysztof & Ogiolda, Krzysztof (Hrsg.): *Erzbischof Alfons Nossol. Freude an Versöhung. Deutsch-polnische Brückenschläge*, Sankt Ottilien: EOS Verlag 2013, S.28）。ドイツ人の加害を赦すとともにドイツ人の被追放者に赦しを請うことをも述べたポーランドの司教たちの手紙は、ドイツ側が国境変更を受け入れやすくするための効果的な一歩でもあったと評価されています。

私が小さい頃、私と妹がけんかするときなどにドイツ人の母親から聞かされてきたのが、“Der Klügere gibt nach.”（譲歩する方が賢い）ということわざでした。今日ご紹介したドイツ・ポーランドの和解に向けた取り組みは、倫理的に素晴らしいという評価もあるかも

しれませんが、優れて現実的な戦略的な意味を持った行為でもあったことも押さえておきたいと思います。

７．おわりに

戦争末期にポーランドから避難したということを小さいころから母親や祖母などから聞かされ、また大叔父の活動を見聞きしてきたことで、私はこの問題に関心をもつようになりました。このような家族史的背景を原点としつつ、自分の研究としては、主にポーランドがヨーロッパ連合に加盟したあとのドイツ・ポーランド国境地域の変容、とりわけ越境協力や市民レベルの交流を調査しています。その現地調査のため、数年前、ドイツ・ポーランド国境の町フランクフルト・アン・デア・オーダー市に 1 年住む機会がありました。そこには、ドイツとポーランドの両方にまたがるキャンパスを持つヴィアドリナ・ヨーロッパ大学があり、私はそこの研究員をしていたのですが、同大学の学長が、「現在はおそらくヨーロッパの歴史上初めて、隣国が脅威の対象ではなくて興味の対象になった時代です」と言っていました。国境をこれ以上変更するのではなく、国境の現状を確定するとともに、国境をこえたつながりを強化するというのが、ドイツ・ポーランド関係の一つの到達点といえるでしょう。

フランクフルト・アン・デア・オーダーには、ある平和記念碑があります。といっても、通常、ドイツ語で記念碑は Denkmal（思い出す碑）というのですが、これは Mahnmal と書いてあります。直訳すると「警告碑」です。「平和のための私たちの警告碑」(Unser Mahnmal für den Frieden)と書いてあります。ドイツには「記憶の文化」の一環として「警告するための碑」というものがあるのです。銘文には、1945 年から 1950 年の間、ここに東方から移住させられたドイツ人の避難民たちを受け入れる収容所があったことが述べられた後、「私たち引揚者は警告する」と書いてあり、その下に、「人々よ、憎しみ合うことなく互いに和解しよう。そして平和と自由のために働こう。そしてお互いにかけ橋を築こう」とあります。

過去の苦難をただ思い起こすのではなく、難民収容所があったということを未来に向けた警告とするという形になっています。しばしば「未来志向」と「過去へのこだわり」は対立するように言われますが、この警告碑のように未来志向で過去と向き合う姿勢が、現在ドイツとポーランドが長い試行錯誤の際にたどり着いた歴史観の一つの証でもあると思っております。

以上で私の話を終わります。より広く日中とドイツ・ポーランドを比較した文献として、たとえば次の論文がありますので、関心のある人は参考になるかと思います。

庄司潤一郎「日中とドイツ・ポーランドにおける歴史と「和解」－その共通点と相違点を中心として」黒沢文貴／イアン・ニッシュ編『歴史と和解』東京大学出版会 2011 年、231-261 頁

≪注：本稿は 2018 年 3 月 17 日（土）、満蒙開拓平和記念館冬季講座での講演の後半部の採

録である（一部省略）。≫

（きむら・ごろうクリストフ：1974 年生まれ。上智大学外国語学部ドイツ語学科教授。編著書『言語的近代を超えて―＜多言語状況＞を生きるために』、『節英のすすめ―脱英語依存こそ国際化・グローバル化のカギ！』、『多言語主義社会に向けて』など。）

写真３　ドイツのフランクフルト・アン・デア・オーダーにある引揚者による「警告碑」

民間交流を通じて、友好的な未来を促進しよう！

～ハルビン市日本人残留孤児養父母連絡会訪日交流記～

名誉会長　胡暁慧

2018 年 4 月 30 日から 5 月 9 日、ハルビン市日本人残留孤児養父母連絡会（以下連絡会）名誉会長の胡暁慧は、中国に残っている日本人残留孤児と２世の代表５人とともに、日本側の招待に応じて七つの都市と九つの民間団体、15 人の残留孤児のもとを訪ねた。

今回の訪日では、多くの友好的な人々の熱心な助力と、日本の一般社団法人日中科学技術文化センター及び方正友好交流の会の保証によってスムーズにビザを取得することができた。また曹洞宗東岸寺の野田尚道法師から資金援助を受け、明治大学の鐘家新博士が通訳を引き受け、早稲田大学の中国人留学生劉聡が残留孤児をインタビューするなかで撮影を担当してくれ、我々の訪日を無事に終えることができた。

訪日には三つの目的があった。一つは帰国した日本人残留孤児の各地での生活状況を見ること、二つ目は長年交流してきた日中友好に関する民間団体を訪問すること、三つ目は「何有此生（この生あるは)」の著者である中島幼八氏が東京で開催した「中国残留孤児の足跡展」に参加し、５年前に私が日本で巡回展示を行った「中国養父母写真展」を再び東京で展示することだった。

野田尚道法師と再会

今回の交流の記録を以下に紹介する。

4 月 30 日、野田尚道法師に空港まで車で迎えに来てもらい、そこから新潟県村上市の東岸寺に行き、そこで旧満蒙開拓団青少年義勇軍長田末作氏と日本人残留孤児の配偶者に会った。在日中国人とも話をした。

野田法師は何度も中国を訪れたことがあり、そのたびに黒竜江省方正県で周恩来首相が建立を認めた日本人公墓と、残留孤児が養父母たちに恩義を感じて建てた中国人養父母公墓を参拝している。彼は中国政府と中国人民の、「以徳報怨（徳をもって怨みに報いる」という人としてのあるべき正しい道と深い思いやりに対して、深い感謝と敬服の念を表した。彼は日本では、熱心に公益事業や貧困救済に取り組み、多くの在日中国人が彼の支援を受けた。彼の事業は実態に沿った地に足の着いたものとして高い評価を得ており、彼の行動は我々赤十字会の活動の趣旨とよく似ている。共通の奉仕対象、共通の善意ある行いから、私たちは親密な友人となった。

５月１日、野田法師の案内で我々は新潟県庁を訪問し、県福利保健部が温かく迎えてくれた。私は連絡会の活動や中国人養父母の生活状況を紹介し、県側の職員は日本に永住する残留孤児の支援政策の状況について説明した。県側の紹介によると、1945 年以前には、新潟県から中国に１万３千人余りの日本人が中国に行ったが、多くは開拓団の人々で、日本が敗戦後には５千人余りが中国で亡くなったとのことだった。新潟県内の残留孤児はかつて７６世帯、３３９人がいたが、2013 年４月現在でそのうち 38 世帯 50 人余りが暮らしている。新潟県は支援法に基づいて、こうした方々に必要な支援を提供している。厚生労働省の 2015 年の統計によれば、日本全国では現在 2556 人の残留孤児と 4163 人の残留婦人

がおり、合わせて 6719 人であるとのことだった。

午後に、我々は新潟市役所の福利部総務課を訪れた。職員たちは、友好都市であるハルビン市からの来客である我々にとても親切に応対してくれた。市の紹介によると、県内の残留孤児の大半は居住地に新潟市を選んでいるとのことだった。また中国から帰国した残留孤児が最も多かった時期は２０００年で、市内に３０世帯４６人がいたが、２０１８年の統計では２４世帯３３人に減少したとのことだった。市役所の方々はさらに、連絡会が関心を持っている残留孤児の支援事業についても紹介してくれた。支援事業には日本語交流や日本語教育に関する事業、自立支援のための翻訳派遣事業や中国残留邦人支援事業などがあるとのことだった。

満蒙開拓平和記念館を訪問

以上のような交流を通じて、日本政府の関連政策について理解を深めることができた。胡暁慧は新潟日報の取材を受けた際、「日本の現状をハルビンに戻って養父母や家族らに伝えて、彼らを安心させたい」と話した。その日の晩には野田法師が歓迎会を開いてくれた。参加者は旧満蒙開拓団員や中国残留孤児の肉親探しの調査員、満蒙開拓移民の研究者、写真家、古楽器奏者、吹奏楽家など十人余りで、野田法師は中国を訪れた際に感銘を受けたことを回顧しつつ、日中友好が何代にもわたって伝わっていくことを心から願うと話した。胡暁慧は返礼として、野田法師の心からの招待と、用意周到な手配に心から感謝するとともに、野田法師に感謝状と書の作品を贈った。さらに来賓に「侵華日軍第７３１部隊罪証陳列館」の館長が自ら書いた、中日両国人民の平和的発展と友好の願いを象徴した平和の扇子を贈った。

５月２日には、野田法師は高橋健男氏に車を手配させて我々を長野県飯田市の下伊那満蒙開拓平和記念館に送ってくれた。高橋氏は多くの文章を執筆してきた、満蒙開拓移民の研究者である。満蒙開拓平和記念館では、寺沢秀文館長、飯田市日中友好協会の清水可晴会長、小林勝人理事長が私たちを長い間待っていて、連絡会の再訪を非常に歓迎してくれた。満蒙開拓平和記念館は 2013 年４月 25 日に開館し、同年６月には連絡会は中国民間団体として初めて記念館を訪れて友好関係を築いた。

2015 年には記念館の資金提供で、連絡会とハルビン在住の養父母李淑欄氏が日本に赴き、27 年間連絡がない李氏の養女に会えるよう助力して、日中両国で大きな反響を呼んだ。記念館は定期的に訪問団を組織して中国を訪れており、連絡会はホストとして迎え入れてきた。今では長く付き合った友達のように相まみえることが非常にうれしい。寺沢館長の案内で再び館内を見学したが、５年の間に新たな写真や遺品が増え、中国残留孤児養父母展と侵華日軍第７３１部隊罪証陳列館からの写真の一部も増設展示されて、記念館の展示はさらに完全なものとなっていた。多くの人がこのことを高く評価している。

夕方には、寺沢館長が 100 人が参加する歓迎会を開いてくれた。私は連絡会や中国の養父母の生活状況、孤児認定を受けられない方々が直面している困難について紹介すると、みなが共感してくれた。

歓迎会の後、記念館と協会が合同で夕食会を開いてくれた。寺沢館長、清水会長、小林理事長、日本の残留孤児代表の多田清司氏らが熱意あふれるお話をしてくれた。長野県飯田市役所保健部の職員も歓迎会に参加してくれた。胡暁慧は参加者に、日本でのゴールデンウィークにもかかわらず、家族だんらんをあきらめて参加してくれたことに深い感謝を述べ、参加者が中国、ハルビンに来ていただくことを歓迎し、日中の友好的な民間での往来を促進するために共に努力しようと述べた。また記念館に「中日千年国度、友好自古錦

長、援手共築睦隣、同心闊歩康荘（日中は千年以上の長きにわたる国家で、その友好は古来より錦のように輝いて長く、手をさしのべて仲睦まじい隣人関係を共に構築し、心を同じくして輝かしい未来に向けて闊歩しよう）」と書かれた旗を贈った。夕食会は温かい友好ムードに包まれる中で終わった。

残留孤児足跡展を観る

５月３日には長野から車で東京に到着し、黒竜江省東北数字出版伝媒公司の２人の元記者が残留孤児の大道武司、松田桂子、長安伊知子にインタビューをした。彼らは中国の養父母が自分たちを育ててくれた恩義を振り返るとともに、帰国してからの苦しさも語ってくれた。

５月４日、連絡会は早期に帰国した残留孤児の中島幼八氏が主催し、ハルビン日本人残留孤児養父母連絡会が共催する、「中国残留孤児の足跡展」と「中国養父母写真展」（今回が東京で３度目の展示となった）に参加した。

中島幼八氏は1942年に東京で生まれ、１歳のときに一家で中国東北部に移住し、日本が敗戦した後に中国養父母のもとで育てられた。養母１人と、３人の養父のもとで苦しいながらも成長して、1958年に日本に帰った。70歳のときに回想録「何有此生（この生あるは）」を執筆し、日本各地で講演活動を行って、「中国残留孤児問題研究会」を設立した。2017年４月４日には45人が参加する「清明節謝恩と巡礼の旅」を組織してハルビンを訪れ、国内外のメディアの注目を集めた。

５月５日にはシンポジウムが開かれ、胡暁慧は協賛団体の代表として講演した。胡暁慧は中島氏が数十年にわたって日中友好事業に身を投じてきたことに深い敬意を表し、展示会の成功を心より願うとお祝いの言葉を贈り、中国養父母写真展が再び挙行されることを嬉しく思うと語った。胡暁慧は、「歴史を忘れないことは、より平和で美しい未来をつくるためだ。中国の養父母と日本人残留孤児は歴史の生きた証しであり、決して忘れてはならない。日中関係が寒い時期から暖かい時期を迎えた今日、中国人養父母の大きな人間愛を発揚し、日中の何世代にもわたる友好を促進することは、歴史的にも、現実的にも大変重大な意義があることだ」と話した。

会議の期間中、東京在住の残留孤児で中国帰国者・日中友好の会の池田澄江理事長が忙しい中で宴席の場を設けて、連絡会の一行を招待してくれた。池田理事長は連絡会との幾たびにもわたる交流を振り返り、連絡会の活動を高く評価してくれた。双方は今後もさらに協力・交流して日本人残留孤児と中国の親類や友人の往来を強化することにたゆまぬ努力をしようと意向を示した。

養父母謝恩会を訪ねる

５月６日、連絡会一行は、横浜市に赴いて「中国養父母謝恩会」を訪問した。謝恩会の事務所では菅原幸子会長ら十人余りの会幹部たちが歓迎してくれた。さらに中華街の龍翔酒店で歓迎の昼食会を開いてくれ、30人余りが参加した。そのうち20人余りは帰国した残留孤児の２世だった。菅原会長は、２世たちを組織してこの活動に参加させたのは、彼らにさらにしっかりと日本人残留孤児と中国人養父母の親子の情を伝え、日中友好の架け橋を築いてもらうためだと紹介した。胡暁慧はあいさつで、「今日はこれほど多くの２世の方々とお会いできるとは思っておらず、非常にうれしい。日本人残留孤児は現在すでに高齢化しており、もちろん体力だけでなく精神力も以前のようではなくなっており、若い方々が日中友好交流事業をすることがとても強く求められている」と話した。胡暁慧は連絡会

のこれまでの活動の歴史や中国人養父母が残留孤児たちを気にかけていることを紹介し、若い世代が責任をもって日中友好の使者となって頻繁に中国に帰り、中国の親類や友人の情を深め、日中友好交流事業をしっかりと続けることを希望すると話した。一部の２世の方々は心を動かされて、「中国人養父母が私たち両親の命を助けてくれた。このような大きな恩義、大きな仁徳に私たちはお返しできるものがない。日中友好のために持てる力の限りを尽くしたいと願う」と話した。

５月７日、連絡会一行は千葉県に行って、ハルビン医科大学の于維漢校長が紹介してくれた、ハルビン市民のために 11 年間ボランティアで診療活動を行い、中国赤十字会の名誉会員の称号を得た吉岡稔氏のご夫人と、彼の生前の友人の秋葉二郎氏（彼は全ての財産を中国人留学生と日中友好促進活動に寄付した）に会った。胡暁慧はハルビンの養父母を代表して二人に感謝と祝賀、そして末永い友誼を望むと伝えた。

５月８日、埼玉県でハルビンから日本に帰った残留孤児を訪ねて、彼らの生活状況について聞き取り調査を行った。

訪日期間中の展覧会に参加した時を利用して、方正友好交流の会の大類善啓理事長、明治大学の鐘家新博士、日中帰国者扶桑同心会の島清会長、日中友好協会荒山支部の高月昭支部長、鹿児島の鬼塚建一郎氏、さらに田井千鶴子氏、間野徹氏、森川英男氏、吉奇玲子氏、版澤正光氏ら残留孤児と会談した。鬼塚さんは九州で義援金を募って 1000 万円余りを集めて、黒竜江省で中国養父母に感謝する記念塔を建てようとしているが、様々な理由からまだ実現していない。今回の機会を借りて我々に、ハルビン外事弁公室に彼らの希望を伝えてもらうよう改めて頼まれた。

日本の早稲田大学の中国人留学生劉聡は連絡会にいる未帰国の残留孤児の一人、郜鳳琴氏が大阪や熊本県を訪れるのに同行してその様子を撮影すると共に、通訳を担当した。

今回の友好交流活動は日本メディアの注目を集めた。「新潟日報」、「毎日新聞」、「南信州新聞」が今回の活動の様子を報じた。５月９日の連絡会一行は埼玉県から成田空港に向かい、帰国した

時間的に厳しい訪日交流活動だったが、円満に終えることができた。赤十字会に貴重な財産を残そうと、双方がともに努力して日中友好交流に貢献した。

（日本語訳：平賀拓哉）

旧「満州」史跡・名所をたどる平和の旅 に参加して

野田尚道

2018 年 7 月 16 日～23 日、縁あって戦争を語り継ぐ特別企画の旅に参加した。

成田から仁川経由で、大連・旅順・丹東、長春、ハルビン・方正、瀋陽と過去に日本が五族協和の王道楽土建設の美名の下に侵略した戦跡を辿る旅は、「戦争」というものが悲惨という言葉だけでは片付けられない、如何に人間を狂わせ、必然的に南京大虐殺に繋がっていく歴史を辿る旅でもあった。

日本人・元八路軍兵士と同行

今回の旅の特別企画の一つが、大阪府在住で、元満蒙開拓青少年義勇軍に 15 歳で志願をし、敗戦後八路軍の兵士となって中国に残留した藤後博巳氏 89 歳が同行して要所で体験談をお話し下さるという内容で、ほとんどの戦争体験者が口を閉ざして鬼籍に入った中で、今後日本を再び戦争への道を歩ませない努力をして行く上でも貴重な旅となるとの思いもあった。

遼寧省大連は、帝政ロシアの租借地となり、貿易港として発展、アカシアの街としても有名で、街並みも整備されたエキゾチックな港町であった。

日本が関東州として植民地支配していた時期から「大連は満州一大陸の喉首」「海の玄関」と位置付けて重視されていたという。

旅順は、軍港として歴史に翻弄された街で、１８９４ 年に起こった日清戦争では、当時旅順は世界の軍事専門家が「十万人の精兵をもってしても、半年は陥落させえないであろう」といわれる大要塞で、二十四の砲台には大小百余門の火器を備え、守兵 一万四千人 で固められていたというが、それを日本軍は半日の猛攻撃で落とした。

しかも、この戦闘で日本軍の死傷者が ニ百八十余人であったのに対し、清国軍の死者は四千五百人、負傷者は数え切れず、捕虜は六百人といわれている。

この時に日本軍は、数日の間に昼夜の区別なく、凄惨きわまる大虐殺を行ったとされ、中国側の資料によると、老若男女の区別なく犠牲者ニ万人余といわれている。いわゆる「旅順虐殺事件」といわれるものである。

この後、日本はロシア・フランス・ドイツの 三国干渉によって清国との間で不本意な下関条約を結ぶが、後に日本に遼東半島の領有を放棄させたロシアが清国政府から租借権を強奪するに及んで、1904 年 2 月から五ヶ月間に及ぶ日露戦争に発展し、その壮絶な攻防戦だった旅順の戦いで日本軍は十三万人の兵士を投じ、五万九千人の死傷者を出した。

“二〇三 高地”ここの石を割れば血が流れ出す ” といわれるほどの凄惨な戦いであったというが、登り口に飾られていた石群は、いかにも内部から血が滲み出したような色をした記念石であった。

登り口でカートを降り、なだらから坂を登りつめると、両軍の弾丸の殻を集め溶かして作ったという乃木希典命名の「爾霊山」モニュメントが立ち、頂上からは眼下に旅順港が眺められた。

この後、降伏を申し出たロシアと日本は有利なポーツマス条約を結び、中国大陸への侵略を深めていくことになる。

北朝鮮との国境沿いへ

旅の 3 日目、丹東（旧安東）の中国と北朝鮮との国境を流れる鴨緑江の畔りを散策する。この地は中朝貿易最大の物流拠点で、その約 7 割以上が通過するという国境の中朝友誼橋（鴨緑江大橋）、新鴨緑江大橋が並行して 架かり、一方は物流のトラックが往来し、もう一方は観光客が歩いて北朝鮮領の間近まで行ける橋で、先端部分が欠落しており、朝鮮戦争の際に空爆を受けた名残りとか。目を凝らすと北朝鮮人の人影も眺められた。

もう 1 ヶ所「一歩跨（いっぽまたぎ）」という、鴨緑江支流の細い川が国境になっている場所にも行き、北朝鮮の監視塔や農民の姿が更に良く眺められた。

この鴨緑江は、かつて満蒙開拓団の３つの渡満コースのひとつを流れる川で、当時の開拓民はどんな思いでこの川を渡って行ったのであろうか。

中朝国境往来の地とあってか、関心も高く、国内外の多くの観光客が詰めかけていた。

この後、約五百年前の明の時代に建立された万里の長城最東端にある虎山長城に登る。

万里の長城といえば、北京郊外にある場所が有名であり、過去に訪れたことがあるが、約ニ千四百キロメートルにも及ぶ大城壁を何代にもわたって築き続けた皇帝達の権力の絶大さには感服する。

長い間「山海関が明の長城の起点」と言われてきた中で、1990 年、中国の考古学者が調査を重ねた結果、虎山の長城遺跡が明代の万里の長城の東端であることが解り、1991 年 9 月にこのニュースが新華社通信を通じて全世界に発表されたという。

世界三大不思議といわれるインドのタージマハル、エジプトのピラミッド、中国の万里の長城、王や皇帝の絶大な権力の下で使役された夥しい数の民衆に想いを致すことも必要であろう。

この日の夕刻、丹東駅から長春駅まで中国 新幹線を利用して約 3 時間の移動の旅をした。スーツケースを抱え、添乗員を含め 4 3 名での列車の移動は年配者もおり、ホームまでの移動と短時間の乗り降りに気を遣ったが、トラブルもなく、車内はかなり混雑していたが、揺れも少なく、割と快適な 3 度の中国高速鉄道の旅を経験した。

吉林省長春は、1931 年に日本が占領して市政府を設置し、翌年に日本の傀儡国家である満州国を成立すると「新京」と改称され、その首都とされた。

市内史跡・名所で訪れたところは、満州国皇帝の仮御所「偽満皇宮博物館」、旧ヤマトホテル「春誼賓館」、長春公園などであった。

偽満皇宮博物館は、旧満州国皇帝溥儀の幼少期から日本軍の傀儡皇帝に君臨した時代、戦後の反逆者・戦争犯罪人・偽皇帝と指弾された時代までの生涯の事跡が展示されており、戦後の指弾された時代の写真には戦犯として法廷に立つ姿や床に頭を擦り付けて謝罪して

いる姿も写し出されており、満州国成立に伴い、日本軍に翻弄された溥儀の人生が良く理解出来る展示となっていた。

春誼賓館は、旧満鉄が沿線の主要都市を中心に展開していた高級ホテル網の一つ旧長春ヤマトホテルで、ダンスホールなど西洋人も快適に過ごせる設備を備え、往時を偲ぶことが出来るホテルとして現在も営業している。

長春公園は、もともとは沼地で戦後日本人の遺体が一時的に運ばれたという所で、言わば墓標のない“日本人墓地”である。敗戦前後に長春では日本人が七万人死亡したとされている。現在は公園として整備され、野外コンサートや社交ダンスを楽しむ市民の憩いの公園となっていた。

ハルビン市郊外の方正へ

旅の後半に訪れた黒竜江省ハルビン・方正は、私にとって忘れてはならない過去 5 回、新潟県自興会最後の会長長田末作氏が団長を務めた新潟県満蒙開拓民現地慰霊法要へ僧侶としての同行、方正友好交流の会主催の旅、18 歳の時に日本への帰国を果たした東京都在住の A 氏のルーツ探し同行の旅、そして今回が八回目となる懐かしい友好の地でもあった。

中国に存する日本人のための唯一の墓であるこの「方正日本人公墓」には、中国を侵略した日本の敗戦時に逃げ惑い、祖国への帰還を果たせず、この地に置き去りにされ、厳冬期に寒さと飢え、病に倒れ、命を落とした旧満蒙開拓民約五千人の遺骨（後に麻山地区で集団自決した遺骨も合葬）が埋葬されており、その公墓建立秘話には特別な思いがある。

1963 年に残留婦人で中国人と結婚した松田ちゑさんが砲台山の麓の荒地を夫と耕していた時に、野晒しにされていた同胞の白骨の山を見つけ、その遺骨の埋葬を県政府に願い出て、最終的に周恩来首相の「あなた方開拓民も日本軍国主義の犠牲者だ」と人道的な英断で人民政府の力で公墓が建立され、文化大革命の時にも紅衛兵から守られた墓で、近年は日中政府間の摩擦が起ったり、特に数年前に開拓民の名前を記した石碑へのペンキかけ事件以来、参拝自粛が続いており、日中友好の原点であるこの公墓に今回の旅でも公式参拝出来なかったことは大変残念なことであった。

ハルビン市内での夕食会では、特別企画のもう一つ日本人孤児の養父母と残留婦人との交流会があり、哈爾濱市日本遺孤養父母聯誼會胡暁慧名誉会長とは３度目の出会いであったが、それぞれの体験や思いを伺う機会が得られたことは戦争の悲劇とそれにも増して中国の人々の人間愛、国や民族の違いを超えた人類愛の精神を深く心に刻み、友好関係の構築と愚かな戦争を起こさない努力を続けていかなければならないと思う。

翌日の市内観光では、侵華日軍七三一部隊罪証陳列館、安重根義士記念館等へ、そして 最後の訪問地 遼寧省瀋陽では、世界遺産・瀋陽故宮、張学良旧居陳列館、撫順炭鉱、平頂山虐殺祈念館、日本戦争犯罪者特別軍事裁判所跡（撫順戦犯管理所）等を見学した。

七三一部隊では、１３ 年間に「マルタ（丸太）」と隠語で呼称された朝鮮・中国・モンゴル・アメリカ・ロシア人等五千人（三千人とも）が生体実験によって殺害され、平頂山では日本軍の撫順守備隊が村人にスパイ容疑をかけ八百戸、三千人（日本側では四百～八百人と）を虐殺したといわれる。

このような残虐な戦争犯罪を続けた日本軍人約千人（溥儀も）を収容所した撫順戦犯管理所においても、「日本人の主食は米であるから」と中国人民も口に出来ない米飯を供して下さり、一人も死刑判決を受けず帰国出来たという人道的な計らいも周恩来首相の尽力があったことを忘れてはならないことである。

周恩来首相は、1 9 7 2 年の日中国交回復記念のスピーチで「日清戦争以来日本は我が国を侵略してきた。特 に満州事変以来は奥地深くまで侵略して、人命、財産に多大な損害を与えた。われわれは、これを深い恨みに思っている。しかし、この恨みの八十年間も日中友好ニ千年に比べれば僅かな時間だ。だから我々はこの恨みを忘れるよう努力している。恨みを忘れてこれから日本と手を握って、アジアを強くしようじゃないか。アジアに向かって侵略するんじゃない。将来もし再びアジアの外からアジアを侵す者がおったら協力してこれを払いのけようじゃないか」と述べたと言われている。

これに対し、日本人は犯した罪を忘れず、深い反省をして来たのだろうか。戦後 、日本はサンフランシスコ講和条約調印発行後、日米安全保障条約、不平等な日米地位協定によって米国従属を強いられ、国は米軍基地が日本を護っているというまやかしを国民に植え付け（国家催眠）、平和憲法の解釈を捻じ曲げて米国の戦争に加担し続けて来た。現安倍政権で是が非でも改憲をして憲法 9 条に自衛隊の存在を明記し、更なる戦争加担を正当化しようとしている様子からは、独立国家とは程遠い姿である。

沖縄の米軍基地建設反対の民意に反する国の強固な押し付けを見ても、地方自治、国民主権を無視した非民主主義国家としか言えない状況である。

私自身、出会いによって、国家催眠から目覚め、2 年前から渋谷に事務所を構える「沖縄・日本から米軍基地をなくす草の根運動」に参加をし、武力によらない世界との真の友好関係を築いていく模索を始めている。

戦後 73 年を経、平成最後の今年、旧「満州」史跡・名所をたどる平和の旅に参加して改めて日中友好における周恩来首相の思いを深く受け止めている。

（のだ・しょうどう：1954 年生まれ。新潟県村上市の曹洞宗・東岸寺住職。沖縄・日本から米軍基地をなくす草の根運動運営委員。また、宗派や分野を超えたネットワークで、自殺志願者や自殺者の遺族に対する相談所として寺を開放し活動している）

去る５月に中国残留孤児足跡展開催

「この生あるは」「何有此生」著者　中島幼八

白山丸で舞鶴に帰還して６０年にあたり、2018 年 5 月４～７日の連休期間において、思い切って自分の体験に基づく個展を開催した。あいだの５日に「１９５８年における強制連行の劉連仁と残留孤児の中島幼八」の題で記念講演会（今井雅巳岐阜大学講師）を開いた。世田谷区の後援を得て、区の施設に置きチラシと、街の掲示板へのポスター掲示で宣伝を行った。そのこともあって、区内からの来場者や若い方が目立った。主催者として展示内容の構成や展示物の準備に力をさいた結果、非常に充実していると評価が高かった。

写真右：当足跡展のチラシ（表・裏面）、亜東書店によるデザイン。

写真左下：元八丈開拓団々長石井房次郎氏保管の開拓団資料：①引揚の乗船名簿、②団員各世帯の構成員と入植日、③都へ提出した団長報告書の下書き。

写真右下：行商人の天秤棒に載せられて運び出される場面（再現）。養母と李養父と陳養父（肖像画）の展示。

写真左：三番目の養父趙樹森さんは中島のほか、内田百合恵・袈裟春姉弟の養父でもあった。中央は彼が手作りした卓袱台（実物）。

左上：恩師梁志傑先生は直前の３月に逝去された。会場に等身大の写真を飾った。
右上：帰国時の品々を展示、出迎えののぼり、現地出発時に身につけた上着・鞄・帽子など。天津で着用した上着に「帰国日僑」のリボンをつけた。
左下：中島が哈爾浜養父母連絡会胡暁慧会長ほか、来場者に解説する。
右下：５月５日の記念講演会、来場者 150 名、若い方が目立った。

胡暁慧（日本人残留孤児養父母連絡会名誉会長）さんの訪日の旅から

新潟県村上市の東岸寺で。胡さん（左）、野田住職（右）

残留孤児足跡展で講演する胡さん

足跡展で。左から黒竜江出版集団の李政、
胡、大類、鐘家新・明治大教授

前列左端が石金諧、その右、胡さん
（横浜の訪問先、養父母謝恩会で）

「花がすき　歌がすき　平和がすき」
日中友好を願って加害を歌う

紫金草合唱団・再生の大地合唱団　　大門高子

南京理工大学の「和平園」と名づけられた　紫金草の花園

1　はじめに　　空襲の被害　記憶のない戦争体験

私は、昭和２０年生まれの終戦っ子　記憶のない戦争体験者です。終戦の一月前、生まれて１０日目に宇都宮空襲の火の中、母親に抱かれて二荒山神社防空壕に逃げて生き延びたと兄から何度か聞かされたものです。

１０数年ほど前、その防空壕に兄と姉、新聞記者の人や戦跡保存の会の人と一緒に中に入ることができました。庭の持ち主によると戦後始めて入るだろうとのことでした。にぎやかな街中にひっそりと残っていた防空壕の入り口は、小屋で隠れていて低かったものの、中は思ったより広く不思議な空間でした。40 人ほど中に入ったそうでしたが、すぐ近くの防空壕や街中ではたくさんの人が焼け死んだとのことでした。

戦争は多くの人の人生を壊してきました。その時生き延びたかどうかも本当にわずかな

ことの違いや運もあるでしょう。今生きていることの幸せを思い、時々話題に上る残留孤児の人生も他人事とは思えませんでした。もし私の両親が満州に行っていたら私も孤児になっているか死んでいたかもしれません。今いる二人の子どもたちも生まれてはこなかったわけで、命は１人の存在だけではなく長い長い命のつながりをつなぐかけがえのない大事な存在なのです。
記憶はないけれど戦争体験は私の人生の原点でもありました。
　今という時期　語り伝える貴重な人がいなくなる時　語りつないでいく世代がどう受け継ぐか大事な時だとしみじみ思う今日このごろです。
≪上の写真は、紫金草バッジをつけて取材に応じた時のもの。毎年記念館や南京テレビ局からも十万個の紫金草のバッジが配られています≫

２　南京事件の加害を合唱「紫金草物語」で

　その後私は教師になり「教え子を再び戦場に送るな」という戦後の教師たちの決意に強く共感するものがあり、演劇や歌などの表現活動を通した平和教育は私の実践の柱になりました。
　日頃、空襲や原爆を絵本や紙芝居や歌などにして平和の大切さを伝えてきましたが、被害の前に加害があったことを学ばねばと思うようにもなりました。当時南京事件は自虐史観ということで、きちんと向かい合うことが避けられるようになってきていましたし、子どもたちにどう教えるかということはとても難しいものがあるとも思っていました。
　昭和４０年ごろ朝日新聞声蘭で道端に咲く美しい紫の花の名前のことが「はなだいこん」談義として話題になったことがありました。花は、南京から持ち帰ってきて撒き広めてきた兵士がいたというのです。この花の由来を捜し求めて 20 年。日中戦争の頃、南京紫金山の麓から花の種を持ち帰り、鎮魂と平和を願って撒き広めてきた花だと知りました。強い花だったこともあり　平和への思いに共感する人たちの手によって花は全国に広がりました。加害の戦争とこの花の歴史を合唱朗読構成にしたのが「紫金草物語　ー不忘歴史　面向未来ー」です。組曲として 12 曲の合唱と朗読の構成にし、子どもや若者にも読んで貰える様に「むらさき花だいこん」という絵本も創りました。
　初演の後２００１年に、在日の中国の人に背をおされ南京での演奏に取り組むことができました。第一回目の公演に全国から 200 人が参加。忘れられない感動的な演奏会となりました。その後紫金草の歌は全国に広がり、広島、関西、金沢、千葉、宮城、東京などに紫金草合唱団が生まれネットワークとなり今も歌い継がれています。海外での公演も、南京　北京　上海　台湾　ニューヨークと 12 回続いています。南京や中国では今では紫金草は日中友好平和の花として知られるようになり、様々な行事に取り

組まれるなど、大切に位置づけてくれています。南京虐殺記念館１万人式典のフィナーレで市民と一緒に「平和の花紫金草」と「愛で地球を包もう」を歌ったこともありました。南京虐殺記念館広場での紫金草手描き行動にも驚かされました。

南京市民と共に芸術ホールで　紫金草「和平之声」

紫金草手描き行動

3 撫順の奇蹟を受け継いで中国東北部を行く

「再生の大地ー撫順戦犯管理所」で伝えたいこと

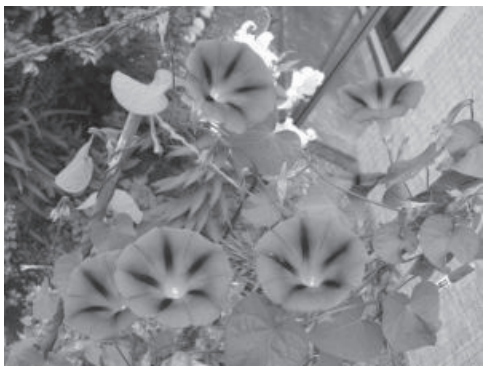
そして次に手がけたのが撫順戦犯管理所をテーマにした「再生の大地」でした。

戦後シベリアに抑留された６０万人のうち約１０００人が再び中国に戻されて６年間戦犯として撫順戦犯管理所に収容されました。葛藤を越えた中国人の職員の赦しの思想と加害を認めた戦犯がどう変わりどう戦後を生きていったかの人間ドラマです。それは「撫順の奇蹟」とまで言われました。国際主義や周恩来とのかかわりなど、方正友好交流の会とも共通のテーマを描いています。先日日中科学技術文化センターの４０周年での集いの第一部で短縮版を聞いていただきましたが、皆さんには是非いつか全曲を聴いて頂きたいと思っています。構成は以下の 12 曲と朗読で、歌あり　朗読あり　踊りありで、わかりやす

く構成し作曲していただいています。戦後帰国してから加害を証言し、日中友好に取り組んだ中国帰還者連絡会(中帰連)の皆さん方10数人のお話を直接お聴きし実際の歴史　証言などを基にしながら構成しました。今はもう亡くなられ貴重な取材だったと思います。今後は語り聞かせていただいたことを語り繋いでいくのは私たちの責任だと思っています。以下が「再生の大地一撫順戦犯管理所一」の構成です。

合唱朗読構成「再生の大地一撫順戦犯管理所」作構成大門高子　作曲安藤由布樹

１序曲　大地　　２満州国撫順　　３平頂山事件　　４シベリアから
５覚醒へ　６学ぶことは　７認罪　鬼から人間へ　　８再生の讃歌（蒙古踊り）
９赦しの裁き　　１０命ある限り（中国帰還者連絡会）終曲　撫順の奇蹟
１２　撫順の朝顔　目ざめの花　（前事不忘　後事之師）



もう一つ花にちなむ歌の話です。帰国する時、管理所の職員の人から「今度来るときには武器ではなく花を持ってきてください」ともらった花が赦しの花と呼ばれているテーマの「撫順の朝顔」です。

「再生の大地」は　撫順の奇蹟といわれるほどの赦しと日中友好の友情が育ちました。

１2曲で３０分強の長さ､歴史的な背景や人間としての葛藤　変容を描くのは大変難しいものがありました。2012年の初演以来、中国大使館や「戦争と平和展」、文化祭、そして中国では、北京国際放送局主催で国家新聞出版広電総局ホールでの演奏、撫順戦犯管理所、中国の東北大学などで演奏してきましたが、聴いてくださる皆さんは「紫金草物語」と同様いつも大きな懐で受け止め感動して聴いてくださるので、ほっとしてきたものです。

方正で引き揚げの時たくさんの犠牲者がいたことの報告が周恩来の元に届いた時日本人公墓を建てることを認めてくれたとのこと。撫順でも１人の死刑も無期懲役もださなかったのには周恩来の指示があったとのことでした。もともとに中国には深い東洋思想があり国づくりも人間的な思想が生きていました。引き揚げの時も残留孤児の皆さんも中国の人たちにたくさん助けられたということはいつも語られています。「再生の大地」の中でもそのことを大事に描きたいと思いました。演奏では、団長の姫田先生が中国語を駆使して演じる周恩来のせりふは多くの人々に感動を与えてきました。以下は台本の一部。

ナレーション　中国は新しい国づくりに燃えている時でした。指導部は職員たちに　こう伝えたのです。
男声ソロ　　なぐってはならない　罵ってはならない　死なせてはなりません
　　何があっても人間は人格を尊重すべきです
周恩来　　私は周恩来です．たとえ鬼であろうと罪を認めて良心を取り戻すなら人間に戻るに違いありません。私たちのこの正しさは、二十年後にきっと証明されるでしょう。
職員　　それは、人民軍の規律でもあり　自分との苦しい闘いの日々でもありました。

方正の人々や中国の政府の皆さん、方正友好交流の会で大事に伝えている国際主義なる考え方は　再生の大地合唱団で歌っている大事なメッセージでもあります。

日本に留学した中でも培われた周恩来の人間性、日本人公墓を守って下さっている方正の皆さん。中国の人々の懐の大きさ、撫順戦犯管理所の裁判では 6 年かけて取り組み、1 人の死刑も無期懲役もださず、全員日本に帰国させたのです。撫順や方正のことをもっと多くの日本人が知るべきだと思います。私自身も知るのが遅すぎました。

方正で開拓団の遺骨を集めて供養する努力された松田ちゑさんは文革中、3 年も逮捕されもう少しで死刑になるところだったそうです。幸い釈放され、1993 年には日本に帰国できて東京の板橋という我が家に近いところに住んでいらしたとのこと。お会いしたかったと改めて思ったことでした。

4　中国の若者たちに日中友好の心を伝える

撫順一中（日本で言えば高校）の文化祭に招待さ「再生の大地」を演奏する

合唱団はこの数年撫順の高校生と交流してきました。団員たちは「撫順の奇蹟」といわれるこの精神を特に若い人たちに知ってほしいと思っていたのです。日本への修学旅行で来た時「再生の大地」を聴いてもらい団員と交流し、その後ホームステイに別れました。すると帰国後、「家族や他の友達にも聴かせてほしい」と文化祭のメイン演目として演奏会を企画してくれたのです。今回その企画から　中国東北への旅が実現することになりました。

オリピックセンターで交流の

今回の旅では、40 名弱の団員とサポーターも含めての取り組みになりました。我が家でも二年にわたって引き受けましたが、素直でとても楽しいホームステイの時間でした。みんなとても素直で積極的でした。学校での文化祭当日は、ホームステイをした子どもたちもニコニコと私たちを迎えてくれました。日本でのたった二日ばかりのステイでしたが、時々来るメールでは「大好きなおじいさん、おばあさん、みんなで待っています」とありました。演奏では、200 人ほどの高校生が中国語に訳した台本を見ながら真剣に 12 曲の演奏を聴いてくれ

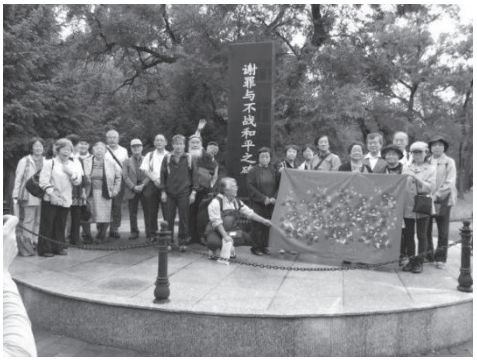
オリピックセンターで交流

ホームステイで東京の家庭を訪問最後のフィナーレでは「前事不忘　後事之師（チェンシーブーワン　フォーシージシー）」のところでは全員が立ち上がって一緒に歌い、鳥肌が立つような感動を覚えました。左の写真は文化祭での演奏後

ホームステイをした高校生の家族と交流会をした時のものです。

我が家に泊った劉君は、日本から帰るとすぐに撫順戦犯管理所にも行って見たり、日中友好協会に入るにはどうしたらよいかと問い合わせをしたりもしたそうです。その家族は来日前には、不信感を持って他の父母を巻き込んで校長室まで旅行への疑問を投げかけに訪れたそうですが、息子さんが帰って日本での東京での交流会やホームステイでの様子を聞いて感動し、日本への気持ちを大きく変えたそうです。演奏終了後の交流会で、その親御さんが代表でとても嬉しいいい挨拶をしてくれました。心通い合わせた草の根交流ならではの結果だと思いました。

撫順戦犯管理所　中帰連　謝罪の碑



７３１部隊の謝罪為不戦和平之碑

５　そして方正へ（日本人公墓）

９月１２日の文化祭出演の後に中国東北部のハルピン、方正、長春に向かいました。方正へは「一度行きたい」とかねがね思っていました。

わたしは中国に何回となく行ってきましたが、南京が中心でした。再生の大地合唱団の団員も、瀋陽　撫順には何度も行っていますが、中国東北地方にはほとんどの人が行っていませんでした。

日中の歴史と友好を考える上では中国東北部の歴史の痕跡を見てくること、学ぶことはとても大事だと思います。侵略と悲惨な戦争の被害の後が７０年たった今も色濃く残っているのです。今回は思い切って前述の企画になりました。学習意欲の高い団員が多いですのでよくぞ 40 人からのメンバーが参加したと思います。今回、時間は短かったけれど　行った人たちも「行ってよかった」と満足したようでした。

ハルピンの 731 部隊平房の記念館、そして方正の日本人公墓、そして偽満州国の中心都市長春と難民収容所などあったところなどこれまでよんだ本など多くの記録がよみがえってきました。勉強するのに今回はとてもいい機会だと思いました。７３１部隊の記念館でも撫順戦犯管理所で生活した中帰連の皆さんの証言が大事な役割を果たしていると思いました。

なかなか行かれない方正まで行ったのですが、地元の方と十分な交流ができなかったのは残念でした。時間の関係もあったかと思いますが、あわただしい時間であり、せっかく来て下さった（大類さんの紹介でお声をかけさせていただいた方）外事弁公室の方などにも、失礼なことになってしまったのではないかととても気になりました。旅行社の方も高速鉄道の事故や尖閣の問題などのこともあってペンキ落書き事件等があってのことか　と

ても過分に気を使ってらっしゃるようでした。せっかく時間をかけて行ったのに残念でした。日中関係の不協和音も多くは日本側に問題があり、中国人を怒らせるような政治家の発言や動きを繰り返し報道するテレビ局も問題かと思います。テレビなどで何度も繰り返すデモ騒動も　国中が騒乱状態かのような取り上げ方も、中国へ来て見ればほんの一部であり、以前来た時も戦犯管理所では外で食事をするのは危険なので、と職員の皆さんが手作りの野菜や鶏をつぶし、カーテンを取替え、食器を新しくして歓迎してくれたことがありました。その時はホテルに缶詰になって朝の散歩も控えましたが、国に帰ると「大門さん　袋だたきに会わなかったですか」とまじめな顔で言われて驚いたものです。マスコミの影響は怖いものです。マスコミはいつも悪意をこめて、繰り返し反中国になるような情報を流します。デモの時もどこにも騒動は見受けられませんでしたが、なにか起きたら困るとも思ったのでしょう。ホテルに缶詰になるような対応もありました。

「写真を撮らないで」「大きな声をださないで」「歌は歌わないで」など、ここに方正の人が公墓を立ててくれていることに感謝の気持ちを伝えたいのになあと思いながら公墓をあとにしました。次回行く機会があれば　もっと交流できる時間が取れるようにしたいとおもいます。それでも今回の旅は　再生の大地合唱団にとっても非常に貴重な学習の旅だったと思います。

広島の団員中野勝さんは高校の先生ですが、２年ほど７３１部隊記念館の中国語を日本語に訳すなどの仕事をされていました。大谷猛夫さんは南京事件、平頂山事件　毒ガス問題など日中の歴史問題などの研究をよくされていて詳しく、戦後保障の裁判等にも長いことかかわってきています。長いバスの旅の中でもたくさん学びながら移動しました。最近も「遠い国」や「どこにもない国」などのドラマがあり、この夏も掘り起こしてくれたというドキュメントの紹介が続きました。騙されることのない目を持って歴史の流れに立ち会ってゆきたいと思います。

外は豊かな実りの穂波がゆれるいい季節でしたが、バスの中ではガイドの馬さんリードで「松花江のほとり」の歌や中国版メロデイの草原情歌」の歌を歌ったのもとてもいい時間が過ごせてよかったと思います。

葫芦島からの引き揚げも中国人民からの助けの力も大きかったと多くの人が語っています。残留孤児の養父母も然りです。養父母の助けがなければもっと多くの日本人の子どもが凍土に埋められたことでしょう。方正の日本人公墓の存在は、撫順の戦犯管理所とともに、加害の事実を反省する場所でもあります。多くの国の人々が一緒に働き、一緒に生きて考える場として　みんなで大事にして地球で生きていけるといいなと思います。国際主義を広げてゆきたいと今改めてそう思います。

６　終わりに　いつの日か撫順　瀋陽で演奏会

引き揚げ残留孤児の作品も

撫順ではいつも朝の労働公園等に散歩に行き、朝市をのぞいたり市民の皆さんが歌う会に参加させていただくのが楽しみです。(南京でもどこででもですが）今回の朝の歌の会も管弦楽の伴奏でなかなかのものでした。以前交流したことのある合唱団の人も歌っていま

した。　合唱団の皆さんと一緒に　またいつか　撫順　瀋陽の街で「再生の大地」を市民に聞いていただく演奏会ができたらと思っています。
もう一つ　今回の旅で新たに思ったのですが、中国東北部にはいたるところに開拓団があり　日本が侵略した爪あとが残っているところです。前回の旅では葫芦島にも行きましたが、引き揚げや残留孤児の傷跡は忘れてはならない歴史です。日中友好の三部作として
引き揚げ　残留孤児の作品の創作を考えてきています。ＮＰＯ中国帰国者・日中友好の会合唱団の皆さんや　華僑の合唱団の皆さんとも一緒に歌う取り組みを進めて来ていますが、仕上げを急がなくてはならないと思っています。今回はいい学びの機会になりました

また今回　昨年の夏、幅 20 メートルの葫芦島の絵の展覧会を東京で開いた王奇希さんご夫妻が撫順まで演奏を聞きに来てくださいました。（今絵は舞鶴引き揚げ記念館で展示中）引き揚げ者 500 人の迫力ある素晴らしい絵です。飯山達夫さんの写真をイメージにして　中国人の思いを重ね迫力ある絵をダイナミックに描いていて素晴らしい作品になっています。引き揚げてこられたのであろう年配の方々が、絵の前で慟哭している姿を何人か見かけました。
戦争体験が直接聞けなくなってきている今　私たちは戦争への思いをどう受け継いでつないでいくか、、、歌も絵も映画も大きな役割を持つと思いました。
引き揚げ、残留孤児をテーマにした合唱朗読構成を今創作中です。
いつか皆さんで歌ってほしい　聴いてほしいと思います。多くの人が参加して繰り返してはならない国際的な諍いや暴力が世界中で絶えません。未来の歌として歌えるような作品ができたらと思っています。

（おおかど・たかこ：　終戦の年１９４５年生まれ。元小学校教師。これまで　教育　地域の歴史　公害　平和　日中友好の「紫金草物語」や「再生の大地」各種の企画や演出。ミュージカルや「王子の狐　願いの石」「幸せ谷命の森ものがたり」「虹色のえんぴつ一自主夜間中学校一」など。合唱組曲の作詞や演出等。絵本「むらさき花だいこん」「やくそくのどんぐり」等創作と演出。）

ありがとう飯白さん、ご苦労さまでした飯白さん

～悲報、飯白栄助さんを偲ぶ～

大島　満吉

関東地方は観測史上初めてという6月29日梅雨明け宣言があった。

ところが、7月４日頃から降り続く大雨が九州、四国、中国地方に大洪水をもたらし、120人を超す死者を出す大惨事が起きた。常々、異常気象が心配されていたが、世界中に今まで例のないと言われる酷暑、寒冷、洪水、地震、山火事、噴火、津波、ハリケーン等のニュースが飛び交う昨今である。

突然の訃報に驚く

高齢者にとって戦争を振り返る8月が近づいてきた。色々と行事を企画する中で、飯白栄助さんにご案内状を出したところ、翌日、奥様から電話をいただき、飯白さんが逝去された事を知り、仲間を失う狼狽を味わった。ご病気とも知らなかったし、余りにも唐突だったからである。聞けば、肺がんを患っていたそうである。

6月12日、85歳で人生の幕を閉じた。

飯白さんが所属した団体は多い。どの団体にも中心的な役割を受け持ち、頼りにされている第一人者だったから休む暇が無かったのかもしれない。

興安街命日会では三回ほどご一緒に中国訪問をすることが出来た。

葛根廟事件の残留孤児であるウユン（立花珠美）さん、及び陳秀英さんの来日の際には必ず歓迎会に出席して下さった。8月14日の葛根廟事件慰霊祭には、ご縁をいただいた2001（平成17）年から連続して出席いただいた。

「ちば中国帰国者支援交流の会」を主宰し、帰国残留婦人及び、残留孤児との交流を図り、法的支援の道を開いてこられた。この千葉の団体にも葛根廟事件からの残留孤児が二人居られる。一人は足の不自由な山原道夫さんであり、もう一人は柴田久雄さんである。この会に所属されていた人々は飯白さんの献身的な数々の支援にどれほど癒され励まされたことだろうか。

方正の総会で講演

方正友好交流の会（理事長・大類善啓）にも力を入れて手伝っていた。そこで講演も行った。自分の戦時体験と中国に残って解放軍に所属して行動した話もしてくれた。この人の話は難しい話ではなく、少年時の純な行動の所為か多くの質問が集中し盛り上がっていた。

年に2回発行される会報「星火方正」の全国向け発送を毎回手伝っておられた。その作業量は想像以上に大変だったと語っていたことがある。その「星火方正」にも残留婦人の帰国支援の様子を寄稿したことがある。

自分が13歳で親を失い、姉と共に中国での生活を余儀なくされた体験から、女性が生きて行

く困難さを身にしみて知らされた体験の故に、残留婦人への思いやりが深いのだと思う。

飯白さんが満州へ渡ったのは東京荏原郷開拓団の一員であった。六年生になる4月に興安街郊外にある開拓団部落に入植した。学校には1年だけ通った筈だが、その時の様子とか卒業してからの農作業とか逃避行した一ヶ月はどうしたことか、記憶の中で空白になっているという。戦乱の恐ろしさとか父親との死別とか、ついで母親との別れなど、人生最大の困難を迎えた筈なのに、どうしてもその間の結びつきがつながらない。恐怖が消してしまったのか姉がいたので自分で生きる手段を探す必要がなかったのか、今でも原因が分からないと話していた。その開拓団も全体で六割の人が日本に帰れない悲劇の開拓団となっていた。

東京荏原郷開拓団殉難者慰霊碑保存顕彰会（浦野栄一代表）の副会長を長く務めている。東京開拓団も高齢化が進み、今では二世の人も飯白さんが最も若手に近く、現地訪問したメンバーはもういないというに近い。

副団長であった足立さんが残してくれた東京・品川の朗惺寺の慰霊碑を継承する団体の大黒柱とも言えるのが飯白さんなのである。

飯白さん、ありがとう

細見でひょうひょうとしたスタイルの飯白さんは、いつも謙虚で人に優しい人だった。恩義に厚く、中国訪問の際は朋友と連絡し合い、昔話に興ずるのが常であった。日本人を友として付き合ってくれた中国人に対しては何十年経ようと忘れない。負い目のあった自分に対等に付き合ってくれた嬉しさをこのような形で表現したかったのでしょう。

前出の山原道夫さんは車椅子の生活である。

2015 年8月に、命日会が残留孤児をご招待する特別慰霊祭を催した。名称は「内蒙古帰国者と語る会」である。その時、山原さんを千葉市から同行してくれたのが飯白さんである。

山原さんは車椅子でも電動の高級車だった。改札口をくぐる時に駅員から言われた。「この車椅子は電動なので自動車扱いになり電車には乗せられません。普通の車椅子にしてください」との話である。

会に出席するのには時間の制約がある。一度自宅に帰ってから乗り換えるのでは時間を要するので困ってしまった。それでもそれを決行して会場まで汗だくで来てくれた飯白さんには頭が下がる。

人の為、会の為、地域の為に、晩年を捧げた飯白さんのような人は国で表彰してほしい。その分をご家族の方は犠牲を強いられたかも知れません。外のことばかり優先なの・・・って。

ご本人は満足な一生だったのではないでしょうか。私にとっても記憶に残る飯白栄助さんの一生でした。

ひょうひょうと逝ってしまった飯白さん。ありがとう飯白さん。ご苦労さまでした飯白さん。

感謝を込めてご冥福をお祈りいたします。

（おおしま・まんきち：1935 年生まれ。群馬県出身。旧満州国興安南省興安街に住む。パナソニック系列の会社で 40 年を過ごす。訪中歴9回。葛根廟事件の生存者。現、興安街命日会代表。私製本が8作品ある）

中国等残留孤児・婦人の帰国と生活支援・教育支援

公の記録のない 1967 ～1974 年の帰国者支援

宮武　正明

私が方正友好交流の会を知ったのは、2015年石金楷さんが日本人孤児の奥さん(２歳の時残留孤児になる)と帰国したことからである。

私の友人は、2014年に富士旅行社の「中国東北部を訪ねるツアー」に参加して、方正において残留日本人孤児・婦人の組織化に取り組んできた石さんと交流した。友人は、福祉事務所の所長として2008年からの新支援策に関わっていた。石さん夫妻は2015年に日本に帰国し、６か月間の所沢定住センターを経て、江戸川区の都営住宅に入居し、友人に帰国を伝えてきた。2016年私は友人に便乗して石さん夫妻の都営住宅を訪ね、石さんの話の中で、交流の会があることと会報『星火方正』を初めて知った。

石さん夫妻の都営住宅は、この報告にでてくる小松川第二中学校夜間中学にも近く、私が福祉事務所ケースワーカーとして担当した懐かしい都営住宅であった。

〔公の記録にない1967～1974年の帰国者支援〕

わが国の引揚げ・帰国事業は終戦後数年で再三中断され、1951 年以降大連からの船は絶え、1958 年以降は全く閉ざされてしまう。多くの日本人孤児、女子が引揚げ・帰国の途中で父母と離れ離れになり、大陸に取り残されたままになった。

その後、日本は、多くの残留孤児、女子・婦人を放置したまま、戦後の復興から高度経済成長の時代となり、再軍備をすすめるが、残留孤児、女子・婦人の救済の動きはなかった。

1961 年以降断続的だが残留婦人等の自費帰国が再開され、その後日中・日韓の間の交流が始まる中、1967 年から残留婦人・孤児の帰国は急増していく。

帰国者の多くは帰国後生活保護を受給して生活を整え、子どもの教育環境等を整えていくが、その経過の歴史は公けにはどこにも記録されていない。

1972 年日中国交回復後に民間の手で中国残留孤児肉親探し事業が始まるが、国が動くのは 1975 年「中国残留孤児肉親探し事業」からであり、残留孤児の「訪日調査」が始まるのは 1981 年になってからであった。

帰国者の多くは帰国後、日本語を習得する等生活を整えた後は、就労して生活保護を辞めるが、すぐに高齢となって就労先を断られ、再び生活保護を受給することとなった者が少なくなかった〔厚生労働省資料で帰国者の６割であった〕。

だが、他に蓄財もなく頼れる親族もない帰国者にとって唯一の生活手段であった生活保護は、2000 年代になって老齢加算の廃止などで年々支給金額が減少して受給が厳しくなっていった。

そうした中で、2007 年 7 月、日本政府を相手に、帰国した残留孤児の９割近くが起こしていた中国残留孤児国家賠償訴訟について、原告側は新たな国の支援策を受け入れて和解し、2008 年 1 月および 4 月から国の新しい支援策が実施された。支援策の対象は終戦時 13 歳以上だった「残留婦人等」、12 歳以下だった「残留孤児」を合わせて 2007 年の厚生労働省資料で 6,354 名であった。

その他 2005 年厚生労働省資料によると、残留孤児・婦人の二世・三世は合わせて 20,159 名が親と一緒に帰国するか、親の帰国後に帰国している。なお、三世は帰国後に出生している数を含む。ただし、二世・三世は新支援策における金銭給付の対象にはならない。

ここでは、公の記録が「空白」になっている 1967～1974 年の帰国者支援について、私の

体験を記録しておきたい。

〔引揚者一時宿泊所・東京都常盤寮〕

私は、５０年前(1967年)、日本社会事業大学を卒業して東京都職員となり、江戸川区福祉事務所で生活保護を担当するケースワーカーとなった。担当する地域に東京都引揚者一時宿泊所・東京都常盤寮があった。

戦後数年して帰国事業が途絶えて大陸に残された多くの残留孤児・婦人が、1965年からの中国・文化大革命で「日本鬼子」として迫害を受けるようになる中、1967年から自費による帰国を決めた方が増えていった。それらの帰国者を迎えるため、東京都は当時陸の孤島だった江戸川区葛西の老朽化して使えなくなっていた６畳間１０室ほどの婦人保護施設に「東京都引揚者一時宿泊所・東京都常盤寮」の表札を掲げ、東京都内が本籍で帰国してくる残留孤児・婦人を一時入居させた。

開設したばかりの常盤寮の初めての入居者たちと、私がその東京都常盤寮の地域を担当するケースワーカーとなって出会うのが、ちょうど重なった。

当時の常盤寮は、総武線新小岩駅からバスで１時間近くかかる江戸川区葛西の東西に流れる新川放水路の南側土手の真下に、集落と離れてポツンと建っていた。寮のまわりは０メートルの湿地帯で、交通も買い物も不便な「東京の地の果て」であった。

この地域の生活保護世帯を家庭訪問するためには、福祉事務所から自転車で１時間ほど掛かるために、新人ケースワーカーの私が、当然のように福祉事務所管内で一番不便な地域を担当することになった。

〔残留婦人が母子家庭となり帰国して〕

常盤寮には、1967 年 3 月に１世帯がすでに入居していたが、４月以降中国・韓国から引揚者・帰国者(以降、大陸に生まれ育った二世・三世を含めて「帰国者」と表現する)の入居が相次いだ。当初は、中国・韓国で中国人・韓国人の夫と結婚して戦後を生き抜いてきた残留婦人が、生計の中心だった夫を疾病等で失うなどで母子家庭となって相談できる知人もなく、就労先もなく生活に困窮し、なんとか連絡がとれた日本の親・きょうだい・親戚等に身元引受人になってもらって小・中学生の年齢の子どもたちを連れて帰国した世帯が多かった。

常盤寮はあっという間に中国語・韓国語の会話でにぎわうようになった。

当時東京都は建物を管理・修繕する用務員を置くのみで、用務員は夫婦で寮の隣の小屋に住み込んでいた。帰国者の入居後の生活は、地元江戸川区福祉事務所の生活保護の実施に任されていて、帰国者の入居を決めた東京都援護担当課が交通の不便なこの寮を訪れることは当時まったくなかった。

私は地域の生活保護世帯を訪問するたびに常盤寮に寄って、入居した帰国者の生活の相談に応え、抱えている問題の解決にあたり、まだ日本語が話せない帰国者の子どもたちと母親の通訳をとおして日本に馴染むための話し合いを続けた。

当初、国と東京都は地元の福祉事務所に生活保護の実施を任せたのみで、一切の指示や動きはなかった。江戸川区からは「常盤寮に入居する帰国者が続いている。なぜ江戸川区で生活保護を実施しなければならないのか(費用の２割が区負担となる)。今後も帰国は続くのか」といった生活保護事務の増加の見通しを立てるため、再三私に東京都や国の援護担当課への問い合わせを求められるが、当時、東京都や国の援護担当課から「帰国者は今入居している家庭のみで、その後の帰国予定者はいない」との回答が続いた。

実際、当時東京都や国の援護担当課は、大陸にどのくらい未帰還者がいて、帰国希望者がどのくらいいるかを把握しておらず、大陸に多くの残留孤児・婦人を残しているという認識は感じられなかった。

〔葛西小学校・葛西中学校日本語学級〕

当時帰国した母親たちとは幸い日本語で会話ができたことから、私は生活保護の実施とともに、母子の帰国後のさまざまな生活の相談にのることになった。

入居した世帯に、その日のうちに数日間の生活保護費を支給するとともに、布団とガスコンロと食器の現物支給を行ったが、すぐに解決しなければならないことは、母親と一緒に帰国した小・中学生の年齢の子どもたちの教育についてであった。

私は当然地元の小・中学校に入学できるものと安易に思っていたが、母親たちの区役所での義務教育の手続き後、教育委員会から私は「中国語しか話せない子どもは入学させられない」「中共から帰ってきた赤い子どもの入学は地元の親たちの理解が得られない」「赤い考えが子どもに広まると困る」との連絡を受け、入学を断られてしまった。

数か月間、私は生活保護家庭への家庭訪問の都度常盤寮に寄って、母親たちの当面する生活の相談に応じながら、母親たちの通訳をとおして子どもたちと中国と日本の生活の違いなど多くのことを話して、少しでも子どもたちの入学後の学習意欲が保てるように試みたが、教科書も教材もない中、実際に伝えられたことはわずかしかなかった。

幸い、母親たちは直接常盤寮のすぐ近くの地元の小・中学校に日参し、校長をとおして区教育委員会に陳情を続け、一学期を過ぎた９月になってから区は「地元の子どもと一緒にならないよう、帰国児童だけの日本語学級を別に作って受け入れる」こととなった。

江戸川区立葛西小学校日本語学級　江戸川区立葛西中学校日本語学級

この「日本語学級」については、その後葛西小学校日本語学級担任になった善本幸夫が『僕、日本人なの?』をまとめ、1985 年度の夏休み課題図書にもなって広く紹介された。地元の子どもたちから「日本語学級」の子どもたちが「中国人」といじめられる中で、子ども心に日本への帰国がよかったのかを悩む、子どもの読者にとってとても難しいテーマであった。（本のあとがきに「日本語学級は 1972 年に誕生しました」と書かれているが、これは 1967 年の誤りであるので著者等に代わって訂正したい。）

〔曳舟中・小松川二中夜間中学〕

子どものなかには母親と一緒に帰国した１５歳以上の男女の青年も数名いた。当時の中国東北部の僻地にいたため小・中学校教育を受ける機会がなかったか、あるいは不十分なままに義務教育年齢を過ぎた青年たちであった。それらの青年たちは年齢から葛西中学校の日本語学級には入学できず、当初、対応に行き詰まった。

1967年秋、私はふと隣の区に夜間中学があることに気づいて、墨田区曳舟中学校夜間中学に青年たちの入学を依頼した。当初は「墨田区の住民でない」と拒否されたが、同校の校長は帰国した青年たちの事情をよく聴いてくださり、年が明けてから「墨田区教育委員会から許可をいただいたので２月から受け入れます」との連絡をいただいた。

墨田区立曳舟中学校夜間中学

私はその時の校長の電話での弾んだ声を今も覚えている。墨田区教育委員会を懸命に説得してくれたことがとてもよくわかる喜びの声であった。

この曳舟中学校夜間中学では、さらに1968年4月から帰国者のための「日本語学級」を開設し、たちまち当時全国３２か所の夜間中学にこのことが知れわたることとなり、数年のうちに各地の夜間中学が１５歳以上の残留孤児・婦人の帰国後の日本語の習得と日本での生活に必要な基礎知識を学べる場となっていった。

帰国当初は生活保護を受けて生活し、夜間中学で日本語を習得し、社会生活に必要な基礎的な知識を獲得できれば、就職して自活し生活保護を辞退することが、数年のうちに各地に帰る帰国者に定着した。

その後、江戸川区に夜間中学がなくて、１０名近くの青年が常盤寮から一時間以上もかけて「隣区の夜間中学に通っているのは区の恥」と区議会で取り上げられ、1970年に江戸川区内の中学校に夜間中学が開設されることとなった。

江戸川区立小松川第二中学校夜間中学

この夜間中学は、総武線平井駅に近い交通の便もあって、１０代の青年だけでなく多くの帰国者が通うようになっていった。

のちのことであるが、私は小松川第二中学校夜間中学の教員松崎運之助に夜間中学の設立経過を説明して、短文「もう一つの灯・夜間中学」を書いてもらい、福祉事務所ケースワーカーの会報に掲載されたことがある。松崎運之助は1981年『学校』を著すが、山田洋次は同書を元に1993年映画「学校」を作り夜間中学校を広く紹介した。同夜間中学の教員太田知恵子は1983年刊『雨降りお月さん―中国帰国者の学校―』を記録に残している。

〔1982年の夜間中学日本語学級〕

掲載した 1982 年の資料では、全国 34 校合計 2,915 名の在籍者のうち 645 名が引揚げ・帰国者となっており、多くの帰国者とその二世・三世が夜間中学で日本語を習得し、日本に関する基礎知識と基礎学力を学んで日本での生活を準備することが定着したことがわかる。

日中国交回復以後の国の残留孤児肉親捜し事業「訪日調査」は、1981 年からであるが、この資料はその翌年 1982 年のものであり、私が残留婦人と出会った 1967 年以降、「訪日調査」が始まる 1981 年までの間にすでに多くの残留孤児・婦人とその二世・三世が日本に帰国し、夜間中学で学んでいたことがわかる数字となっている。

なお、『あの戦争から遠く離れて』著者の父親城戸幹は、帰国後地元愛媛県の定時制高校で学んでおり、この間各地の定時制高校も同様の役割を果たしたことがわかる。

「夜間中学」は学校教育法の中学校のⅡ部授業と限定的・消極的に解釈されてきた。そのため残念なことに、残留孤児・婦人とその二世の帰国後を現実に大きく支えた夜間中学が、国・厚生省の引揚げ・帰国事業および厚生労働省の新しい支援策の文書のなかにほとんど触れられていないことである。これらの事実は国においても把握され記録されなければならないことであろう。

幸いなことに、2017 年文部科学省は、今まで長期に渡って夜間中学の存在と認知を渋ってきた経過とは対照的に「各都道府県は、都道府県内に少なくとも一校は夜間中学の開設を進めるよう」通達を出した。すでに各地で、中国残留孤児の二世・三世の新たな帰国者やさまざまな異文化に育つ人々に開放した新たな夜間中学づくりが始まっていることを歓迎したい。

〔燎原の火〕

「帰国すれば生活保護が受給できて、子どもたちは必要な教育も受けられる。帰国する子どもたちのために日本語学級や夜間中学も用意されている。」

先に東京都常盤寮に帰国した人々から、中国・韓国に残留する多くの日本人婦人・孤児に日本へ帰国しての生活の様子が燎原の火のように伝わり、その後、帰国希望者が現地の日本領事館に殺到することとなったと聞くことがあった。

当初地元の児童と交流させない目的で設置された葛西小学校・中学校の「日本語学級」は、中国・韓国の残留婦人・孤児には「帰国者を待っている場所」と伝わり、わかりやすく、帰国を促進するものとなった。

その後、常盤寮を管理する東京都は、常盤寮の地元江戸川区福祉事務所の要請により 1970 年に常盤寮に「専門相談員」を配置し入居者の生活支援にあたった。1975 年には建物の老

朽化のため常盤寮を鉄筋コンクリートに改築し、入居者のための相談室を設置して、1984年に国が国内３か所に設置した定住センターの先駆けになっていった。

常盤寮のある葛西の街はその後地下鉄東西線が開通したこともあって、それまでの湿地帯から急速に都市化が進んだ。それとともに、多くの帰国者、帰国者の二世・三世が中国から帰国してアパート等に住む街になり、それらの知人を頼って葛西に商取引で訪れる中国人も増え、都市化した葛西は「日系中国人の街」と言われる街になっていった。

現在「常盤寮」をインターネットで検索すると「ドラゴン発祥のメッカ」と出てくる。一時期、この寮に入居していた帰国者の二世・三世を中心とした暴走族グループが形成され、1989年に浦安暴走族殺人事件が起きたこともあった。帰国後の不安と社会的な孤立が招いたものであった。

近年、私が交流の会に出席して「東京都常盤寮」の話をして驚いたことは、誰も常盤寮のことは知らなかったことである。常盤寮に一時入居した多くは、その後墨田区等の都営住宅に入居したが、すでに高齢となり、亡くなられた方も多いかもしれない。

東京都常盤寮は、2001年にその使命を終えて、江戸川区立障害者支援ハウスとなったが、東京都と江戸川区は、多くの中国・韓国からの帰国者を受け入れた施設として、せめて跡地に記念碑を立てて後世に伝えてほしいものである。

〔健康で文化的な最低限度の生活〕

帰国者の多くが日本での生活をスタートさせるには生活保護によるしかなく、生活扶助だけでなく、医療扶助、平常着・布団・什器などの生活一時扶助も必要な限り支給して、文字通り「健康で文化的な最低限度の生活」をスタートさせていた。

手持ち金も、家財も、一切の蓄え・ストックもない帰国者の生活を、当時は低い生活保護基準の生活保護で本当に支えられるか、どこまで支えられるか、新人ケースワーカーの私にとって最初の一年間は五里霧中であった。

ちなみに、当時の生活保護では布団は２人に１組しか支給できなかった。

私は「肉を塊で買ってはいけない。買い物は少量ずつにしないとやっていけない」など保護費で１か月の生活をやりくりする工夫や、平等意識の強い十代の青年たちに「日本は厳しい競争社会である」ことなど中国と日本の生活文化の違いを説明した。また、生活情報について利用できる医療機関・学校・各種の役所・交通機関等の手作りパンフレットを作成し、日本語の習得から就労に至るさまざまな相談に応じた。

手作りによる「帰国者便利帳」と名づけたパンフレットは、私が常盤寮から帰った後の時間の入居者の情報源としてその後長く活用されたと聞く。

当時、私は帰国者の多くが生活保護費の一部を中国の養父母に送金していることについて「最低限度の生活を維持するために使うよう」注意し続けたが、養父母への思いが理解できたのは４０年後にNHKtv「遥かなる絆」を見てからであった。

〔帰国手続き・下関入管時代〕

日中国交回復以前の帰国者の帰国旅費は、「引揚者」「帰国者」とも、自費帰国であった。この間の帰国者の多くは、当時の高額な帰国の費用を、中国・韓国で自分の所持していた生活用品を売却することでつくっている。帰国した時には、大半の帰国者が無一文であった。

1970 年まではまだ日本と中国の間の航空路は開設されていなかったので、帰国者は主に上海または香港経由の船便であった。大半の帰国者が中国東北部から汽車で上海または香港にでて数日を船で過ごすわけで、数人の子どもを連れての残留婦人の帰国は、文化大革命の途上の帰国手続きとともに大変なことであったと思われる。

当時は引揚げ・帰国するためには**身元引受人**を必要とし、帰国者の帰国後の諸手続きは各都道府県の援護課が担当した。ただし、日本国籍のある者を「引揚者」、ない者を「帰国

者」とし、引揚者給付金等支給法の対象となるのは「引揚者」のみであった。引揚者給付金は､戦後の引揚げ事業が中断する以前の 1957 年に作られた法律のままであったため､1967 年当時は、帰国後 1 回限りで 1〜2 万円のみの支給であった。給付金の対象にならない自費「帰国者」については、各都道府県の援護課の業務の対象にならず、その数は公けの記録には記載されなかったのである。

しかし、日本国籍のある者とない者、「引揚者」と「帰国者」は、1958 年引揚げ事業中断および 1959 年未帰還者特別措置法による戸籍抹消によって、その後中国で「結婚」した場合だけでなく「中国で元気に暮らしている」との手紙を日本の親族に寄せた場合でも「日本に帰国する意思がないもの」「中国人として生きるよう」日本国籍が抹消された実際から、本来区分することの意味はないものであった。

なお、中国等残留孤児・婦人の統計調査において、わが国では、終戦時１３歳未満の「残留孤児」と１３歳以上の「残留婦人等」に分けて区分している。一方、中国当局の日本人残留孤児・婦人の統計調査においては１８歳未満を「残留孤児」としているので数字の違いに注意したい。「1967 年から帰国者が急増した」ことは中国側資料からはわかるが、日本側資料では「引揚者」数のみで、合わせた帰国者数はわからないことにも注意したい。なお、2007 年の新支援策は対象を「中国残留邦人」と称しているが、本文では、わかりやすい「中国等残留孤児・婦人」と記載する。

帰国後は下関入国管理事務所において入国手続きが行われた。帰省先までの手持ち金がない多くの帰国者は、下関市福祉事務所において、身元保証先・帰省先までの旅費とその間の食費について生活保護の申請を行うことが必要であった。さらに、身元保証先・帰省先に着いて地元の福祉事務所に生活保護を申請した時点で、下関市福祉事務所は帰省先の福祉事務所に下関市福祉事務所が緊急保護を行った旅費等保護費の「繰替支弁」を請求することになっていた。親たちは子どもたちを抱えて、手続きを繰り返しながら長距離を移動してきたけれども、長時間の夜行列車で東京駅に着いたいずれの帰国者と子どもたちも、とても元気に、東京の地の果て、江戸川区福祉事務所に、東京都常盤寮にたどりついていたことを私ははっきり覚えている。

1968 年 3 月には韓国残留婦人が下関に入国した際に「身元保証人のいる各府県でなく、生活保護や子どもの教育等受入れがすでに整った東京都常盤寮に入寮させてほしい」と座り込みを行っている〔このニュースは 1968 年 3 月 NHK ドキュメンタリーで放映された〕。なお、日韓の国交回復は 1965 年であり、戦後の混乱と朝鮮戦争等で帰国できなくなって、日韓国交回復後に韓国から帰国した婦人とその家族は 800 名と推定されている。

私は当時帰国してきた青年たちから、帰国途中に出会った「文化大革命」の様子を聞くことができた。それは当時、日本のマスコミが伝え、多くの知識人が期待をした「社会変革」ではなく、知識人排除の内戦であることがわかる生々しい情報であった。

1872 年日中国交回復後、航路が開設されるが、『あの戦争から遠く離れて』の城戸幹は 1970 年に航路で羽田に帰国している。正式の航路開設以前に、すでにチャーター便の運航が始まっていたものと思われる。

〔帰国者と家族が「夜間中学」の周りに定着〕

前述のように、帰国した引揚げ・帰国者の当初の日本での生活は多くが身元引受人がいる地元で生活保護を受給して生活をスタートさせた。ほとんどの場合、突然の帰国者に対して身元引受人が生活費を出すのは困難なことであった。さらに、引揚げ・帰国した後に､残してきた二世世帯とその子どもたちが､後から帰国してくる場合が少なくなかった。

そうした結果、身元引受人のいる帰省地に一旦帰ったのち、帰国者世帯と二世・三世世帯が都市に出て、本人または子どもが「夜間中学」に通学するため夜間中学に通えるエリアに多くの帰国者が集まって暮らすようになった。

上京後アパートを借りて、生活保護を受給して暮らし、江東区にある「塩崎荘」等の「保護施設」（生活保護法による施設）、「新幸荘」等の「宿泊所」に入居する世帯も多くなり、1970 年代から 1980 年代にかけて江戸川区・江東区を中心にした東京・下町は、少なくない帰国した残留孤児・婦人と、一緒に帰国した二世、親の帰国後に日本に来た二世・三世等の家族の生活の場となっていった。

同様のことは、関西でも見られ、大阪市立天王寺中学校等の夜間中学の近隣に帰国者と家族が集まって暮らす傾向が見られた。

〔日中国交回復以後の国の帰国者支援〕

厚生省が 1958 年以降中断していた引揚げ・帰国事業に取り組むのは 1972 年日中国交回復以降であった。1973 年「引揚者」に限って旅費支給の措置が行われるようになったが、1974 年に引揚げ・帰国者を支援する民間団体による中国残留孤児肉親探しが始まり、1975 年厚生省は「中国残留孤児肉親探し事業」による邦人情報の公開を始めた。

1981 年に残留孤児の「訪日調査」が始まるとともに、全国社会福祉協議会は「中国帰国者定住化促進」の提言をまとめ、各都道府県社会福祉協議会は都道府県援護課とともに帰国者の相談窓口を設置し、中国語・日本語を併記した帰国者へのパンフレットを用意するようになった。帰国者が日本語を習得できるよう各地に自治体や社会福祉協議会が主催する「帰国者のための日本語教室」の設置が進められた。

1984 年厚生省は中国帰国者の帰国後の生活の準備のための「定住センター」を全国３か所〔埼玉・長野・山形〕に設置した。定住センター設置以降は、残留孤児本人の帰国の場合に限って始めに定住センターに入所し、一定期間就職指導や日本語の習得訓練を受けてから、身元保証人のいる都道府県に帰省し、都道府県援護課をとおして公営住宅への入居斡旋等により、出身地に戻って定着するように支援が行われることになった。

1982 年法務省は「中国帰国者戸籍登録事務取扱い」を都道府県に通知し、抹消した戸籍の回復、戸籍の登録が認められるようになった。それまで、肉親の身元引受人がいる場合に限っていた帰国を 1991 年になって「特別身元引受け制度」により第三者の身元引き受けが可能となった。1993 年には身元引受人のいない残留婦人 3 人が成田に強行帰国し入国が拒否されている。

1990 年代になってようやく、国は国民年金特例納付等の実施のため「引揚者」だけでなく「帰国者」についてもその対象とし、生活実態を調査して把握するようになった。1972 年の日中国交回復以降の中国残留孤児帰国者が 2,513 名であるのに、2007 年和解によって作られた新支援策の対象が 6,354 名となるのはこのためである。この数字からも、1967 年から 1974 年までの 8 年間および国が動くようになる 1981 年までに、既に多くの自費帰国者がいたこと、これらの自費帰国者にこの間、国の施策がなかったことがわかる。

後日 2005～2007 年各地の国家賠償請求訴訟の地方裁判所の判決文の中に、共通して「日中国交回復以前は、帰国させる方法はなかったので国および公務員の職務怠慢にはならない」すなわち国の責任はなかったとされ、神戸地裁以外の判決はいずれも残留孤児ら原告が「敗訴」となる根拠となった。これは少なくとも日中国交回復の５年前の 1967 年から引揚げ・帰国者が急増していた事実が、裁判官だけでなく弁護士にも伝わっていなかったためと私は推測している。

『あの戦争から遠く離れて』の著者城戸久枝さんも「1972 年日中国交回復以前の残留孤児の帰国は父一人であった」と同書に書いている。そうした点で、1967 年から残留婦人・孤児の帰国が急増したことについて、早く公けにしなかったことが悔やまれるのである。

なお、戦前多くの「満蒙開拓団」「大陸の花嫁」を送り出した長野県において、日中国交回復の前後をとおして多くの残留婦人等の帰国が続いたが、中国東北部に残って帰国しない意向の婦人も多いことが、現地取材で記録されている〔NHK1991 年 5 月 25 日ドキュメント「中国残留日本人婦人」放映〕。

〔日本での老後と2008年からの国の新支援策〕

戦後大陸に残され1967年以降に自力で日本に帰ってきた帰国者の多くは、帰国時すでに中高年で、就職も容易でなかった。一時期就職できた方も日本語の会話ができないことから孤独な仕事を与えられていた場合が多く、そのために収入は低く、あっという間に高齢になって雇用を断られていった。大半が収入の低い雇用であったため、預金や資産はほとんど持てないままで、マイホームだけでなくマイカーが持てた人もほとんどいない。

1995年、帰国までの国民年金期間が免除期間と同様の扱いになり、多くの帰国者は65歳から老齢基礎年金満額の1/3、月22,000円の受給が可能となった。この時期、満額がほしいなら一時金を払えと「特例納付」が推奨された。けれども、もしも終戦後わが国の帰国事業が継続しその当時に帰国できて就労していたなら、興安丸等引揚船で帰国した方々と同様にその多くが月20万円前後の厚生年金を受給できていたはずなのである。残留孤児の起こした国家賠償請求訴訟が求めていた「保障内容月20万円の年金」はそうした根拠があるものであった。

私は2004年10月号『ゆたかなくらし』に「1953年以降引き揚げ・帰国の道を閉ざされて中国などに残された一人ひとりの残留孤児・婦人がどのような思いで日本を見つめ、日本人ということでどのような想いをしてきたかを考えるならば、せめて満額の老齢基礎年金に見合う保障法・支援法を作ることが、日本国としての最低の責任ではないでしょうか」と書いた。

それと同趣旨であるが、2007年7月の残留孤児と国との和解により老齢基礎年金の満額約月65,000円の保障が2008年1月から実施された。

けれども、年金を除くと国の新支援策は、生活保護のしくみに一部自由裁量を設けたものになった。それは、いかに多くの残留孤児・婦人がすでに高齢期に入って、貯えもなく、他に生活の方法がなく、再度生活保護を受給していたかを示すものであった。

現在行われている新支援策の主な内容は、

1. 老齢基礎年金を帰国した時期に関わらず満額を支給する。
   残留孤児・婦人の基礎年金保険料を一括して国は国の年金財源に納めて、満額を支給する。したがって、「特例納付」等帰国後に個々の帰国者が納付した国民年金保険料は、2007年の時価に直して個人に返還する。
2. 生活保護制度の収入認定のしくみは残すが、年に1回とする。
   老齢基礎年金満額部分は収入認定しないこととし、生活保護世帯より生活に余裕がもてるようにする。
3. 医療費について、生活保護の医療扶助と同等の医療費の給付を行う。
   医療扶助と異なる点は、該当者に医療支援「受給者証」を発行すること。国民健康保険には生活保護世帯と同様に引き続き加入しない。
4. 各市町村に中国残留邦人「支援員・相談員」を置いて支援にあたる。
   実務は生活保護のしくみが基本となるため、福祉事務所が引き続き実務を担当または福祉事務所ケースワーカー経験者が実務を担当している自治体が多い。
5. 各市町村は「地域社会における生活支援等」を行う。
   地域における支援ネットワークを援助する。日本語教育支援、通訳等の派遣、巡回健康相談を行う。この部分は二世・三世も対象とする。

となっている。

この和解内容に基づき、2008年4月6日国会で「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後の自立の支援に関する法律」が成立し、2008年10月1日付で施行された。ただし、年金については2008年1月分から、生活保護から変わった生活支援給付については2008年4月分から実施され、今日に至っている。

しかしながら、国家賠償請求訴訟の国との和解について、残留孤児が求めていた「長く

大陸に放置してきた国の責任」については一切触れられていない。さらには、「検証会議」など新支援策実施後の協議機関も設置されていない。本来ならば、ハンセン病国家賠償訴訟の和解と同様の「検証会議」を設置して、支援経過の検証と残留孤児二世・三世を含む諸問題の解決に当たるべきであり、戦後 73 年を経て、既に帰国した残留孤児･婦人のすべてが 73 歳以上になる現在、和解内容はさらに改善されるべきである。

現在、各市町村で残留孤児・婦人の帰国者の生活支援事業を行っているのに、和解後そのことが国民にほとんど知らされていない。各自治体の「市民便利帳」にも、社会福祉士等が学ぶ教科書にもこれらの帰国者支援は書かれていない。現に行われているこれらの支援は一部の行政担当者のみが知るものであってはならない。

なお、市町村において帰国者支援の事務および支援サービスを担当している職員、支援員・相談員はこれらの経過をよく理解して、支援策の実施にあたることを心から願うものである。

〔「異文化理解」と残留孤児・婦人について伝える意味〕

私は、「異文化理解」をテーマにした授業の中で、子どもの現場では、日系ブラジル・中南米人、在日朝鮮・韓国人、フィリピン・ベトナム・中国等から国際結婚で日本に来られた方、中国残留孤児・婦人の帰国者の二世・三世など異文化で育つ子どもが多くなっていることに触れて、若い世代にほとんど伝えられていないこれらの歴史を伝え、異文化の中で育つ子ども・保護者とのコミュニケーションをとることの大切さの理解を図っている。

愛媛県松山市の大学に勤めていた 2007 年 9 月一冊の新刊書に出会って驚いた。私にとっては夢のような本であった。城戸久枝著『あの戦争から遠く離れて』。愛媛県生まれの中国残留孤児二世である筆者が、1997 年２０歳の時、中国・吉林大学に国費留学して学びながら、４歳で残留孤児となった父が２７歳で日本へ帰国するまでの中国での生活、父を支えた人々を丁寧にたどった記録である。この書は 2009 年４～5 月ＮＨＫＴＶで「遥かなる絆」としてドラマ放映された。

その後は毎年、同書および DVD「遥かなる絆」を「異文化理解」の教材の一つとしているが、２０歳の筆者がたどった旅として、現代の若者にもわかりやすい内容である。寄せられた学生の感想の一部を紹介する。

「私たち人間が起こしたおろかな戦争という歴史の中に、このような事実が隠されてきたことにとても驚き、また悲しくもなった。中国が残留孤児問題に積極的に対応しなかったことに対してはまだ理解できても、日本の戦後の対応には正直がっかりした。残留孤児の問題は完全に解決されたわけでなく、まだまだ課題も残されている。それを私たち一人ひとりが真剣に考え取り組んでいくことが大切なのではないか。また、考えるだけでなく、これからの世代に伝えていくことが私たちに課せられた大きな課題の一つだと思った。」

「戦争や時代に翻弄されて生きた一人の男性とその娘の心が描かれていました。世界には同じような人生を送った人がたくさんいると思います。今どこかで送っている人もいると思います。私たちも一つの歴史で、未来です。しっかり学んで生きていきたいと思います。」

「文化、言語、気温やその他生活する環境が違うということは、人と人とが一緒に生活するうえで多大なる影響を与え、苦労があることがわかった。様々な違いを理解することで異文化の人とも生活することができる。」

「個々の国で習慣も決まりも常識も様々なので、異国に対して偏見をもつのは当たり前なことかも知れない。それでもせめて理解しきらなくても受け入れる気持ちは大切なのではなかろうか。そういった心でいればしぜんと異文化に対する偏見は薄れていき、国を問わず人が人らしく、仲間意識をもって過ごしていける世界になるのではなかろうか。」

（みやたけ・まさあき：著書『子どもの貧困―貧困の連鎖と学習支援』　常盤寮にて子どもたちと接した体験から、1980 年代塾に行けない貧困世帯の子どもたちに直に学習支援。2010 年代法律に明記され各地で学習支援が実施されるようになった。松山東雲女子大学准教授、池坊短期大学教授等）

参考図書

城戸久枝『あの戦争から遠く離れて』情報センター出版局 2007 年、文春文庫
城戸久枝『祖国の選択』新潮社 2015 年
中脇初枝『世界の果てのこどもたち』講談社 2015 年
善本幸夫・手島悠介『ぼく、日本人なの?』ほるぷ出版 1983 年
松崎運之助『学校』晩聲社 1981 年、
太田知恵子『雨降りお月さん―中国帰国者の学校―』教育資料出版社 1983 年
宮武正明「忘れようとしたこと、忘れてはならないこと」『ゆたかなくらし』本の泉社　2004 年 10 月号　所収・宮武著『子どもの貧困』㈱みらい 2014 年・電子書籍 2018 年
厚生労働省社会援護局「中国残留邦人に対する新たな支援策」2007 年 12 月会議資料

資料　1982年・全国の夜間中学の生徒数と引揚・帰国者のしめる割合

全国夜間中学校連絡会議資料

	夜間中学のある中学校名	開設年月日	在籍生徒数	内 引揚・帰国者数	内 外国人生徒数
東京	足立区立第四	26. 7.16	46	32	2
	八王子市立第五	27. 5.10	32	0	1
	葛飾区立双葉	28. 4.29	37	2	17
	墨田区立曳舟	28. 5. 1	60	**33**	11
	大田区立糀谷	28. 5. 1	40	4	12
	世田谷区立三宿	29. 9. 1	70	29	27
	立川市立第九	32. 2.15	54	0	12
	江戸川区立小松川第二	46. 4. 1	118	**78**	8
横浜	横浜市立浦島丘	23. 4. 1	11	0	1
	横浜市立平楽	25. 4. 1	5	0	0
	横浜市立藤川	25. 4. 1	6	0	0
	横浜市立西	25. 4. 1	9	2	2
	横浜市立鶴見	25. 5.20	9	0	0
川崎	川崎市立西中原	57. 5. 7	39	0	22
千葉	市川市立大洲	57. 4. 3	12	1	3
京都	京都市立洛友	43. 5. 1	92	1	79
大阪	**大阪市立天王寺**	44. 6. 5	385	**294**	46
	大阪市立菅市	45. 4. 1	252	39	190
	大阪市立文の里	49. 4.12	183	0	166
	大阪市立昭和	51.10.20	103	14	77
	岸和田市立岸城	27. 4. 1	217	0	113
	堺市立殿馬場	47. 4. 1	102	16	25
	八尾市立八尾	47. 4. 1	161	2	106
	東大阪市立長栄	47. 4. 8	294	4	256
	守口市立第三	50. 4.25	151	26	87
	豊中市立第四	50. 4.15	36	0	23
奈良	奈良市立春日	53. 4. 1	142	18	33
	天理市立福住	56. 4.24	32	1	15
兵庫	神戸市立丸山	25. 1.16	47	4	31
	神戸市立兵庫	50. 4. 1	33	0	20
	尼崎市立成良中琴城分校	51. 4. 1	22	1	4
広島	広島市立観音	28. 5. 1	71	44	12
	広島市立二葉	28. 5. 1	36	0	1
	豊浜町立豊浜	27. 5. 1	休校中		
全国計			**2,915**	**645**	**1,402**

（注）　開設年月日は、中学校の開設年月日

大陸科学院国立奉天獣疫研究所の想い出

掛谷　敏男

掛谷　敏男

1、はじめに

星火方正、大類善啓様、貴会に入会させて頂きました。掛谷敏男でございます。

私は現在、広島県福山市内在住です。小学校卒業後、昭和17年２月満蒙開拓青年義勇隊内原訓練所に入所、四月に満洲国青年義勇隊勃利訓練所に入所、18年６月、満洲国大陸科学院、国立奉天獣疫研究所、義勇隊特殊訓練所入所、２ヶ年の訓練を卒業、昭和20年６月、満洲国黒河省瑷琿県義勇隊、団山開拓団現隊に復帰、副獣医師として勤務中、八月に敗戦となった。余儀なく開拓団を離れて戦闘に参加。シベリアに連行され、捕虜となってシベリアギヴダー収容所に抑留されました。約２ヶ年の在ソ後、舞鶴港に引き揚げ相成りました。

奉天獣疫研究所がすばらしい成果を収めたので、想い出の一端を２ヶ年ではありましたが、貴重な訓練と実績などに就いて愚筆申し上げたいと存じます。

2、国立奉天獣疫研究所

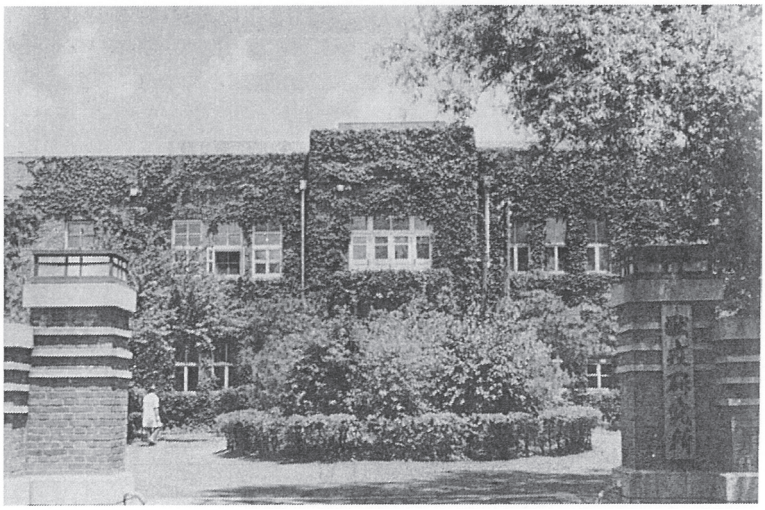
創立　大正14年10月１日　　初代所長　葛　西　勝　弥

満洲の畜産振興として、最大の障害である獣疫を防遏する為、満鉄は研究所の設立に踏み切った。

大正14年４月、北大教授葛西勝弥博士に創立の段取りを委託した。

昭和７年１月、香村岱二博士が専任所長に赴任した。一ヶ月後、農務課長に転出する。獣研の所長兼任となる。長らく兼任所長が続く。

昭和10年３月、実吉吉郎専任所長を迎える。葛西博士は終戦近くまで奉天獣疫研究所の嘱託としておられた。慶應大学の細菌学教授　小林六造博士と来満、指導に当たられた。



(奉天)獣疫研究所正門→本館

満鉄が世界に誇る研究所を作った。満洲国成立後、昭和13年４月に総理府大陸科学院の所管となった。

昭和18年、ハルピン獣研の支所、20年に牡丹江とチチハルに家畜防疫所を設立する。

実吉所長、病気退任。20年５月より５代目井上辰蔵となる。

先進国では前世紀の中に既に姿を消した牛疫、牛肺疫、鼻疽など獣疫が跳梁し、家畜改良増殖計画の一大障害となっていた。

そこで、満鉄ではまず獣疫防遏機関の設置の必要を痛感し、農務課長栃内壬五郎は松島鑑、香村岱二らと計って立案したが、幾多の紆余曲折を経て、大正14年10月１日、場所を奉天に選んで獣疫研究所（獣研・略称）職制が発令された。

獣研は、満鉄の手によってこのような経緯の元に発足し、国務院大臣科学院の所管となった。

鼻疽、牛肺疫、寄生虫等の研究が開始された。

回想

回想・奉天獣疫研究所20年の歩みより抜粋

奉天獣疫研究所20年の歩み

一機構の変遷など

①沿革

満蒙の地は克く家畜の生産に適し従って其の数甚だ多く牛馬羊豚其の他を合せ実に二千数百万頭に上る。而して之等の家畜は満蒙の生産物として極めて重要なる経済的地位を占め、殊に満洲の経済界を支配する農作物とは緊密不離の関係にあり、又牛馬の如き役畜は鉄道と相俟って満蒙に於ける輸送機関の一大因子を成せり。

満鉄は夙に斯くの如き大網に着眼し、公主嶺農事試験場に於て在来家畜の改良を研究し、其の成績を実際に応用して着々効果を収め来れるも、一方家畜の衛生的施設の何等見るべきものなかりし為、自然畜産経済上並に公衆衛生上極めて憾るべき家畜伝染病四時各地に流行し、亦各種寄生虫病も傾る多く従って之等疾病の為に蒙る損害は年々一千万円乃至二千万円に達すと推測せらる。

斯くの如き危険地域に於て家畜の改良増殖を計ることの無謀なるは、固より満鉄当局の熟知するところにして、夙に獣疫防遏機関の設置を熱心に画策し、大正十一年十月川村社長就任するや、農務課当局は三一一、四二六円の事業費を以て獣疫研究所設置案を提出し無事決裁を得、次で翌大正十二年四月北海道帝国大学教授農学博士葛西勝彌氏新に同研究所創立に関する事務嘱託となり、鋭意之が計画を進められたる結果、同年五月事業費を四六八、〇四五円に増加する案を作製し重ねて社長の決裁を経て敷地の選定に移りたるが、研究材料蒐集上の便宜並に満洲医科大学所在等の見地より奉天を理想的候補地と定め茲に三箇年継続事業として工事に着手することとなりしも、偶々敷地変更問題突発、種々支障を生じ、茬苒日を経るに至り翌大正十三年度に入り漸く現在の位置に決定し、始めて起工の運びとなれり。

然るに同年六月社長更迭あり、安廣社長の就任を見るや、会社事業は一般的に緊縮方針を採ることとなり、従って当所設置の如きも其の影響を受け、正に無期延期の運命に陥いらんとし、其の間幾多の紆余曲折ありしも、葛西博士の不断の努力と、関係当局の援助により事業費を二五〇、〇〇〇円に削減されながらも大正十三年八月四日重役会議に於て辛うじて設置の復活を見るに至れり。

仍て同年十月より工事に着手し、二ケ年継続事業として翌大正十四年九月末第一期たる現在の本館外約一〇棟の建築落成を見、次で十月一日には獣疫研究所職制の発表さるると同時に、葛西博士所長事務取扱を嘱託され奥田事業科長以下所員も夫々任命を見るに至れり。

爾後事業方面は想像以上の好成績を挙げ、予定の牛疫、豚コレラ、炭疽の血清及予防液、家禽コレラ血清、ツベルクリン、マレイン及炭疽診断用血清の十種製品も遅滞なく製造することを得、又大正十五年五月より更に狂犬病及豚疫予防液の製造を開始し、同年五月十一日関東庁より正式に血清類の製造販売を許可せられ、茲に愈々研究所の製品も満洲に於て実地に応用せらるることとなれり。

又研究方面は大正十五年五月柘植一夫氏研究科長として赴任し、更に八月迄には従来内地の各大学及研究所に留学し病理学、細菌学、寄生虫学等を研究し居りし各研究所科員も全部着任し、茲に漸く人員の充実を見、爾後各方面の問題に向って大に研究の歩を進め得るに至れり。

爾来今日に至るまで満十星霜、年と共に本所の事業は益々拡張せられ、従って分館の外牛舎、豚舎、鶏舎、厩舎、大動物試験舎、作業室、検定牛舎、解剖室及焼却室等の新築を見、殊に満洲国の建設に伴ひ各製品の需要頓に激増し、之が増産計画の実現と共に、建物及諸般の設備一層充実して全く、舊来の面目を一新し、今や構内敷地の狭隘を感じつつあるの現況なり。

尚昭和六年四月獣疫研究所検査鑑定規則を設けて広く一般病的材料の依頼試験に応じ、同七年四月には満蒙に於て獣疫防遏事務に従事せんとする技術者の為に本所実習生規程により入所を許可することとし又同八年九月満洲国実業部設立の獣医養成所の学生教育に関し諸般の便宜を計り来り、現地に即したる調査研究と相俟って益々当所設立の意義を発揮するに至れり。

3、研究部門　研究室が設けられる

細菌　**細菌研究室**　主任　板　橋　敬　一　研究官

副研究官　田　島　嘉　雄
血清診断　副研究官　西　武
一般血清診断　副研究官　波多野　弘
牛肺疫、ツベルクリン室　副研究官　林　六　郎
（牛用炭疽の血清、ワクチンの研究）　副研究官　岩下先生

病毒　**病毒研究室**　主任　井　上　辰　蔵　研究官

副研究官（竹末正義、木塚静雄、藤田蕈吉、森尾礼介、木村一郎）

牛　疫　室　研究士（松尾英磨、氏家八良、増田芳衛、武安義生等に依り）

※牛疫血清、予防液の研究、羊痘の研究が行われた。

豚コレラ室　主任　渡　部　成　三　副研究官

研究士（富岡秀義、真田正弘、小笹太三）

※豚コレラ血清予防液の製造、研究及び鶏ペストの研究

狂犬病室　主任　伊　藤　定　隆　副研究官

※狂犬病の予防液製造研究、犬のジステンパー

病理研究室　主任　山　極　三　郎　研究官

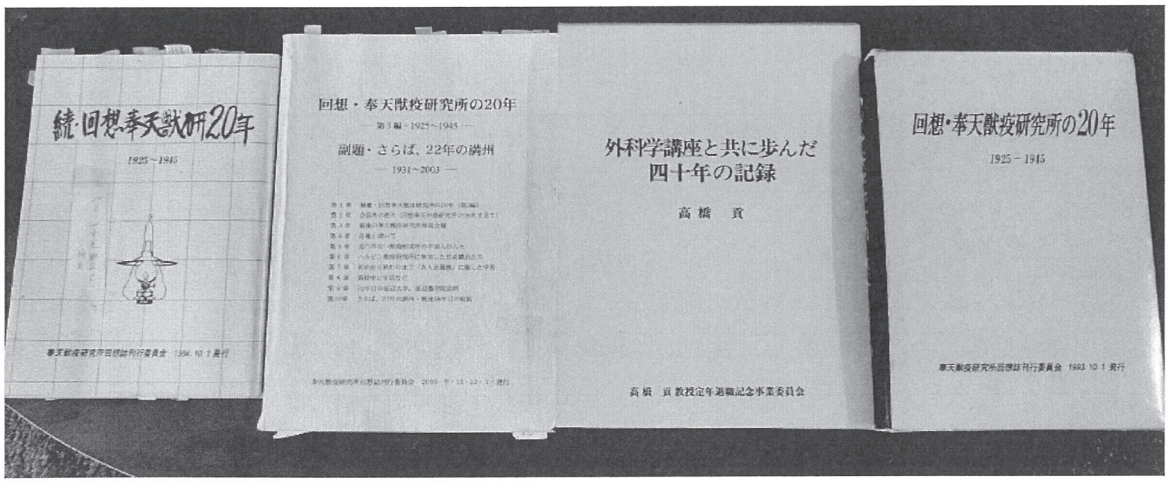
丹羽己男、田島正典等によって、牛肺疫、鼻疽、鶏ペスト外家畜の病理学的研究
間もなく、山極三郎が東大伝染病研究所に招かれ、上京後は持田勇研究官が主任になって鼻疽の研究に専念した。

科学研究室　主任　梅　津　元　昌　研究官

浅見望、羽賀正が免疫血清、菌体成分、或いは牛蠅、蛆毒素などについて、生化学的研究が行われた。

規制動物研究室　主任　小　野　定　雄　研究官

山下次郎副研究官、土佐幸造
牛蠅、ダニ、旋毛虫、その他寄生虫疾病について研究される。



戦争と共に獣疫が発生。

昭和13年、吉林省で牛疫が大流行。興安省でも発生する。官民一致しての防疫に当たる。

対策として、鮮満国境、外蒙や北支と接する国境地帯に牛疫の免疫遅滞を造成しようと雄大な構想を樹立。

牛肺疫が昭和14年、浜江省に発生、興安省通過、牡丹江、吉林、間島、各省に蔓延して獣研は協力する。

突貫工事で牛舎10舎を造る（鉄筋コンクリート、スチーム暖房、ガス付)。

牛疫、牛肺疫に対しても、対策が成功して獣研は満蒙に於ける永年の体験と学識を以て戦時下の日満両国にその任務を果たすことが出来た。

４、特殊訓練所が発足した

獣研は当時日本の重要国策のひとつである、北満開拓義勇軍の畜産関係特殊訓練所事業の一部を昭和17年４月以来を担当するようになった。

奉天獣研に学び、育てられた多くの人材は、日本のみならず、中国大陸や朝鮮半島で獣医学界の中心的存在となって活発な活動を展開している。

（昭和46年発刊満洲畜産馬政史録より）

○戦後はハルピン獣研が発足

ハルピン獣研に参加した日系職員、　ハルピン獣医研究所

1948年８月、中華人民共和国農科学院
ハルピン獣医研究所創建に参加した日系人の覚書として記録に留める。
（2003年１月４日記　回想誌2003-98頁より）

桑原さん　（元）ハルピン家畜防疫所長　（元）東京大学獣医科卒
参加するも間もなく死亡…長男の方が参加する。

鵜川さん　（元）ハルピン家畜防疫所　（元）東京高専獣医学校卒
臨床部門担当1943年12月　結核で死亡

及川さん　（元）ハルピン家畜防疫所　（元）宮城県立農業学校卒
1948年12月ハルピン獣医研究所にて豚コレラ関係研究中倒れる

佐々木芳吉　（元）ハルピン獣研支所
ハルピン獣医研究所に参加するも甘粛省家畜防疫所に転属

桑原　義一　　奉天獣研、東京高等獣医学校卒
獣研ハルピン支所から、ハルピン獣医研究所　創建に参加
延辺農学院大学教授（細菌学）1953年帰国。

氏家　八良　（元）ハルピン獣研支所　県立宮城農学校卒
奉天獣研に昭和５年から牛疫室（帰国後宮城県短大教授）
獣研ハルピン支所から、ハルピン獣医研究所　創建に参加

富岡　秀義　奉天獣研からハルピン支所へ　空知農高等学校卒　昭和６年
ハルピン獣医研究所　創建に参加
延辺農学院大学教授に（病理学）。1953年帰国

◎奉天獣研以来の牛疫家兎化毒ワクチンの貢献

1949年～ 1950年、氏家、袁慶志によって中国の技術者と共同で、牛疫家兎化弱毒反応ワクチン完成する。

1956年に「中国科学院化学賞」を授与される。

ペストワクチン・疱瘡ワクチンにも匹敵する快挙である。奉天獣研開設以来の関係者の喜びである。（ノーベル賞級）

◎満洲開拓青年義勇隊特殊訓練所

国立奉天獣疫研究所は、大陸科学院の中の獣疫研究所でして、義勇隊開拓団及び周辺開拓団に必要な獣医を養成する為に、特に満洲に常在する家畜伝染病の予防・治療に加えて、畜産の技を習得する為に仮「満洲開拓青年義勇隊特殊訓練所」として創設されたのでした。

二ヶ年の課程ですから副獣医資格でした。兎に角、満洲の家畜伝染病対策でした。

5、ハルピン獣医研究所訪問（日中友好の旅に於いて）富岡秀義先生の紹介で

（元）奉天獣疫研究所に技術者でおられた呉庭訓（ハルピン獣医研究所前所長）先生、王錫墾先生（元）奉天獣研研究士のお二人の先生にハルピン・スワンホテルにお迎えを頂く。

（友好旅行の全員・13頁）

ハルピン獣医研究所を表敬訪問（日曜日であったが繰り合わせ戴いた）

所内見学（全員・13名）、会議室に招かれる。

徐所長さんのお話を聴いて、嬉しかったことが二つありました。

その一つは、この研究所が1948（昭和23）年の創建にあたって、元獣研職員であった方々が、中国政府によって留用をお願いした。氏家八良、富岡秀義、佐々木芳吉、桑原義一、及川利兵衛の諸先生の御指導と協力。そして元獣研職員で豚コレラ研究室勤務の袁慶志（獣医養成所出身・元所長・故人）、王燕昌（畜大一期生）、王錫墾、盧道純の諸先生御指導の下に新中国になって新たに参加した中国の技術者によるものです。

平成5年7月22日より9日間の日程で多年の念願であった旧満州の勃利義勇隊訓練所、黒河省の璦琿開拓団跡地を13名の友人とともに訪問し、いまは故人となった拓友たちの慰霊と日中友好の旅をしてまいりました。

旅行の日程上途中佳木斯、、ハルピン、黒河にも立ちよりました。そのうちハルピンでは、富岡さんや氏家さん方が参加されて創建された「中国農業科学院ハルピン獣医研究所」を表敬訪問することができました。

訪問日はあいにくと日曜でしたが、予め富岡さんから訪問依頼をしておいて頂いたおかげで飛行場から到着したホテルには旧獣研におられた方々がお迎えに来て下さいました。

王錫墾先生、盧道純先生、掛谷、呉庭訓先生

そして短い時間でしたが、研究所へ私たち一行案内して下され、ごあいさつとともに研究所内部を審さに見学させて頂きました。

奉天獣研は創立満20年余で「八・一五」を迎え崩壊の運命をたどりましたが、ハルピン獣研が開所されてもう45年目を迎えていきました。

創立当時の旧市立ハルピン家畜防疫所の建物は、見学しませんでしたが補強されながら血清・ワクチン製造や実験動物舎としていまも活用されているそうです。

昭和25年に建設された本館は、三階建で奉天獣研本館の二倍もある立派なもので、そのうえ、最近正面から左側に新館研究室ができており、旧館は、元獣研の本館を偲ばせるもので、なつかしく感じました。

新館の応接室で徐所長さんはじめ呉庭訓前所長、獣研の豚コレラ室におられた盧道純先生（獣医養成所出身）や王錫懇先生（新京畜大二期生・豚コレラ室）の方々から親しくお話をきくことができました。

お話を聞いていて嬉しかったことが二つありました。

その一つは、この研究所が一九四八・昭和23年の創建に当って、元獣研所員であった方々、中国政府によって留用をお願いした氏家八良、富岡秀義、佐々芳吉、桑原義一、及川利兵衛の諸先生方のご指導とご協力、そして元獣研所員で豚コレラ研究室勤務の袁慶志（獣医養成所出身・元所長・故人）、王燕昌（畜大一期生）、王錫墾、盧道純の諸先生御指導の下に、新中国になって新たに参加した中国の技術者によるものです。

㉘ ハルピン獣医研究所を訪れて

（第三期訓練生）　掛谷敏男

従って私どもは、中国の諺にある「はじめに井戸を堀った人々のことは忘れない」「否、忘れてはならないといまも考えているのです。」との言葉でした。

二つ目には私はそれまで「奉天獣研は崩壊してしまった」と考えていたが、「草創期のハルピン獣研は、元獣研の日中諸先生の参加によって基礎が固められて、現在の中国随一といわれるハルピン獣医研究所になった」とのお話をお聞きして「奉天獣研の精神というか目的がハルピン獣研に立派に承継されている」との感をもつことができたからです。

（20年誌より抜粋）

従って私どもは、中国の諺にある「はじめに井戸を掘った人々のことは忘れない」「否、忘れてならないといまも考えているのです」との言葉でした。

二つ目には、私はそれまで「奉天獣研は崩壊してしまった」と考えていたが、「草創期のハルピン獣研は元獣研の日中諸先生の参加によって基礎が固められて、現在の中国随一といわれるハルピン獣医研究所になった」とのお話をお聞きして、「奉天獣研の精神と言うが、目的がハルピン獣研に立派に承継されている」との感をもつことができたからです。

加えて、創建以来、種々研究が重ねられて、過去に於いて蔓延していた家畜伝染病は完全に防遏されて、現在は皆無の状態です。

私達はご指導頂いた日本の偉大なる先生達に大なる感謝を致しています。

今後も此の獣医研究を通じて中日友好の伴を懇ろに継続して行くことを希っています。

徐所長さんより、賞賛のお言葉を戴いて、まるで私がお誉め戴いた思いがしました。

6、獣研の活躍、成果

獣研は国立、国の機関でして、私達の特殊訓練所は臨時、取り付けのものでした。

開設以来、20年間の獣研の研究実績には驚いています。満洲の家畜の伝染病の総ての研究を統括する所でした。

日本には、家畜伝染病は昭和15、16年頃には殆ど無かった。むしろ皆無の状態でした。ところが満洲には、どの家畜にも伝染病が常在している状態でした。満洲の在来の家畜は比較的強いのですが、日本から移入した家畜や、満洲で繁殖した日本の家畜（血液の進んだ品種）は、その地域に伝染病が発生したらひとたまりもなく、全滅状態になる始末でした。その対策のワクチンや血清を製造していました。

満洲の開拓地、勿論、地方にも伝染病が発生したら、その地に送り、近い所は出張治療にも行っていました。私達も二ヶ年の間に伝染病他一般疾病も殆ど教習を受け、ワクチン及び血清を製造する課程の採血や病理解剖に週２～３回、交替で実習に入っていました。

勿論のこと、その元々の家畜の飼育管理で現地の方と一緒に行っていました。

２年生になって、私の担当は「豚コレラ」でした。

豚コレラの免疫。母体免疫（母親から貰った免疫）に就いては以下の通りです。

生後２週間の子豚に豚コレラの毒液を１cc注射するのです。４～５日すると（10頭、９頭の中）罹病して１頭か２頭が死亡します。又毒液を注射します。２週間に１回、次には毒液を増やすのです。繰り返す中に免疫が高度化して完全な豚コレラの免疫豚が生じるのです。

私が卒業する時は、未だ完成していませんでしたが、訪中の時は完全なものに成っていました。

牛、馬、羊、豚、家禽、犬、総ての家畜の伝染病他も研究されていました。

◎教授紹介◎

富岡　秀義先生

ハルピン獣医研究所の創設に尽力された後、日中共同研究で血清、ワクチンの製造に、そして昭和23年より延辺大学創設に（桑原義一氏と共に）協力され、延辺大学の教授となり、新中国の若手の教育指導に貢献され、昭和28年に帰国されました。

その後、1985年に教授、研究をした延辺大学の創立記念に招かれて訪問され、教え子と親しく交わされました。

（別）謝礼文…数々。

又、1998年ハルピン獣医研究所の創立50周年に招かれて祝賀に参加されています。

旧朋友と親しく。

【訪問の目的】

① ハルピン獣医研究所の創立記念祝賀。

② 札幌市と瀋陽市が姉妹都市であり、富岡秀義が設立した札幌労働組合連合会（略・札幌労連）と瀋陽総工会斡旋による２つの合弁公司の視察（木村正勝社長）。

③ 富岡個人として、解放前に犯した、日本政府と軍隊が貴国人民に耐え難い苦痛とご迷惑をおかけした「謝罪」の旅であった（富岡）。

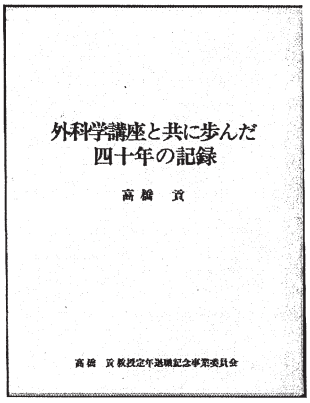
富岡先生は、102歳で奥都城に。

高橋　貢氏

国立奉天獣疫研究所

満洲開拓青年義勇隊特殊訓練所（４期生）昭和19年入所

獣医畜産学　修学の途中、終戦



帰国後、麻布獣医大学に入学され、獣医師取得後、地方に勤められ、その後、母校麻布獣医大学の講師（昭和30年）、助教授（昭和32年）、教授（昭和34年）に昇格されて以後40年間教授で、研究と講義に専念されました。

40年の間に、たくさんの研究論文を発表されて、獣医外科学に於いて世界の権威者になられて、世界各国に講義に発表と行かれた。

新中国の北京農業大学、東北農業大学等にも行かれ、ハルピンの東北農業大学には平成３年、４年、５年と続けて３回、行っておられます。

勿論のこと、ハルピンの獣医研究所にも行かれて、研究発表や講義もされて、日中友好の実を挺身された。

戦後に獣研会が開催されて、その都度親しく昔を語り合っていました（私３期生）。

高橋　貢さん（４期生）　平成27（2015）年　逝去される。

７、結語　おわりに当たって

終戦後に於いて、此れ等の研究士（私達の先生も）８人の方が、留用（残されて）、続いて研究指導に８年間残留されたのでした。加えて731部隊の化学兵器の使用の後始末もされたのでした。

留用の中の一人、富岡秀義先生のお言葉、紹介で（書面）訪中の際（平成５年７月）、ハルピンの獣医研究所に友好旅行の全員が寄せて頂いて所内見学をしました。その際、（元）

奉天の獣研に研究士でおられた２人のお方（１人はハルピン獣医研究所の前所長さん）がハルピンスワンホテルまでお迎え頂いたのでした。

　此の時、徐所長さんが、挨拶の中で、

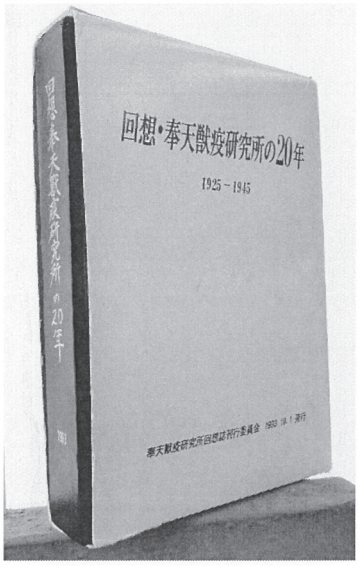
「先の８人の日本人先生の留用時に、研究、御指導を戴いて、この様な立派な研究所が出来て（中国随一の）現在も続いて研究をしているのです。現在に於いて家畜の伝染病は中国には皆無です。偉大なる日本人先生達の御指導のお蔭です。」

と、慶びと賞賛の言葉を戴きました（王・通訳）。

　まるで、私が誉められている思いがしました。

　中国に対していろいろと気の毒な事態もありましたが、一方では、この様な中国に対して貢献もあったのでした。

　最後に「回想・奉天獣疫研究所の20年」を紹介します。



＝本の紹介＝

回想・奉天獣疫研究所の20年　1925～1945年

奉天獣疫研究所回想誌刊行委員会　1993.10.1発行

編纂：豊岡　秀義　　頒価￥3,000（会員外￥5,000）

総頁数：700頁

（今回投稿のものは、すべてこの本から抜粋、写真を採用しました。全容を語ることはできませんでした。しっかりした内容に感謝を送ります。）

続・回想・奉天獣疫研究所の20年

一九九四・一〇・一　印刷
一九九四・一〇・一　発行

編さん　富岡　秀義

発行所　「回想・奉天獣疫研究所の20年」刊行委員会

住所　〒003　札幌市白石区東札幌一一五一二一二三
富岡　秀義気付
電〇一一一八三一一九五九八

印刷所　北海道凸版印刷株式会社

住所　札幌市東区北20条東6丁目

頒価　会員　一、〇〇〇円
会員外　二、〇〇〇円

（限定版）

掛谷　敏男（かけや・としお）　91歳　昭和17年　義勇隊として勃利訓練所入所。昭和18年　奉天獣疫研究所入所。昭和20年10月　シベリア抑留。昭和22年　舞鶴港に引き揚げる。八百屋・酒店経営。定年退職し現在に至る。

「奉天獣疫研究所」掛谷　敏男（補足）

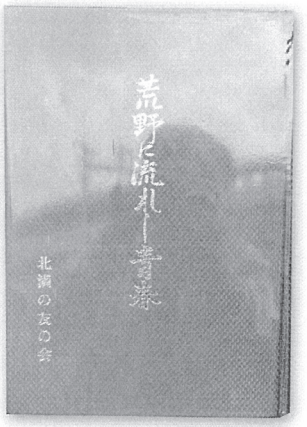
末広　一郎

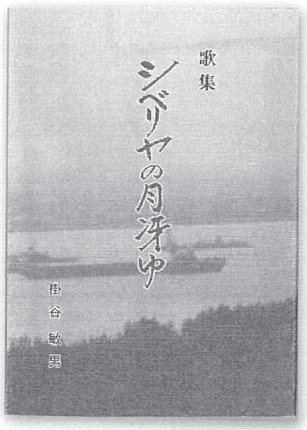
「奉天獣疫研究所（奉獣研）」に関する掛谷敏男さんの執筆を拝見して、より「奉獣研」の内容を深めて頂きたいのと、掛谷さん本人のことについて、補足説明を加えます。

お互い満蒙開拓青年義勇隊員であります。広島県でもそうであるように、義勇隊員の慰霊祭を恒例の護国神社で毎年３月第２日曜日と定め催行されております。広島県選出の義勇隊員各中隊の生存者、遺族の方が顔を合わせ、護国神社に集合しておりました。その関係で、掛谷さんを始め、多くの拓友とも挨拶程度の交流はありました。

義勇隊員の仲間達に末広が印刷屋であることも知られるようになり、掛谷さんの中隊が、「曠野に流れし青春」という中隊史を上梓されました。編集委員の掛谷さんとは親しく交流を続けておりましたところ、彼が短歌の詩人であることを知り、中国新聞文芸欄に投稿されておられました。或る日、短歌の「シベリヤの月冴ゆ」の立派な本を発行されました。

そのお手伝いをしたことも言うまでもありません。続いて「妣の思い出」としてもう一冊発刊されました。



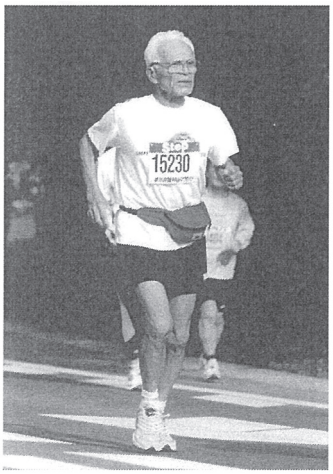


今回も奉獣研にまつわる歌を提供されましたが、彼の投稿の原稿は紙面の都合上、掲載できなかったので、ここに掲載しました。

広島県でも一流の文化人として崇められています。

―― 短歌 ――

試験牛舎 スチーム暖房給湯槽 飼つけ終えて 時には風呂も
採血を 嫌がる牛を 牛枠に 引き込む技を 地人に習う
太き針 頸静脈に 差す節那 大き胴体 ぴくりと震えり
臓器やら 淋巴を外す 病理解剖 初習の頃は のど越さぬ飯



第15回福知山マラソン（78歳）

マラソンを趣味にされていて、全国は元より海外まで遠征参加されました。

健康のためにと言われており、決して入賞するのが目的ではなく、完走するのを第一義に走られたそうです。

奉獣研の３冊の本が紹介されています。①回想・奉天獣疫研究所の20年、②回想・奉天獣疫研究所の20年（第３編）、③続・奉天獣研20年。

拝見しますと、すばらしいのと全満に亘り、数々の成果、実績、成功を残された貢献は、頭の下がる思いで一杯であります。３冊を拝見すると、奉獣研のすべてを理解することが出来ます。

３冊の中から、あれもこれも抜粋してお知らせしたいが、かなりの頁数になるので我慢するとして、感じたことを一つ申し上げます。

７３１部隊と１００部隊

森村誠一著「悪魔の飽食」の７３１部隊をご存知と思いますが、奉獣研も再三に亘って、７３１部隊に協力の要請があったようです。

当時の持田研究官はお断りされました。どうやら関東軍と言えども、満鉄に対しては強く傲慢な態度は通じなかったようです。戦後の集いで、「断ってよかったね。もし要請に応じていたら戦犯となるところだった」とあります（20年史より）

７３１部隊は、人間をモルモット扱いにした秘密の部隊でありましたが、１００部隊というのがありました。そこは動物を実験し、解剖していた、人間でなく動物だったため、大きな問題にならなかったそうです（20年史より）

３冊目の「続奉天獣疫研究所20年史」には、主に戦後の懇談会の集いが家族ぐるみで、一流のホテルなどで開催されています。たくさんの写真が掲載されていて、楽しい雰囲気で報じられています。当時の教授や研究生たちを中心に開催されています。我々義勇隊とは違って羨ましい限りであります。（特殊訓練生も一緒）

終わりになりますが、声を大にして申し上げたいのは、真の日中友好を歩んでこられているのです。創建の時より始まっていたと思います。確たる満洲国が存立しない時から、大正14年創立とは、私の生年月日と同じです。

満鉄のことを兎や角は言えない、当時、一早く獣研の必要性を説いて、日本の学者と研究者を、中国からも要人を送り込み発足させた。満鉄はすごいと思います。今でも奉獣研はハルピン獣医研究所となり、100人、200人の研究生が在籍しているとのことです。中国の獣医研究の基礎が奉獣研から生まれたと聞くにつけ、日中友好の基がここから生まれたと思います。

ハルピン獣医研究所となり、多くの研究生達は、各大学の教授となり指導員となって活躍されている現在、改めて「掛谷さんが言われるように、日本人の誇りである」を認識させられました。

戦後ハルピン獣医研究所になっても、日本から当時奉獣研の学者たちが協力、教授として交流されている。こんな素晴らしい本当の日中友好があるだろうか、真の日中友好を奉獣研より学ぶことができました。

（すえひろ・いちろう：1925年生まれ。40年、嫩江訓練所に入所。43年、八家子（はっかし）開拓団へ入る。日本の敗戦後シベリアに抑留さる。49年、舞鶴に引き揚げ、49年から53年まで国立療養所に入院。55年みなみ工房設立。60年、とき印刷設立。定年で退職し現在に至る）

獣研の想い出

（第三期訓練生）　掛谷敏男

私は、昭和18年6月、満州開拓義勇隊勃利（ボクリ）訓練所（東満総署）から第三期特殊訓練生として入所しました。

開拓地のランプ生活からいきなり都会に出てきた田舎者にとっては、なにもかもがまぶしいように思いました。都市ガスの実験室はともかく、牛舎から豚舎に至るまで上下水道・スチーム暖房といった設備には、ただただ驚嘆するばかりで、育った日本の農村はもちろん、今後の開拓団では…と思うと、タイムカプセルか、夢の世界へ放りこまれたようにさえ感じました。

だが日がたつにつれて実験・試験というものは、こうした設備・環境の下で一歩一歩きめ細いデーターの積み重ねの上に築き上げられ、それを野外というか、現地の開拓地の畜産・防疫に貢献する基本になるのだ…と言うことが段々と分るようになるのでした。

当時は戦争末期のこととて物資の不足はひどいときでしたが、食べざかりの私たちにとっては不自由なく、とりわけ実験動物のおこぼれもあってか、肉類は存分に供給されて、とても幸せでした。

一年をすぎた19年夏頃よりは、二期生の小沢　進さんからの引継ぎで井上先生（私たちは中国語でジャングイ・親分の意・と呼んでいた）の指示で同じ四期生の高橋　貢・高橋　清・稲葉典男氏ら四人一組となって他の研究室での実験に当りました。

なぜか記憶に刻まれているのは、豚コレラ研究室での免疫研究のことでした。それはヨークシャとバークシャの一代雑種の繁殖に携わり、生後一ヵ月位の仔豚を用いて異った量の豚コレラ毒の血液と免疫血清を接種し、一定期間の後に今度は、毒血のみを接種して、個々の仔豚の免疫獲得というか、免疫度合を試験するのでした。この実験は、「豚コレラ共同免疫試験」、略して「豚コレラ共同接種」と呼ばれ、野外において当時流行する豚コレラ防疫を自然状態で罹病する前に、免疫血清と病毒を同時に接種する。平易な言葉でいうと弱く発病させながら免疫血清で発病を抑え、かつ、高度な免疫を体内で発生させようとするものでした。

短い期間でしたが、かなり効果があることを知り、その広はんな実地応用を期待していましたが、間もなく終戦になってしまいました。

あっという間に二ヵ年の課程を修了して昭和20年6月末、黒河省の開拓団に配属され、農耕馬の「鞍傷」などの治療に専念していたところ8月9日のソ連参戦を迎えました。

関東軍の指令により北安省遜呉の一線陣地で軍とともに弾薬輸送の任についたとたんに「八・一五」の敗戦。予想だにしなかったシベリヤ連行・抑留・労働々々の二ヵ年と過すことになりました。

幸いに祖国に帰ったものの、未熟な訓練生ではあったが獣研での研究の結果どうなったのか…。伝染病常在の満州は…。との思いがつのるのでした。

奉天獣研の友

獣研での想いは数々…とりわけ創立記念日の畜魂祭・家族を混えた盛大な野外パーティ！…おいしかったジンギスカンやギョーザの味覚は、50年を経たいまも忘れることはできません。

ともあれ、獣研での二ヵ年間は、私にとって「青春そのもの」でした。

（20年誌より抜粋）

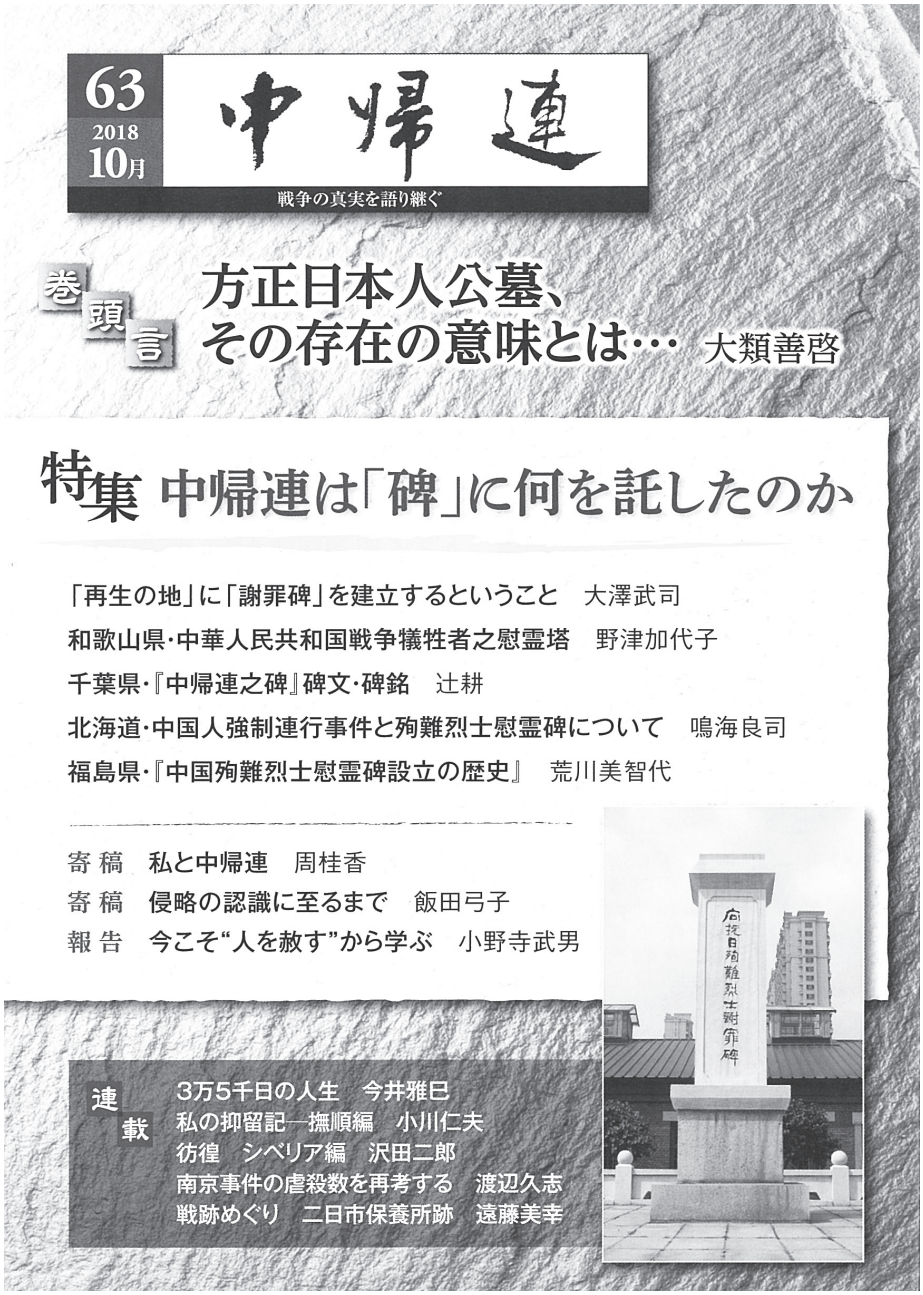
「中帰連」掲載の拙文転載について　　大類 善啓

季刊「中帰連」は、「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」が発行している。この会の前身が「中国帰還者連絡会」である。中国での戦争犯罪容疑で、日本軍人をはじめ、1000 人ほどの人たちがシベリア抑留を経て 1950 年、主に撫順戦犯管理所に抑留された。戦犯の中には愛新覚羅溥儀もいた。

彼らに対して中国共産党は、シベリア抑留時代と違って、栄養豊富な食事、手厚い保護など寛容な政策を取り、自らの罪を認識するように促し、いわば「鬼から人間へ」の思想転換を行った。彼らは全員無罪として釈放され、1957 年、日本への帰国を許された。帰国後、元戦犯たちは「中国帰還者連絡会」を組織し、反戦平和運動、日中友好運動を展開した。

今回「中帰連」編集部より、方正日本人公墓について原稿を依頼され執筆した。発行人である姫田光義さんから快く転載の許可をいただき、ここに掲載する。ご叱正をいただければと思う。

本誌については、350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6　NPO 中帰連平和記念館付「中帰連」発行所　FAX020-4624－2381に連絡されたし。定価500円。下の表紙は A5判より縮小している。



巻頭言
方正日本人公墓、その存在の意味とは・・・

大類 善啓

『人民日報』から消えた「国際主義」

二〇一八年、今年は日中平和友好条約締結四〇周年という節目の年である。しかし、単純に慶ばしいとも言えない状況が世界を覆っている。

アメリカのトランプ大統領は「アメリカ・ファースト」という排外的ナショナリズムを煽り、メキシコからの移民政策などを巡って世界から顰蹙を買っている。トランペット、と揶揄される安倍晋三だが、その本心をしっかりと洞察すれば「中国嫌い」であることがわかるだろう。そして中国では、江沢民が主席として登場して以降、「愛国主義」という言葉が頻出してくるのだ。こういう状況を見ていると、親中派と見られている私などから見ても、「おいおい、新中国建設の理念や理想はどこへ行ったのか」、と言いたくなってくるのである。

私が親しくしていたある華僑はかつて、「新中国になった一九五〇年代、中国人民は本当に国のために一生懸命に働いた」と語ったことがあった。彼の父親は、「満洲国」時代、中国から派遣された留学生だった。日本女性と結婚し、鉄道技術者として旧満州に帰り、満鉄に入った。一五歳ほど年長のその友人は日本の敗戦時、日本が管轄する北京中学に在籍していた。日本語で育ったこともあり、父親の勧めに従い日本で高等教育を受けるように日本に住みついた。父親はかつて満鉄にいたこともあり、「文化大革命」時には悲惨な状況が彼を襲った。兄たちも文革では被害者だった。彼は私に文革の悲劇を語る時、「一〇〇年経たないと、被害を受けた人の傷は癒えないね」とよく語った。一〇〇年ということは三世代を経て、人々が受けた傷は心から消えていくということなのだろう。

さて、一九五〇年代、前述のように新中国は輝き、国際主義的精神が隅々まで行きわたっていた。

つい数ヶ月前、黄泉の国に旅立った飯白栄助さんは、東京からの開拓団の一員として、一九四四年四月、両親とともに旧満州へ渡った。敗戦の前年である。彼は、日本の敗戦後も中国に残り中国人民解放軍に入った。日本人としては稀有な例だが一八歳の時、朝鮮戦争に従軍したいと懇願し、なんとか衛生隊ならと許され朝鮮戦争に参加した。

その飯白さんが体験したことで私がいたく印象に残っているのは次のようなことである。

人民解放軍に入ると、時に仲間の若い中国人兵士と喧嘩になる。中国人は飯白さんに対して「小日本(シャオリーベン)」とか「日本鬼子」言う。言うまでもなく、二つとも日本人に対する蔑称である。

そう言われると飯白さんは怒り、殴り合いの喧嘩になる。すると幹部が飛んできて仲裁に入る。そうしてまず中国人兵士を叱った後、飯白さんに対して、「お前も民族意識が強すぎる、もっと国際主義の精神を持て」と言うのだった。

地方の末端の幹部の中にも、国際主義精神が生きていたのである。ところがここ十数年、党中央機関紙の『人民日報』から国際主義という言葉がほとんど出てこなくなった。それに代わって出てきたのが「愛国主義」である。

バタバタと斃れた〝満蒙開拓民たち〟

国際主義的精神は末端の地方幹部の中にも息づいていた。その生きた証左がまさに、ハルビン市郊外に建立されている日本人公墓である。

中国にある、唯一とも言っていい日本人公墓を語るには、いわゆる満蒙開拓団に触れなければならないだろう。

開拓民と言っても、本当の意味で「開拓した」わけではない。関東軍は、中国の農民たちが現に住む農地を安く買い叩いて土地を手に入れ、あるいは武力を持って農地を奪い、日本からきた〝開拓民〟たちに与えたのである。それ故、当初に入った開拓団は武装移民

と言われて〝入植〟したのだった。

土地を奪われた中国の農民たちは、この恨みを決して忘れなかった。農民にとって土地は、命の次に大切なものである。彼らの日本への恨みはいずれ日本に返ってくるだろう。

もちろん、開拓団員たちは喜んで中国東北へ行ったわけではない。帝国主義的な天皇制国家である当時の日本政府は、各地の地方自治体に発破をかけ、開拓団を満洲へ送り出した。最も多かったのは長野県からであり、例えば長野県泰阜村は分村という形で満洲に入って行ったのである。

日本全国から、およそ二七万人といわれた開拓団員たちの多くが送り込まれた先は、ソ連との国境、いわゆるソ満国境に近い地域である。関東軍そして当時の日本政府は、ソ連からの攻撃を警戒してソ満国境に配置したのだ。いわば人間の盾として開拓団は考えられていたのである。

当時のマス・メディアはこぞって、「行け！ 満洲へ」というスローガンを掲げ、満洲の大地を天国のように煽り立て、誰もが地主になれるように喧伝した。送り出す村長の中には事前に現地を視察したところ、地元の農民を送るには危険である、と見て開拓団を送ることを見送った村長もいたが、それは本当に稀有な例だった。

ソ連参戦、日本敗戦後の逃避行

一九四五年の八月九日、ソ連軍は日本との不可侵条約を破って突如、国境を越えて〝満洲国〟に侵攻した。開拓団にいた壮年の男たちは召集され、残っていたのは老人と女たち、そして子供たちだった。

そうして迎えた八月一五日、日本の敗戦とともに、傀儡国家〝満洲国〟は為すすべもなく崩壊した。昨日まで開拓民たちに、にこやかに接していた中国の農民たちの顔色は変わった。土地を奪われた中国農民は日本への恨みを晴らすかのように日本人を襲い、彼らの家に入り込み、家財道具を奪った。

ソ連軍の攻撃、そして中国の農民たちからの襲撃に、開拓団員たちの逃避行が始まった。取りあえず方正へ行こうと多くの開拓民たちは方正を目指した。

当時の在満日本人たちは、方正を〈ほうまさ〉と呼んだ。同じ省にある宝清県（ほうせい）と区別したのだ。その方正には関東軍がいる。軍の食糧基地があるたちは中国人がもらって助けてやってもいいという指示を出した。指示されるまでもなく、男の子をほしいと、中国人夫婦たちにもらわれていった子どもたちもいた。「日本人の子は賢い」と思われている一方、将来の労働力という計算もあって中国人たちに引き取られていった子供たちだった。

結婚もできない貧しい中国の男たちの中には、日本の婦人たちを欲しがる人もいた。生きていくには中国人の妻になるしかない。生きてさえいれば、いずれ懐かしい日本に帰ることもできるだろうと、いやいやながらも中国人の家庭に入っていった婦人たちも多くいた。後年、残留婦人と孤児が一番多かった地区が方正だった所以である。

しかしますます死者は増大した。各収容所に遺体は山積みされていたが、冬を越えて暖かい季節になると、凍結状態だった老人、婦人、子どもたちの遺体は徐々に溶け始めてきた。このままの状態は衛生事情から言ってもできることではない。方正県人民政府は遺体を一体一体、車に積み重ね、人の背丈ほどの高さに積み上げ、方正のはずれにある炮台山の東に集めた。そしてガソリンを三日三晩遺体にかけて焼いた。

と言われていた。

ソ連の攻撃、そして中国人の襲撃を逃れるために、足手まといになる子どもや幼子を殺め、またソ連軍人の女性への凌辱を受けるなら死んだほうがましだと、集団自決した開拓団もいた。

なんとか方正まで行けばハルビンは近い。ハルビンの先には懐かしい日本があった。そして、二～三ヶ月ほどの逃避行を経て生き延びた開拓団の多くはやっとの思いで方正にたどり着いたのだった。

しかし、関東軍は南方へ去った後だった。開拓団員たちはともあれ方正県の各地の収容所に収容された。中国東北の冬は酷寒の季節である。収容所の難民たちが着るものも薄く、また食糧は不足している。身を刺すほどの厳寒のなか、栄養不良から病人は続出し餓死者が出る、凍死する者も出る一方、発疹チブスなどの伝染病も増え、死者は続出した。

日本人にも温かった解放軍

中国で最も早く人民解放軍が入った東北地方だが、立ち上がったばかりの方正県人民政府にできることには限界がある。それでも人民政府は、日本婦人や子供

残留婦人・松田ちゑは白骨の山を「見た」

山形県天童市出身の松田ちゑさんは、開拓団の一員として中国東北、現在の黒竜江省依蘭県に入った。天童で結婚した夫は召集され行方知らず。悲惨な逃避行の状況を見ながら、やっとの思いで方正の中心から少し外れた松花江沿いにある伊漢通の収容所に入った。

松田さんは元気で、周りの日本人難民たちの世話をしていたが遂に倒れてしまった。発疹チフスにかかってしまったのだ。高熱が出て食欲がなく、のどを通るのは水しかない状態である。そうして六歳になるひとり娘に伝染した。

最愛の娘を険しい山で背負い、子どもと一緒に日本へ帰るまではと頑張ってきた松田さんだったが、子どもは自分を残して旅立ってしまった。死んだ娘を弔うこともできず、知人に骨と皮ばかりになった娘を預けて、病床から見送るしかできなかった。

元気な時は、「ソ連軍や中国人には死んでも行かない」と口癖のように言っていた松田さんだったが、ここで決意するのだ。死にたくない。中国人の家に行けば生きられるだろう。松田さんは親しい人に、中国人が来たら世話をしてくださいと頼み、崔永清さんと再婚をするのだ。そして一九四七年には長男の崔鳳義さんを出産した。

失政で発生した飢饉

一九五八年から六〇年にかけて、毛沢東が主導した「大躍進」政策は破綻した。人民公社の設立や大衆動員によって、鉄鋼生産や穀物生産などを短期間に急激に増産しようとした政策が挫折したのだ。その結果、各地で深刻な飢饉が発生した。一説には、一五〇〇万から二〇〇〇万人が栄養失調により死亡したと言われているほどである。

今まで私有地を認めなかった中国政府は一九六三年、今年の中国人民の食糧は秋の収穫まで間に合わないので、農業公社の畑でない荒地を開墾して食糧を調達していいという指令を出したのである。

松田ちゑさんは炮台山の麓に住んでいた佐藤栄さんを訪ねた。佐藤さんも残留婦人であり中国人の嫁になった人である。勤め先も荒地を開墾して種まきをするようにと五日間の休暇をくれた。そして佐藤さん夫妻に案内されて荒地に入って行ったのである。

松田さん夫妻は、枯れ草を鎌で刈り始めた。二時間ほど刈って一休みした松田さんだった。それから松田さんは、この荒地がどれぐらい続いているのかと枯れ草を分けながら進んで行った。

枯れ草を分けてすぐ、白骨が土にまみれ、三メートル四方の場所にひとかたまりになっているのを松田さんは見た。見た瞬間、背筋が寒くなった。一七、八年前に山となっていた同胞の白骨を見た時のことを思い出したのだ。その時の松田さんは南無阿弥陀仏と何度か唱え、手を合わせるしかできなかった。

松田さんは夫のところへ引き返そうと反対側の草を分けながら歩くと、また土にまみれた白骨に出会ったのである。

松田さんは思った。「開拓団の女や子どもがこんな無残な姿になっているのはあまりにもひど過ぎる。日本政府はこのような犠牲者の遺骨の存在を知っているだろうか」胸が押さえつけられるようだった。夫と再び枯れ草を刈り始め、鎌を握っていながら心は、枯れ草の白骨の山のことばかりだったのである。

この遺骨をなんとかしてあげられないだろうか。佐藤栄さんと話し合い、自分たちだけでも葬ることができないだろうかと考え、翌日松田さんは方正県政府を訪ねるのである。

公安局の日本人担当に状況を説明し、なんとか自分たちで葬りたいので許可してほしいと頼んだところ、県政府はしばらく待ってほしいと松田さんに伝えた。

県政府はすぐに上級機関の黒竜江省政府にお伺いを立てた。省政府は更に中央政府にどうすべきか尋ねた。松田さんの願いは、そうして時の外相、陳毅のところに行き、最終的に周恩来総理のところに行った。

周恩来は熟慮した。そしてこう結論を出した。「開拓民といえども日本軍国主義の犠牲者である。婦人や子どもたちに罪はない。丁重に葬り公墓を建立していい」、と日本人公墓建立を許可したのである。

一九六三年五月、松田さんは県政府から呼ばれ、こう伝えられた。

あなたたちの願いはよくわかります。あなたたちも日本軍国主義の犠牲者です。皆さんは現在、中国の社会主義建設のために積極的に努力してくださっているのです。墓碑の建立は人民政府の手でやることに決まりましたから、皆さんは安心して家で一生懸命働いてください。

松田さんは感謝の思いでいっぱいだった。どうお礼の言葉を言っていいかわからず、何度も「人民政府の皆さん、ありがとうございます。ありがとうございます」という言葉しか出なかった。

公墓建立担当者、趙喜晨の証言

日本人公墓建立の仕事をするように中央から指示されたのは、黒竜江省外事弁公室にいた趙喜晨だった。彼はこの仕事に真剣に向き合った。

墓石は、国交のない当時の日中関係を考えれば、セメントで固めたコンクリート製にしてもおかしくはなかった。しかし趙は考えた。「歴史の考察にも耐えうる永久的な墓碑を建てる必要がある」。そして関係者で意見が一致したのは、「長い時間にも耐えうる石材で作らなければならない」ということだった。

そしてハルビン市の外国人墓地から見つけたのは花崗岩の石碑だった。碑の隅にイタリア製と書かれていた。「方正地区日本人公墓」という碑文を有数の書家に依頼し、彫刻工場へ届け、くれぐれも気を入れて彫るように趙は頼んだ。しかし、彫刻工場がこの仕事を引き受ける時、「どうして日本人のためにこの碑を建てるのか、全く理解ができない」と趙に説明を求めた。趙は根気よく説明した。工場の人たちも理解し、品質を保証すること、期日までに彫り終えることを約束した。そうして日本人公墓が建立されたのである。

ハルビン市方正地区日本人公墓
隣には集団自決の「麻山地区日本人公墓」と「残留孤児」が建てた「中国養父母公墓」が並んでいる。

ここで見ておきたいのは、松田さんの願いを県政府が「開拓団といえども侵略の手先ではないか。何を言うか」と一蹴してもおかしくはなかった。そしてまた黒竜江省政府も県政府のお伺いに対して、すぐに「そのようなことは、まかりならん」と却下してもおかしくはない。当時ハルビンにあった外国人墓地はことごとく壊されていたのである。

江沢民時代だったらどうだっただろうか。そういうことを考えると、当時の県、省、中央政府の対応はまさに国際主義の精神に貫かれていた、と言ってもいいのではないだろうか。

初めて訪れた方正日本人公墓

私が初めて方正日本人公墓を訪れたのは一九九三年である。当時、「ハルビン市方正地区支援交流の会」の末席にいた私は、会を設立してから最初の方正訪問団に加わり、公墓参拝をした。この会は当時、残留婦人が相次いで帰国する時代のなか、日本に帰ることによって中国に残された夫などとの新たな離散状況を見て、「帰国することは即、幸せに繋がるわけではない。なお、残留する婦人たちになにか出来ないか」という考えの下、最も残留婦人と孤児が多い方正県に対して経済的な支援などを行おうと結成された会だった。

私が初めて公墓参拝をして思ったのは、侵略された国が、開拓団の家族とはいえ、加害者たちの墓を作るという事実である。もし両国が入れ替わっていたらどうだったろうか。日本政府は中国人たちの墓を建立しただろうか。

それから一二年後、会は「方正友好交流の会」に変わり、私が責任者になった。新たに会が出発する時、私は知られざる日本人公墓を多くの日本人たちに伝え、国際主義的な精神を知ってもらいたいと思った。そして二〇〇五年、設立総会を迎えた。多くの人々が予想以上に参加してくれた。マスコミ陣も出席してくれ、読売新聞も大きく報道してくれた。

それを見た今は亡き山口淑子が電話をくれた。満州で映画女優として活躍した李香蘭である。「満州で育った私も日本人公墓があることを知りませんでした。私に何かできることはないでしょうか」、と山口淑子は感動の思いを込めて公墓の存在に驚いた。

「国際主義」は黄昏時を迎えた

一九六三年、国交が回復する九年ほど前に建立された日本人公墓、そこには周恩来を主導者とする中国の革命世代の国際主義的精神が生きていた。周恩来は公墓建立について、熟慮に熟慮を重ねたはずである。なぜそう言い切れるか。

松田ちゑさんは文革中、スパイ容疑で獄中に入れられ、死刑の判決が出た。日本人を処刑するには中央政府の最高幹部の許可が必要だった。死刑する旨の書類が周恩来のところまできた。周恩来は松田ちゑさんの名前を見て、すぐにわかった。あの日本人公墓を嘆願した人だと。周

恩来は直ちに「彼女は無罪、すぐに釈放せよ」と命じた。その命令は省政府から県政府に伝えられた。驚いた県政府は、なにかの間違いではないかと省政府に問い合わせた。帰ってきた言葉は、「これは周恩来総理の命令である。直ちに釈放せよ」

この事実は、今から一二年ほど前、松田さんの長男、崔鳳義さんが中国に里帰りした時、当時の公安関係者から聞かされたのだった。周恩来は松田さんの願いを、熟慮に熟慮を重ねて出した結論だと、私がいう所以である。われわれが発行する会報『星火方正』を見て、映画作家・羽田澄子さんは公墓の存在を知り、驚いた。なぜ被害を受けた国が加害者の墓を建てたのか。彼女はその謎を探るべく方正を訪ね、記録映画『嗚呼　満蒙開拓団』が完成した。東京の岩波ホールで二〇〇九年の六月から二か月半に亘って上映されたその映画は、その後全国で上映された。

羽田さんは、この映画をなんとかして美智子皇后に見てもらいたかった。羽田さんの作品『歌舞伎役者　片岡仁左衛門』をかつて美智子さまに見ていただいたことがあった。たまたま私の親しくしている人が天皇皇后陛下とご縁があり、そのルートでＤＶＤを見てもらうことができた。

美智子さまは「重いテーマの作品を見ることができました」と、ＤＶＤを送ってくれた知人に語った。その後、天皇は「かつての開拓団の人々に私たちが何か出来ることはないだろうか」と宮内庁の役人に御下問された。役人は驚いた、突然の開拓団のことである。その役人は知人に尋ねた。知人はすぐに解った。羽田さんの作品をご覧になったからだと説明すると、その役人もすぐに納得した。二〇一〇年秋のことである。

『嗚呼、満蒙開拓団』

監督：羽田澄子/製作:自由工房/2008年/日本/カラー/120分

しかし翌年、３・11東日本大地震が起きた。両陛下の日々は、被災者への慰霊と慰問の旅に費やされた。しかし両陛下は開拓団のことを忘れることはなかった。二〇一三年に設立された満蒙開拓平和記念館を二〇一六年一一月一七日、訪問されたのである。安倍晋三が決して訪れることはないであろうその記念館に両陛下が訪問されたことを全国紙は小さく報道したが、地元長野の『信濃毎日』は一面及び社会面のほとんどをこの訪問記事で埋めた。

説明役に当たった寺沢秀文（当時・専務理事、現・館長、方正友好交流の会創立時からの理事）が日本人公墓の写真の前で説明すると、美智子皇后は「これがあの日本人公墓ですね」と頷かれたという。

国際主義を超えて

冒頭に記したように今や、国際主義は黄昏のようであり、いずれ死語になりかねない。領土問題を巡るここ数年の近隣諸国との争いは、国家を前提とする国際主義の破綻を告げているように思える。

民族や国を超えて繋がろうと世界共通語エスペラントを創造したルドヴィーコ・ラザロ・ザメンホフは、Homaranismo(ホマラニスモ)を提唱した。「民族や国家を超えて人々は人類の一員だ」という思想、人類人主義である。

ルドヴィコ・ラザーロ・ザメンホフ
人工言語エスペラントの創案者

近代日本の夜明けに生まれた世直し宗教のある開祖は、「この世の大地は天からの借りものである」と語った。環境問題一つとっても近隣諸国が話し合いを進めて解決するしかない時代に来ているのである。我々は今なお、無知蒙昧の世界から抜け出せないのだろうか。

（おおるい　よしひろ・方正友好交流の会理事長、一般社団法人日中科学技術文化センター理事・事務局長。著書『ある華僑の戦後日中関係史』、共著に『風　雪に耐えた「中国の日本人公墓ハルビン市方正県物語」』、日中文化交流市民サークル誌「わんりぃ」に日本エスペランティスト列伝を連載中）

エスペラントはナショナリズムが台頭する時、「危険な言語」として常に、弾圧の対象だった。スターリンのソ連時代、ヒトラー・ドイツの時代、多くのエスペランティストは獄中に入れられ、また殺された。

「ニューヨーク・タイムズ」に方正日本人公墓の記事掲載

満蒙開拓平和記念館　館長　寺沢　秀文

あるいはご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、今年５月１８日付けの「ニューヨーク・タイムズ（THE NEW YORK TIMES）」紙の４面において、旧満州での唯一の日本人公墓である「方正日本人公墓」のことなどについてのかなり大きな記事掲載がありました。私がこのことを知ったのは、満蒙開拓平和記念館にも来館されたことのある九州在住の建築関係のお仕事の方が中国出張の際に乗った飛行機の機内紙として手にした「ニューヨーク・タイムズ」の中にこの記事掲載があるのを見つけ、すぐに私に送ってきてくれたからでした。その記事を手にして大変驚きました。しかし私は全く英語はダメなので、厚かましいながら、アメリカ在住のポール邦昭丸山さん（言うまでもなくドラマ『どこにもない国』の原作者の方です）にお願いして邦訳して頂きました。大変有り難いことです。また当記念館職員の島崎友美さん（東京外語大大学院英文科卒）にも見て頂き、これをまとめると概ね以下の通りの内容でした。一部は当方の意訳、補足等も含みますのでご了承下さい。

（５月１８日付け「ニューヨーク・タイムズ」の記事邦訳文）　原本は別添

主題　「日本との絆は富と憎しみをもたらす」
副題　「(日本)帝国時代に遡る過去を持つ中国の町。今は愛国主義者の標的となる」
（中国の「ファンジョン（方正）・ジャーナル」より。記者：カロライン・カン）

中国東北部の離れたところに位置している方正（ファンジョン。Ｆａｎｇｚｈｅｎｇ。黒竜江省ハルピン市方正県）の町の狭い道の奥に、白樺や松などの静かな森の隣に「中日友好園林」があるが、その入口の鉄の扉は鍵で閉ざされている。しかし、その中には庭園は無い。あるのは第二次世界大戦の終わりに崩壊した日本帝国が支配していた旧満州へのソ連軍の攻撃などから逃れた末､伝染病や飢餓などで亡くなった日本人５,０００人の墓(方正日本人公墓）がある。

この友好園林は悲惨な歴史を記念するものとして建設され、戦後ここは「方正」と日本との間の異常と言えるほどの深い日中親善を代表するシンボルとなった。この町は一時期、日本との関係を「誇り」と受け止め、町の中にある店には日本語の看板などを設置し、町人口の５分の１の町民は日本で働いたり住んだりしていた。しかし、日本と中国の間での論争が激しくなるにつれ、「方正」の町民は裏切り者と呼ばれる様になった。

２０１１年には怒った排日民族主義者が園内に赤いペンキを浴びせた為、この庭園は閉鎖された。最近は、朝鮮半島の緊張感が緩んだことや、アメリカとの貿易摩擦に関して共

通の利害を持つ日中両国の関係等から、日中関係が再び改善されつつある気配が見えている中で、方正の町の人々は警戒しながらそれを見守っている。最近は、この庭園の管理は入り口の隣にある小さな家に住んでいる年配の夫婦に任せてあり、時々、町の許可無しで園内に入ろうとする者を止める役割を果たしている。

方正の町そのものは公墓と同様、世界最大の経済を誇る日本と中国との間の、複雑かつ苦難に満ちた過去の歴史に影響されている。「方正」と日本との関わりは１９３０年代から始まり、当時は日本が創設した傀儡国「満州」地域の一部だった。今は黒竜江省（ヘイロンジャン）に属する。当時、事実上の植民地支配を進めるため、日本は３８万人以上(筆者注。開拓団員の数については異説もあり議論が分かれる)の農業移民（開拓団）を送り込み、それは主には貧しい農民であった。

１９４５年に日本が降伏した時、これらのうち約１万人の開拓者は侵攻するソ連兵や中国人暴徒からの逃避行を経て方正に辿り着いた。逃避行の過程で、数千人の日本人は寒さ、病気、飢え、並びに集団自決などにより命を落とした。その他にも、数千人の日本人は現地に残された。その者たちの多くは絶望に至った（日本人の）親たちにより中国人家族に預けられたり、日本人残留孤児として捨てられた子供たちだった。

彼らのことは長い間忘れられていたが、１９６３年に毛沢東に継ぐ中国指導者NO.２の周恩来首相が、方正の町を囲んだ森や丘などに散らばっていた日本人の骨を、火葬並びに埋葬する為に、方正の町の人たちに集める様にと命令した。遺骨は後に友好園林となる場所に埋葬された。

日本が経済的に発展した１９８０年代になって、中国東北部に戦後に残された日本人残留孤児の引き揚げを開始した。日本に引き揚げた日本人残留孤児たちは、中国の親戚や知り合いなどが日本に来て仕事、留学、あるいは結婚したりすることを手伝った。方正県政府のホームページによると、現在、３８,０００人の町民（方正人口の5分の１）が海外に住んでいて、その圧倒的に多くは日本に住んでいる。

１９９５年、日本に引き揚げた一人の元残留孤児が、日本人を育ててくれた中国人の養父母たちに感謝を示すため、この公墓に石碑を建設した。現在、中国名を未だに使っている、あるいは引き揚げ後に日本名に変えた元残留孤児たちが、この友好園林への最も多い訪問者である。

現在、方正から１９０キロ離れたハルビンに住む元残留孤児であった74歳のガオ・フェンヂンさんは、『友好庭園は意義ある場所です』と言う。『ここへの訪問は日本人犠牲者達を祀るためではなく、私たちを育ててくれた中国人の養父母達のためにです』。

その(日本との)絆を示すように、町の所々には「相談中心（センター）」があり、日本に行くビザ申請を手伝ったり、日本での結婚相手探しなどの手伝いをしている。また、その近くには『海外中国村祖国』という名前の高級住宅街があり、そこには以前は貧困だった農村から日本に行って帰国した４８,０００人の中国人やその家族が住んでいる。

「誰かの娘さんが日本人と結婚することは栄光である」と、現地在住のタクシー運転手のチェン・ゾングボーさん（４５）が言う。「今でも日本の方が（中国より）豊かで、発

展している国だと思われている」。２００６年、日本からの投資を増やす事を目指して、方正県政府は「在日中国人の故郷」と言う宣言をした。そして、方正の全ての店の看板は日本語と中国語との両方を併記するように義務づけられた。

それから余り日々が立たない頃に問題が始まった。東京（日本）と北京（中国）との間の政治的な争いが再発生し、領土問題や、日本側の戦時残虐行為の隠ぺいとされることの論争等を巡って、抗議活動が再発生した。また、日本の政治家が東京の靖国神社を訪問する度に、あるいは１９３７年に日本軍が南京で民間人を虐殺したとする南京大虐殺を一部の人たちが否定する度に、ネット上での憎しみが浮上した。それらの怒りは最後には方正に対して向けられることとなった。

２０１１年、方正県政府は11万ドル相当を費やして、公墓に葬られていると思われる日本人開拓者の名前が刻まれた記念壁碑を新たに建設したが、これがインターネットで広まり、ネット上での激しい反発を呼び起こした。その後、５人の若い男達が公墓に入り込み、壁に赤いペンキを浴びせた。方正県政府は一夜のうちにこの壁碑を撤去し、その瓦礫は公墓の敷地に埋めた。

しかし、これで批判は終わらなかった。方正は「裏切り者の故郷」として知られるようになった。地下商店街の入り口には「犬や日本人は入場禁止」と書かれたポスターが現れ、それはかつて中国人に屈辱を与えた日本帝国のやったことを真似たものだった。以前は日本語が書かれていたほとんどの表示は町中から姿を消し、公墓の名前は道路標識からも削除された。

日本語も教えている現地の華鋭語学校の経営者である王東軍さんは、「日本と関係する商売が無くなれば、方正は何もない」と言っている。「方正の住民は裕福だ。ここには余り産業が無いのにそれは奇跡的だ。その裕福は日本のおかげであることは明らかだ」。「南京虐殺記念日のような、みんなが敏感になる日は、トラブルを避ける為に私の学校はクローズします」と彼は言う。

圧力に屈して、今年１月に方正県政府では公墓を「愛国教育基地」として指定し、「日本の侵略行為に対する中国の人々の忍耐並びに抵抗を示す内容を更に加える」という方針を加えた。

「私の様に両国を愛する者には極度の苦痛です」と、元残留孤児で、今は中国帰国者・日中友好の会の理事長を務める池田澄江さんは嘆く。「方正の様な場所は、世界に向けて同じ様な歴史の誤りを絶対繰り返すなと発信する場所で、再度の憎しみを生み出すような場所ではない」。

もう放っておいてくれればいいのにと望む人たちもいる。「我々一般の中国人は政治には興味が無い」と、東京近郊の映画会社で３年間も働いてきた２５歳のユン・シュアンさんは言う。「コネ（絆）があるなら、それを使えばいいんじゃない？」。

（以上はポール丸山さん並びに記念館の島崎さんの翻訳をベースとし、明らかに歴史的事実とは違う点などは訂正した上での寺沢による意訳、補足等も含みます）

記事を読んで

以上の通りですが、権威ある「ニューヨーク・タイムズ」紙に「方正日本人公墓」のことなどが掲載されたことは大変驚くべきことであると思います。因みに「ニューヨーク・タイムズ」は全米第三位の発行部数（１０３万部）を誇る高級日刊紙です。この記事を読んだアメリカの人々がこれをどのように受け止めたのかも気になります。たぶんはアメリカの人々のほとんどは「方正日本人公墓」のことなど知らないだろうと思います。

ただ、この記事を契機に、アメリカの人々からも「方正日本人公墓」や満蒙開拓等に対する関心が高まり、その結果として、日本国内自身でもこの公墓や満蒙開拓等に対する関心が少しでも高まるならば、それはそれで良いかとも思います。

一昨年の晩夏、私たちがこの日本人公墓を訪問した時、どうにか公墓のある「中日友好園林」の中には入れてもらえたものの、公墓も含めて園内での写真撮影は一切禁止でした。団員全員での集合写真も友好園林の入口の閉ざされたままの正面ゲートの外側で撮りました。また記事の中にもありますが、北京から来た反日活動家の青年たちにより新しい「記念壁碑」に赤ペンキがぶっかけられるという「赤ペンキ事件」」が起きたのは２０１１年（平成２３年）８月３日のことでした。その数日後にこの壁碑は撤去されてしまいました。

未認定残留孤児「郜鳳琴」さんについて

また、この「ニューヨーク・タイムス」を見て驚いたのは、ここに写っている日本人残留孤児であるとして写っている女性の方を見てです。その方の名前は「Ｇａｏ　Ｆｅｎｇｑｉｎ（ガオ・フォンジン）」さんとあり、写真解説には「昔、日本の戦争孤児として中国人の家庭に預けられた。その時彼女は５歳であった。ガオさんの母親の名は〝小林しょうこ〟と言う」とあります。

実はこの方、私も大変良く知っている方で、その肉親探しにも協力させて頂いている方です。昨年５月にもハルピンでお会いしています。この方、中国名は「郜鳳琴（こうほうきん）さん」とおっしゃって、「日本人残留孤児であることを認めて欲しい」と訴え続けている方です。記念館とも深い交流のある「ハルピン市中国養父母連絡会」（先日も胡暁慧会長が来日、来館）から、当方も肉親探しを依頼されている１３人の未認定の残留孤児のうちのお一人です。

この郜さん、記念館開館直後の平成２５年６月にも胡会長らと共に来日、記念館にも来られています。その時に郜さんの肉親探しを依頼され、私も早速調査を始めましたが、この記事の中にも有る通り、日本人の実母の方のお名前も判っています。そして、当方の調査の結果、この郜さんの実母は長野県内のある村から渡満した開拓団の一員であった方で、終戦後、この郜さんを中国人に預けて日本にと引き揚げてきており、日本で再婚もされていました。しかし、もう早くに亡くなられてしまっていることも判りました。

この郜さんが、日本人実母の名前やその出自まで判っていながらも日本人残留孤児として認定されないのは、その残留孤児であることの認定要件の中の「両親共に日本人であること」ということに関して、日本人であったとされる日本人実父のことが証明されないか

らだと言います。私ももう何年もこの郜さんの肉親探しに奔走し、実母の方が生まれ育った村まで訪ねたこともありますが、しかし前記の認定要件の壁を越えることがまだ出来ていません。

公墓が「愛国教育基地」に指定

なお、この記事の中にもありますが、方正県政府では今年１月、この公墓を「愛国教育基地」として指定したとあります。今年８月下旬に私も所属する飯田日中友好協会の訪中団がこの方正県を訪問し、この「方正公墓」にも墓参してきました。現地で確認したところ、やはり公墓は「愛国教育基地」として指定されたとのことでした。しかし、同訪中団の一行が見た限りでは公墓のある「中日友好園林」の入口ゲート付近には、その指定があれば通常は掲示される「愛国教育基地」の表示板等の掲示は見当たらなかったとのことでした。しかし、この訪中団も公墓への墓参は許されたものの、「中日友好園林」のゲートを入ってからは写真撮影は一切ダメ。私が２年前にここを訪問した時と全く同様で、献花も線香を上げることも許されなかったと言います。近時、ようやくの日中間の友好改善の声も聞かれますが、その波はまだ方正公墓までは辿り着いてはいないようです。

日中友好の一つのシンボルでもあると言えるこの「方正日本人公墓」への自由な墓参が許される日が一日も早く来ることを祈りたいものと思います。

WORLD

Japanese ties bring wealth and hatred

FANGZHENG JOURNAL
FANGZHENG, CHINA

Chinese city has bonds going back to imperial past; now it's a nationalist target

BY KAROLINE KAN

PHOTOGRAPHS BY GIULIA MARCHI FOR THE NEW YORK TIMES

The Sino-Japanese Friendship Garden in Fangzheng, China. Fangzheng's ties to Japan go back to the 1930s, when this region was part of a Japanese-created puppet state.

At the end of a narrow road in Fangzheng, a remote town in northeastern China, next to a hushed forest of birch and pine trees, stands the locked iron gate of the Sino-Japanese Friendship Garden.

But inside is no garden. Instead, there are the graves of some 5,000 Japanese who died in what was then known as Manchuria when the Japanese empire collapsed in defeat at the end of World War II and victorious Soviet forces swept in.

The Friendship Garden was built as a memorial to this tragic period of history and became a symbol of the unusually close ties that have bound Fangzheng to Japan since the war.

The town was once so proud of its connections to Japan that it erected Japanese-language shop signs and sent a fifth of its population to live and work in Japan. But when rivalries between Japan and China have flared, people in Fangzheng have found themselves branded as traitors.

In 2011, the garden was closed after angry anti-Japanese nationalists splashed it with red paint.

Now the town's people are watching with wary hope as ties seem to have warmed again in recent months between China and Japan, driven together by a defusing of tensions on the Korean Peninsula and the shared threat of a trade war with the United States.

These days the garden is guarded by an older couple who live in a small house next to the gate, and stop the rare visitor from entering without permission from the town government.

The town, like its cemetery, has found itself caught up in the complex and tortured history that still divides Asia's two economic giants.

Fangzheng's bonds to Japan go back to the 1930s, when this region of China, now known as Heilongjiang Province, was part of a Japanese-created puppet state in Manchuria. In its efforts to control this de facto colony, Japan sent over some 380,000 settlers, mostly impoverished farmers.

When the Japanese surrendered in 1945, about 10,000 of these colonists were trapped in Fangzheng by the advancing Soviets. Cut off from escape, thousands died from cold, sickness and starvation, as well as group suicide.

Thousands of other Japanese stayed, many of them children who were given to Chinese families by desperate parents, or abandoned as orphans.

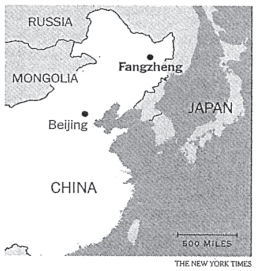
Their story was forgotten until 1963, when Zhou Enlai, China's No. 2 leader under Mao, ordered the town to excavate the Japanese bones from the hills and forests around the town for cremation and burial. The ashes were interred at what later became the Friendship Garden.

When Japan became prosperous in the 1980s, it began repatriating its war orphans from northeastern China. They, in turn, helped their Chinese relatives and friends move to Japan for work, study and marriage.

According to the Fangzheng government website, 38,000 people from the town — one-fifth of Fangzheng's population — now live overseas, overwhelmingly in Japan.

In 1995, a repatriated former orphan built a monument in the cemetery to the Chinese parents who adopted Japanese children. Many of the former orphans, some of whom kept their Chinese names while others took Japanese names on returning, are now among the most frequent visitors to the Friendship Garden.

Gao Fengqin, 74, left, a former Japanese war orphan given to a Chinese family when she was 5. Above, Ms. Gao's Japanese mother, Shoko Kobayashi.



THE NEW YORK TIMES

"The Friendship Garden is a meaningful place," said Gao Fengqin, 74, a former Japanese war orphan now living in Harbin, about 120 miles from Fangzheng. "The visits are not paid to the Japanese soldiers, but the Chinese parents who brought us up."

The bonds are apparent in the billboards around town that advertise "consultancy centers" to help with everything from applying for visas to finding work and marriage partners in Japan.

Nearby, a high-end gated community is called the Overseas Chinese Village Homeland, a reference to the 48,000 residents and their families who have returned to this once poor rice-farming town after living in Japan.

"It's glorious if someone's daughter married to Japan," said Chen Zhongbo, 45, a taxi driver in Fangzheng. "Japan is still considered richer, much more developed."

In 2006, the town went a step further, declaring itself a "Hometown for Chinese Living in Japan" to attract more investment from there. As part of the rebranding, all shops in Fangzheng were required to have both the Chinese and Japanese languages on signs.

The troubles began not long after that, as economic and political competition between Tokyo and Beijing reignited old disputes over contested islands and Japanese efforts to whitewash wartime atrocities.

Every time a Japanese politician visited the Yasukuni war shrine in Tokyo, or denied the 1937 Nanjing Massacre, when rampaging Japanese troops slaughtered civilians in that city, hatred welled up online.

This anger increasingly spilled over onto Fangzheng.

In 2011, Fangzheng provoked online outrage when it spent the equivalent of $110,000, to build a memorial wall in the cemetery inscribed with the names of Japanese settlers who were believed to be buried there.

Later that year, five young men climbed into the cemetery and splashed red paint on the wall.

The town government knocked it down during the night and buried the pieces in the graveyard.

That did not end the criticism. Fangzheng came to be mocked as the "hometown of traitors." At the entrance to an underground shopping center, a sign appeared saying "Japanese and dogs not allowed," a reference to past humiliations of Chinese people by imperialist powers.

Almost all the Japanese-language signs in the streets have since disappeared, and the town has removed the name of the cemetery from road signs.

"Without the business related to Japan, Fangzheng is nothing," said Wang Dongjun, the owner of Huarui Language School, which teaches Japanese. "Fangzheng people are well-off. This is a miracle, given that there aren't many industries here. It's obvious the wealth comes from Japan."

"When there are sensitive days, like the Nanjing Massacre Memorial Day, I sometimes close my training school to avoid trouble," he said.

Bowing to the pressure, the town released a plan in January to turn the cemetery into a "patriotism education base" by "adding more content to show Chinese people's spirit of persistence and resistance against Japan's aggression."

"It's torture for people like me who love both countries," said Sumie Ikeda, a former war orphan who is now director of the Association of Friendship of Repatriates from China. "Fangzheng could be a place for reminding people of the history to avoid same mistakes, not a resource for generating hatred."

Others just wish that the disputes would leave them alone.

"As common Chinese people, we don't care about politics," said Yang Shuang, a 25-year-old woman who worked for three years in a film factory near Tokyo. "When we have the connection, why don't we use it?"

For U.S., a model. For North Korea, a bad omen.

BY MEGAN SPECIA
AND DAVID E. SANGER

When North Korea suddenly threw a historic summit meeting with the toppling of Saddam Hussein and may well have concluded that he was next. In a lengthy, secret set of negotiations with Britain and the United States, he agreed to voluntarily hand over the equipment

share the same destiny as Libya or Iraq, which "collapsed due to yielding the whole of their countries to big powers."

"The world knows too well that our country is neither Libya nor Iraq, which

満蒙開拓平和記念館「セミナー棟」増築について

（ご支援のお願い）

満蒙開拓平和記念館　館長　寺沢　秀文

まずは当満蒙開拓平和記念館に対して「方正友好交流の会」ご関係の皆様方等始め多くの皆様方よりの多大なるご支援、ご理解を賜っておりますことに厚く御礼を申し上げます。

当記念館は多くの皆様方等のご支援を受けて平成２５年４月に開館、お陰様を持ちまして今年４月で開館満５年となりました。この間、全国各地から年間３万人前後の皆さんが来館され、開館以来の現在までの来館者数は１５５，２４９人となっています（１１月２６日現在）。これまでのご支援等、本当にありがとうございます。

当記念館では今後の館運営の方針として、「満蒙開拓の史実を通じて平和の尊さを発信していく拠点とする」という基本的スタンスに基づき、特に平和教育の拠点としての位置づけを更に高めるため、修学旅行などを含む平和教育、歴史教育の場としても今後来館者層の拡大を図ってまいりたいと考えています。そのような中、有り難いことに、県外からの修学旅行もまだ数こそ少ないものの見えられつつあります。別添記事の通り、今年１０月１１日に来館者１５万人目となったのは、大阪府より修学旅行として来られた寝屋川市立第５小学校の一行約１３０人の皆さんでした。しかしながら、このように修学旅行等も入りつつあるものの、現在の記念館（実質約１３２坪）の狭さではなかなかこれに対応出来ないのが実状です。修学旅行等の団体が来られても、館内の一番広いスペースでも約４０人程度収容のセミナーホールがあるのみにて、館内では一同揃っての来館歓迎挨拶や平和講話等も出来ないのが現状です。この現状のままでは修学旅行のみならず一定数以上の団体の受け入れ等には極めて不十分であり、ある程度の人数を収容出来る一定規模以上のセミナールーム等を中心とした施設の拡充が急務となっています。

ついては、民間運営施設としての厳しい運営は続くものの、記念館の施設的な充実を図るべく、この度、新たな「セミナー棟」の増設計画に着手いたしました。増設を予定する「セミナー棟」は、現在の記念館の西側の駐車場（阿智村村有地を借受け予定）の約半分程度を利用し、増築面積としては木造平家建約２６８㎡（約７７坪）を予定、１２０人程度収用可能な「セミナールーム」を中心として、ビデオ上映室、ギャラリーホール等設置予定です。既に基礎設計に着手しており、来年（平成３１年）４月よりの着工を予定、来年秋の完成、利用開始を目指しています。

増築に際しては概ね７，０００万円の建設資金等を必要とします。この資金調達等については、開館以降もお寄せ頂いた尊いご寄付や、民間運営としての厳しい運営の中で節約しつつ蓄えてきた自己資金の中より約３，０００万円を充てると共に、当然ながらこれだけでは到底不足するところから、心苦しいながらも関係各方面等へのご寄付のお願い、また公

的助成のお願い等もさせて頂いているところです。今夏に増築計画の正式表明以来、現段階で既に１，５００万円を超える増築のためのご寄付が全国各地より寄せられています。本当にありがとうございます。ただ建築実現に向けては資金的にはまだまだ不足です。今後、クラウド・ファンディング等も導入予定ですが、更に幅広くご寄付のお願い等をしていかなくてはならないものと思っております。いずれにいたしましても、記念館の当初建設時と同様、多くの皆様方のご支援、ご協力等頂かなければ実現不可能な増築計画でもございますので、皆様方よりのご支援、ご協力を賜りますよう、ここに改めてお願い申し上げる次第です。

当初の開館時にも多くのご寄付等をお寄せ頂いておきながら、またこうしてご寄付のお願い等を申し上げることは誠に申し訳ないこととは思いますが、どうか趣旨ご理解の上、ご賛同頂けば誠にもって幸甚と存じます。開館から５年目での増築はやや時期尚早ではないか、あるいはちょっとはしゃぎ過ぎではないか等のご意見も寄せられています。確かに狭くても現状維持のままで増築等せずにいった方が経営的には安全であるかも知れません。しかし、この記念館の目指すところの一つは、より多くの人々に、特に次代を担う若い皆さんにこの満蒙開拓という史実を通じて、戦争の悲惨さ、平和の尊さを知るための教訓としていって頂きたいということにあります。その趣旨からしても、やはり修学旅行や平和授業等を通じて若い皆さん等に是非足を運んで頂きたい。そのためにはやはり施設の拡充が必要となります。リスクが無いとは言いませんが、それも承知の上での５年先、１０年先、平和教育の拠点となること等を目指しての今回の増築の決断であることをどうかご理解賜りたいものと思います。

満蒙開拓の史実を風化させることなく、その学びの中で平和を発信していくための拠点とすべく、これからも記念館は精進してまいりたいものと願っています。ご理解、ご協力の程、どうか宜しくお願い申し上げます。

なお、増設趣旨にご賛同頂き建設資金のご寄付を頂けます方は、お手数ですが下記郵便口座への振込を頂ければ幸いです。

（郵便局）口座番号　００５４０－１－６１５６１　一般社団法人満蒙開拓平和記念館

また、ご寄付専用の振込用紙（振込手数料不要）が用意してございますので、用紙取り寄せの場合にはお手数ですが下記にお問い合わせ頂ければ幸いです。

一般社団法人 満蒙開拓平和記念館
長野県下伊那郡阿智村駒場７１１番１０
（電話）　０２６５－４３－５５８０
（記念館ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ）http://www.manmoukinenkan.com/

文化

満蒙開拓 苦難の歴史

◇夢見た農民の戦中戦後 長野県の資料館から伝える◇

寺沢秀文

1945年8月9日未明、ソ連軍は突如国境を越えて満州（中国東北部）に進軍、日本軍が「後退」して無防備な開拓団の村を次々と襲った。女性や子供、老人は逃げ惑い、集団自決に追い込まれた開拓団もあった。

悲惨な歴史として語られる満蒙開拓を伝える資料館として、長野県の阿智村に「満蒙開拓平和記念館」が開館して5年。2016年には天皇皇后両陛下がご来館し知名度が高まったとはいえ、民間運営の記念館は一瞬たりとも気が抜けない。

§ § §

元団員だった両親

飯田市で不動産鑑定業を営む私が、記念館建設に構想段階から関わったのは、両親が元開拓団員だったからだ。多くの犠牲を払って故国の土を踏んだ開拓団員も、戦後の生活は決して楽ではなかった。日本は安住の地ではなかったからである。再び故郷を離れ、都会や県外に出たり、山奥深く開墾に入ったりした人たちが少なくない。

満蒙開拓団員は全国で約27万人にのぼったといわれる。最も多くの団員を送り出したのは長野県で、3万3千人を数えた。中でも下伊那地域が最も多く8千人を超えた。開拓団は貧困にあえぐ農村の人減らしと、満州の権益を争うソ連や抗日勢力に対して「人の盾」を築く目的があったとされる。「満州は中国人農民から半強制的に買い上げた土地や家が多かった。終戦から3年後にシベリアから帰還した父は、母と下伊那郡で開墾に励み「自分たちの大切な畑や家を日本人に奪われた中国人たちの悲しみ、悔しさが改めてよく分かった」と生前、何度も口にしていた。

父のこの言葉は、私が記念館建設や帰国者支援にボランティアとして取り組む原点となった。鑑定士事務所を開業してしばらくは生活に追われたが、92年に日中交流事業の「信州青年の船」第19船の団長を務め訪中したのを機に日中友好協会に入会。残留邦人の帰国支援活動に取り組む。

戦後間もないころ、残留孤児の帰国を訴えた日本に対して中国は「その前にやるべきことがあるのでは」と指摘した。それは戦時中に日本に連行され、ダムや鉱山などでの強制労働で命を落とした中国人の遺骨の収集、慰霊、送還だった。飯田下伊那地域でも平岡ダム（天龍村）の建設現場で62人の中国人が殉難しており、遺骨収集と慰霊法要のために組織されたのが県日中友好協会下伊那支部（現飯田日中友好協会）であった。

支部長には元阿智村長で開拓団員だった小笠原正賢氏、事務局長には「残留孤児の父」として知られる長岳寺住職の山本慈昭氏が就いた。活動の多くを残留孤児の帰国支援にあてたが、帰国者がピークを超えた90年代半ばからは満蒙開拓の語り継ぎに力を入れる。03年には元開拓団員ら約60人の「満蒙開拓語り部の会」が発足。学校などへの派遣を続けてきた。

活動の中で、史実を語り継ぐ「場」の必要性を多くの関係者が感じていた。国策だったにもかかわらず、満蒙開拓に関する記念館建設は行政主体では難しいというので「まずは民間から」と飯田日中友好協会が中核となり06年7月、建設準備を始める。

§ § §

市民の目から伝える

その後、寄付金集めの停滞、候補地選定の難航など幾多の障害があった。だが村有地の無償貸与という阿智村からの申し出を契機に、県などからの建設資金助成などが得られ、足かけ8年で床面積約440平方㍍の記念館が完成した。最近は、全国から満蒙開拓の関連資料が寄せられる。

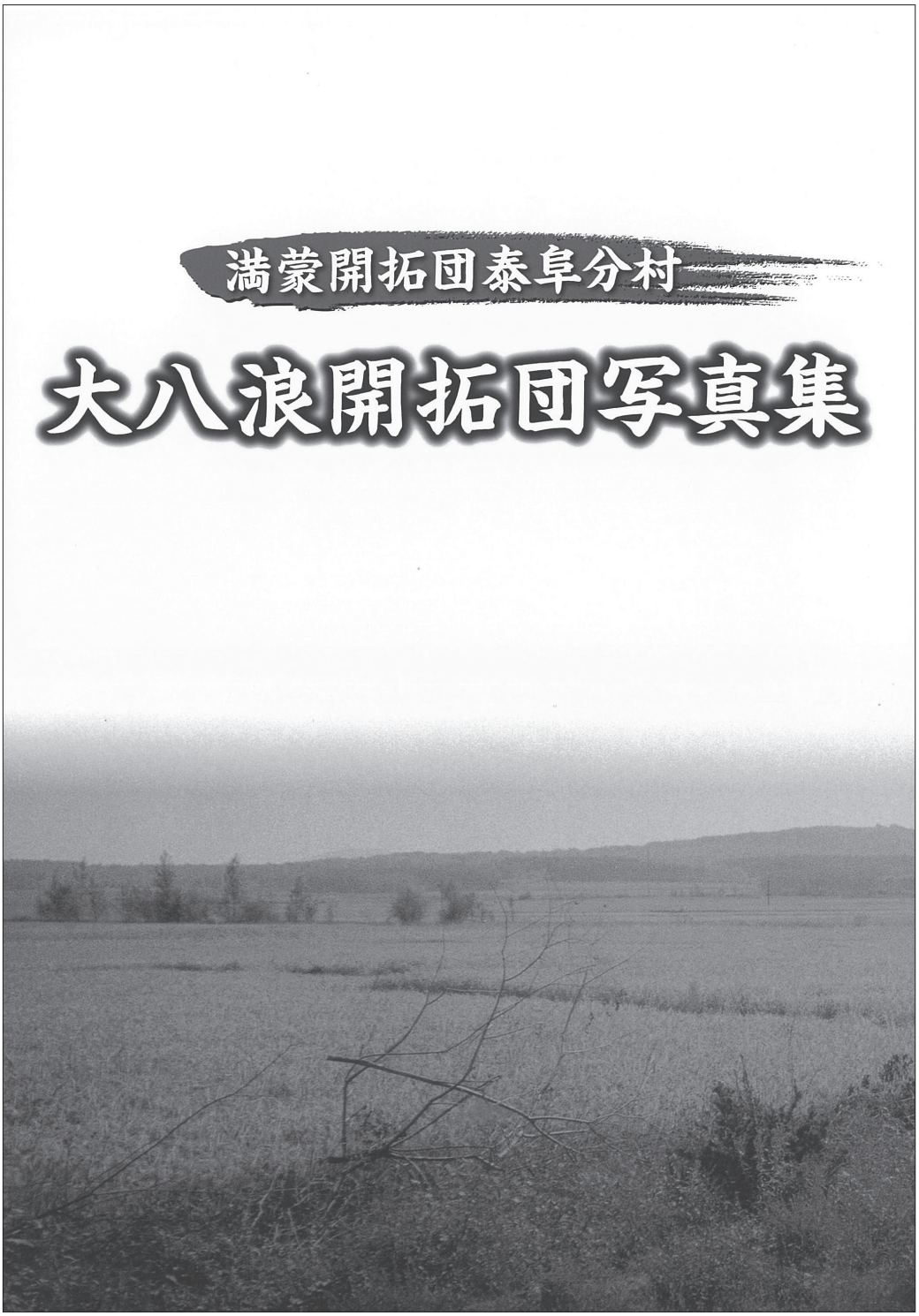
一般500円の入場料が頼りの運営は楽ではない。しかし、元開拓団員の語り部による定期講話、説明ガイドの養成をはじめ、県内外のボランティアら多くの人の支援を得て、交通不便な場所なのに年間約3万人が来てくれる。修学旅行の受け入れも進んでいる。

満蒙開拓団は戦争の被害者であると同時に加害者の側面も持つ。この点も記念館は両面を取り上げることを基本とし、中国の市民団体との交流も深めている。難しいテーマを、市民の目から分かりやすく伝える民間施設という特長を生かし、平和の尊さを世界へと訴える拠点を目指したい。（てらさわ・ひでふみ＝満蒙開拓平和記念館館長）

満蒙開拓団が入植した場所を示した地図と筆者

『大八浪開拓団写真集』発刊さる！

長野県泰阜村が分村として旧満州に「大八浪開拓団」を送り出したが、その記録写真が（B5 判）がこの 10 月発刊された。写真集の構成は、第１章が入植～戦後、第２章が訪中、第３章が引揚者大会、第４章が一時帰国、第５章が永住～帰国となっている。この写真集を入手したい方は 399-1895 長野県下伊那郡泰阜村 3236－1　泰阜村役場、電話（0260）26-2111 代表、FAX（0260）26－2553 にお申し込みください。定価 2000 円（送料別）



日中の未来へ 憎しみ絶つ

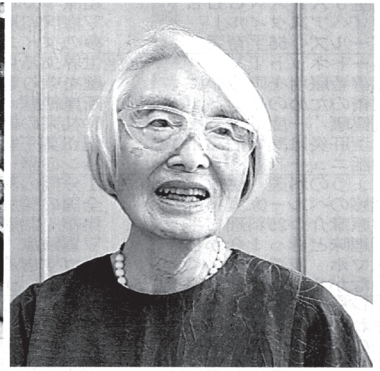
81年前の通州事件　肉親殺された姉妹「平和でなければ」

通州事件

日中戦争の発端となった盧溝橋事件の22日後の1937年7月29日に、日本の傀儡（かいらい）政権だった自治政府が治めていた北京近郊の通州（現・北京市通州区）で起きた反乱事件。中国人部隊だった自治政府の保安隊が、日本軍通州守備隊や日本人居留民を襲撃し、日本人と朝鮮人200人以上を殺害した。

当時は日本国内で大々的に報道され、中国人への憎しみをあおり、戦争を拡大させる役割を果たしたとされる。最近は「中国人による虐殺事件」として、右派論壇に言及されている。

左生前の父・鈴木郁太郎さん　左生前の母・茂子さん（左）と、一緒に働いていた可鳳岐さん＝いずれも櫛渕久子さん提供



櫛渕久子さん＝大津市

鈴木節子さん＝東京都足立区

81年前の7月29日、中国・北京近くの小都市・通州で、日本人と朝鮮人の居留民200人以上が中国人部隊の保安隊に殺害された。「通州事件」＝🔑＝は当時、日本国内の反中感情をあおり、軍部への支持を決定づけたと言われる。いまも「中国人による残虐行為」として右派に言及されるが、肉親を亡くした姉妹は「憎しみをあおり立てるのは意味がない」と語る。

櫛渕久子さん(90)＝大津市＝と鈴木節子さん(84)＝東京都足立区。開業医をしていた父・鈴木郁太郎さん（当時35）と看護師をしていた母茂子さん（同31）、妹の紀子さん（同1）が事件で殺された。

節子さんは当時3歳。後から聞いた話では、住み込みで仕事をしていた中国人看護師の可鳳岐（コーリンオン）さんが保安隊に手をかけられた節子さんを「私の子です」と言って奪い返し、命がけで守ってくれたという。

可さんと手をつなぎ、何日も身を隠して歩いた記憶は残っている。日本語で話そうとすると「ダメ」と口を押さえられた。当時の可さんは20歳ぐらい。母のような存在だった。

その後、祖父が中国に迎えに来て、日本に戻った。「可さんは後から来るから」と祖父に説得された。両親は死んでしまったと理解したのは数年後だった。

一方、姉の久子さんは、小学校入学のために、事件の2年前に、群馬県の母の実家に引き揚げていた。

3年生だった8月初め、夏休み中の登校日で学校に行くと、先生や友人たちが一斉に自分を見た。「何かおかしい」。家に帰って新聞を広げると、通州事件を報じる記事に父母や妹の写真が掲載されていた。

家を飛び出し、近くの滝つぼに飛び込んだ。「絶望だけでした」

可さんが命がけで節子さんを助けたことは後から知った。久子さんも、中国で可さんにかわいがってもらった。1年ほどして可さんから手紙が届いた。「みんなから日本のスパイと言われ、つらい思いをしている。でも、私たちはまた会えます」と。子どもながら可さんの身を案じた。

戦後の姉妹は教師と看護師の道に進んだが、両親の不在は心に重くのしかかった。久子さんは「子どもに恵まれても寂しさが消えなかった」。節子さんも進学や結婚のときに「親がいたらなあ」と何度も思った。

一方で、節子さんは「憎しみはない」と言い切る。「中国けしからんとはならない。彼らの中にも悲しい思いをした人がいるはず。人を憎んでもいいことは何もない」。久子さんも「日本が（中国人を）ひどい目に遭わせたことが、ブーメランのように私たちに戻ってきたのだと思う」。

久子さんは一昨年、次男（当時62）に先立たれた。戦争で息子を亡くす母親の苦しみに思い至った。「戦争は絶対にダメ」。伝えなくてはという思いに駆られ、つらい過去を思い出し、16枚の紙芝居を手作りした。通州事件で父母が殺されたこと、可さんという中国人がいたこと、そして日本が中国に侵略した歴史も描き、集会などで話している。

姉妹は日中の国交が正常化した後、可さんの行方を捜したが、見つからなかった。「子や孫を守るには、平和でなければどうにもならない。私たちのような人生、父母のような人生はだれにも歩ませたくない。最近の日本は憎しみをかき立て、叫び立てる人の声が大きいが、憎しみの連鎖はナンセンスです」と久子さんは言った。

（編集委員・大久保真紀）

東京新聞（2018年8月11日付）より転載

満州敗走 母子救えず

元関東軍歩兵 稲川寅男さん（94）

20代記者が受け継ぐ戦争 戦後73年

大島記者（左）に自身の戦争体験を話す稲川寅男さん＝東京都江戸川区で

「円匙でタコツボを掘ってね。ここが自分の死に場所になると思ったよ」

東京都江戸川区の稲川寅男さん（九四）の自宅を訪れた私は、聞き慣れない言葉に少し戸惑った。入社四年目で初めてとなる戦争体験の取材。スコップ（円匙）で縦穴（タコツボ）を掘り、ソ連軍との戦闘を迎えた七十三年前の夏の体験に、じっと耳を傾けた。

一九四五（昭和二十）年八月九日、ソ連軍が満州（現・中国東北部）に侵攻。関東軍の歩兵第三七〇連隊に所属していた稲川さんは、牡丹江近郊で日本人開拓民の保護を命じられた。

十三日昼、縦穴に身を潜める中、ソ連軍の戦車がごう音と共に街道を進んできた。武器・弾薬は欠乏し、最新鋭の戦車に対抗できる状況にない。仲間たちが縦穴から飛び出し、爆弾を抱えて戦車に飛び込む肉弾攻撃を仕掛けたが、厚い鉄板に覆われた戦車が一瞬、宙に浮いただけだった。

十四日は、遮るものがない草原での銃撃戦。「ヒュン、ヒュン」。銃弾が顔の近くをかすめ、兵士たちが次々と倒れた。「稲川、本部に上がれ！」。丘の上にある本部との連絡係だった稲川さんは、上官の命令で伍長と交代して前線を離れた。翌十五日まで戦闘が続いた後、部隊は撤退。日本がポツダム宣言を受諾し、無条件降伏したことも知らなかった。伍長はその後、戦死したという。

◆

死と隣り合わせの経験は、平成生まれの私には想像ができない世界だった。

学校を出て会社員をしていた稲川さんは二十歳を迎えた四三年に徴兵され、ソ連との国境警備の部隊に配属された。「お国のために戦う自負があった」。だが、実際の戦闘では撤退を余儀なくされ、山の中を逃げ回った。

「前線で死んでいれば、こんなつらい思いをしなくて良かったのに、と悔やんでね」。やや早口で話す稲川さんがある場面を思い出した時、重い口調に変わった。

「助けて」。夜に山中を移動していると、ぼろぼろの和服を着た開拓民の女性と遭遇した。衰弱しきった様子で赤ん坊を抱き、かぼそい声で懇願された。「子どもだけでも連れていって」。だが、ソ連軍の追撃におびえ、食料も枯渇した稲川さんは数十人の兵士とともに立ち去った。

開拓民保護の命令、国のために戦う自負…。実際は自分の命を守ることしかできなかった。しばしの沈黙の後、稲川さんは続けた。

「罪のない市民や下っ端の兵士が犠牲になる戦争は、やっぱりおかしい」

九月末にソ連軍に捕まり十一月にシベリアの捕虜収容所に連行された。二年近く労働を強要され、四七年九月、引き揚げ船で京都府の舞鶴港に戻った。帰還後、三つ上の兄の戦死を知らされ、無念さが込み上げた。

◆

取材の後、稲川さんに駅まで見送ってもらった。日差しが照り付ける中、「毎年夏になると、からっとした暑さだった満州を思い出すよ」とつぶやいた。

隣を歩きながら考えた。七十三年前の戦地で私は生き残れただろうか。女性と赤ちゃんを助けただろうか。個人の力量や思いなどを超えた戦場の残酷さ。想像すら難しいが、忘れてはいけない過去がある。「生きて帰れたことは運が良かった。平和に幸せに暮らせることがありがたい」。そう話す稲川さんの思いを、伝えていくことはできる。

平成最後の夏。時代が移り変われば、昭和はさらに遠ざかっていく。それでも、上書きしてはいけない歴史がある。今年も若手記者たちが戦争の体験者に出会い、悩み、考えた。

上 大島宏一郎（26歳）整理部

ソ連の対日参戦

1945年8月8日にソ連が日ソ中立条約を破棄して宣戦布告し、9日に満州（現・中国東北部）に侵攻。関東軍の大半が敗走した。当時の満州には約155万人の日本人が暮らしていたが、戦闘や病死、餓死などで約24万人が犠牲になったとされる。

「罪ない市民犠牲 おかしい」

ご意見・ご感想 お寄せください

メールはshakai@tokyo-np.co.jp。手紙は〒100 8505（住所不要）東京新聞社会部。ファクスは03(3595)6919。

平成の天皇
戦争と平和
4

硫黄島慰霊 悲劇に光

満蒙開拓民にも思い

「水がなくて大変苦労されたようですね」。天皇、皇后両陛下は1994年2月、硫黄島の戦記「何も語らなかった青春」の著者、多田実さん（2006年死去）を御所に招き、島での体験談に耳を傾けられた。

硫黄島は45年2月、米軍の上陸が始まり、約2万人が玉砕した。負傷して本土に戻っていて命を救われた多田さんは、元学徒兵や遺族ら約450人の協力を得て、壮絶な戦いの真実を伝える本を93年に出版した。

戦後50年に合わせた「慰霊の旅」の出発点が、硫黄島と決まると、両陛下は多田さんの著書を取り寄せられた。〈拙著をよくお読みになっておられ、水、硫黄の熱気等の御下問も多く、光栄この上なく〉。後日、側近の元に多田さんから感謝の手紙が届いた。

両陛下は多田さんと面会した5日後、島を訪れ、天水を慰霊碑にかけて拝礼された。「精魂こめて戦った人々のことを思い、遺族のことを考え、深い悲しみを覚えます」という感想も発表された。

「よくぞ島で慰霊してくださった」。遺族らで作る硫黄島協会の会長寺本鐵朗さん(73)は、孤島で奮闘した兵士に光を当てたこの慰霊に深く感謝している。

両陛下は、軍人以外でも戦場に駆り出され、命を失った人々の悲しみにも寄り添われた。

「外国航路の船員になることも夢見た人々が敵の攻撃によって命を失った」

陛下は戦後70年を迎えた2015年の記者会見で、徴用された民間船員が制空権も軍艦もないなか、人員や物資の輸送を担った理不尽さに言及された。その声は震えていた。

日本殉職船員顕彰会で常務理事を務めた秦一生さん(84)にとって、00年の第30回戦没・殉職船員追悼式は特別な意味があった。

1か月前、招かれた御所で、陛下に「参列者は遺族のほかにどういう方が」と問われ、元徴用船員も出席すると伝えた。陛下は当日のお言葉で、遺族と「同僚の人々」の深い悲しみに触れられた。「紙一重で生き残ったことで苦悩した仲間も救われた」と明かす。

開拓民も戦争に人生を翻弄された人々だ。国策で満州（現中国東北部）や内モンゴルに送られた「満蒙開拓団」は、約27万人に達したが、終戦時の混乱に巻き込まれるなどして、約8万人が命を落とした。

「方正友好交流の会」理事長大類善啓さん(73)は、中国・ハルビン郊外の方正県で、開拓民の墓を守っている現地の人々と交流を重ねてきた。両陛下が元開拓民の苦労に寄り添われる姿を見て8年前、「旧開拓地に残る墓のことも知っていただければ」と、方正での墓参りを記録した映画「嗚呼 満蒙開拓団」のDVDを皇居・御所に送った。

2か月が過ぎた頃、人を介し、「大変重いテーマでした」という両陛下の感想が届いた。大類さんは2時間に及ぶ映画を見ていただけたことに驚き、「大陸に眠る開拓民たちも喜ぶはずだ」と胸を熱くしたという。

硫黄島の激戦地に建てられた慰霊碑を巡り、拝礼後、碑に水をかけられる両陛下（1994年2月12日）

毎日新聞（2018年9月28日付）より転載

記者の目

佐藤 良一
米沢通信部

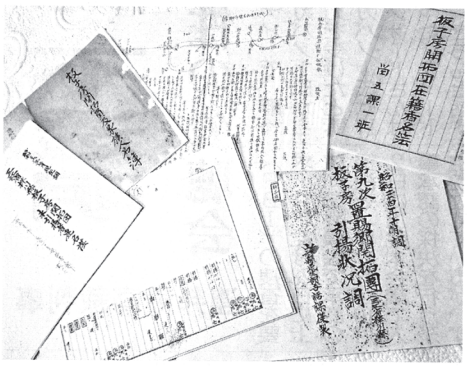
［満蒙開拓団の実態調査公文書］

保存と公開 国の責任

日本が1932～45年、旧満州（現中国東北部）に農業移民として送り込んだ推計約27万人の「満蒙開拓団」について、戦後に都道府県が実施した全国実態調査の資料が、14道府県で廃棄されるか所在不明となっている実情が、毎日新聞の全国アンケートで明らかになった。資料は団長らの証言や記録を基にしたもので、逃避行中に集団自決などを迫られた開拓団の悲劇を知る上で、唯一とも言っていい貴重な1次資料だ。国策の過ちを二度と繰り返さないために後世へ残し、活用していくべきだ。

法の対象外でも条例で伏せ字に

私は、山形県在住の中国残留孤児への取材を通じて満蒙開拓団に関心を持った。その過程で、戦後まもない50年に外務省が都道府県に調査を指示した「開拓団実態調査表」の存在を知り、保存の有無を山形県に確認したところ、県庁の地下書庫に約90もの開拓団の実態調査資料の原本（18冊分）があった。開示請求をし、今年1月に届いた原本のコピーを見て驚いた。団員の氏名、本籍だけでなく、開拓団名、入植した地名、終戦時に生存者が収容された病院名、帰還した船名までもが伏せ字になっていた。担当者は「個人情報保護条例に基づき、他の資料と照合して個人が特定されると考えられる情報はすべてマスキングした」と説明するが、それでは歴史の検証が困難になる。



山形県が開示した満蒙開拓団の実態調査資料の写し＝佐藤良一撮影

情報開示の現場では、国民の「知る権利」に応える情報公開法と、個人のプライバシーを保護する個人情報保護法との整合性が問われる。歴史公文書の管理に詳しい国文学研究資料館の加藤聖文・准教授は「法律では生存する個人の情報が保護の対象になっているのに、地方自治体の条例では死亡した個人の情報も対象にしている場合が多い」と指摘する。山形県も、生死にかかわらず個人を識別する情報を非開示にしていた。

山形県米沢市の後藤理紀磨（りきま）さん(75)は、開拓団の一つ、「瑞穂開拓団」の一員として旧満州に入植し、敗戦時の混乱で亡くなったと伝え聞く叔母とめいの消息を調べている。「遺骨どころか、いつどこで亡くなったのかも確定できていない。何か少しでも事実が分かれば供養になる」との思いで県庁に問い合わせたが、「個人情報保護条例に照らして、遺族であっても実態調査資料の個人情報は開示できない」との回答を受けた。

山形県以外では開拓団の実態調査資料をどう扱っているのか。他の46都道府県に保存状況をアンケート調査したところ、大きな開きがあった。神奈川県は95年に資料を県立公文書館に移して永久保存とし、昨年10月から原本を全面公開している。担当者は「文書作成から相当の期間が経過しているので一般公開した」と公開の意義を説明する。

19府県は、個人名などを伏せた「一部開示」だった。伏せる理由はプライバシー保護というが、約70年前の資料を職員が膨大な時間をかけてマスキングすることに、どれほどの意味があるのかは検証されないまま、機械的な作業が全国で繰り返されていると感じる。長崎県は廃棄していた。

2000年に個人情報保護の観点から行政文書の永久保存をやめ、保存期間の上限を30年とした基準を踏まえ、毎年厳格に公文書の保存期間をチェックしてきた結果の「廃棄」だった。

一方、50年の調査指示で都道府県が外務省に提出した実態調査表と付属資料は、外務省の外交史料館（東京都港区）で閲覧できる。実態調査表などは都道府県がまとめた資料の〝要約版〟に過ぎないが、同館のマイクロフィルムからは個人名や開拓団名なども確認できる。国では閲覧でき、地方では閲覧できない〝ねじれ〟が起きている。

送出者と犠牲者確定さえできず

06年、吉川春子・参院議員（当時）は満蒙開拓団に関する質問主意書を提出。全国の開拓団数と在籍者数、帰還者数、現地での死亡者数、行方不明者数についてただしたが、政府は答弁書で「資料が保存されておらず、お答えすることは困難である」と回答している。国策で送り出したにもかかわらず、政府は人数さえ確定していない。

開拓団の研究もしている加藤准教授は実態調査表について、「都道府県は担当課任せにするのではなく、公文書館などに移管して永久保存する必要がある。『公文書管理条例』を制定し、保存と公開の運用を定めることが望ましい」と強調。国に対しては「開拓団に関する国の記録を集計し、全国に残っている調査資料とすりあわせて、判明した範囲で送出者と犠牲者の人数を確定すべきだ」と提言する。

旧軍人は都道府県に兵籍簿があり、遺族が申請すれば軍歴証明書が発行される。だが、民間人である開拓団の人々の記録は戦後73年たっても未整備のままだ。全国の至る所に、無念の思いで立ちすくむ遺族がいるのではないか。国策で大陸に送り込まれ、終戦前に関東軍が南方に「退却」したため、無防備のまま置き去りにされた開拓団。悲劇に遭遇した一人一人の運命を記録した資料を保存し、内容を国民に公開していくことが、満州開拓を推進した国としての最低限の責任だと思う。

2018・9・28

東京新聞（2018年11月8日付）より転載

旧満州育ちの原罪意識

山田　洋次

一九三〇年代の終わり、現在の中国東北部、旧満州育ちの八歳のぼくが初めて見た日本の印象は今も鮮明である。

大連から三日間の船旅を終えて関門海峡で夜が明けると、一望千里の広漠たる平野の満州の風景とは全く違って、海岸からすぐに山が始まる。

その山々が鬱蒼たる緑に覆われていて、山腹のレールの上を汽車が煙を吐きながら家々の軒をかすめるようにして器用に走っているのにあきれ、そして港や町の通りに人がいっぱいいる光景に驚いた。

「あの人たちみんな日本人？」

当たり前でしょう、ここは日本なのよと母親が答えたが、波止場をよく見ると大きな麻袋を背負ったり、半裸の姿で重い大八車を引いたりする人たちがいる。

「じゃあ、あの働いている人たちも日本人なの？」

決まっているじゃないの、という母親の返事が不思議でならなかった。この体験は満州育ちの子どもたちなら誰でも身に覚えがあるはずだ。

垢で汚れた服装で重い労働をするのは中国人で、彼らを使役し、彼らの引く人力車に、傲然と背をそらせて乗っているのが日本人、というのが当時のぼくたちの常識だった。

なんという惨めなことだろうか。中国人に対する理由のない民族的な差別、そして労働を卑しいとする誤った価値観。満州という植民地に暮らしていた日本の少年少女の多くは、この二重の差別意識を当然のように抱いていた、あるいはそのように教育されていたということなのだ。

〈寒い北風　吹いたとておぢけるやうな子どもぢゃないよ　まんしうそだちの　わたしたち…〉

という歌を小、中学校の同窓会で合唱することがあるが、満州の思い出に満腔の懐かしさを込めながらもどこかに罪の感覚、差別意識に伴う出来事の数々（馬車で運賃の支払い時に不満を言われたのが気に入らなくて、日本人の乗客が素手で駅者を殴りつける、というような場面をぼくは見たことがあるし、それは別に珍しいことではなかった）を覚えているから、満州育ちのわれわれは大声であの頃の懐かしさを語り合うことをしない。ぼくたち引き揚げ者の原罪意識とでもいうものだろうか。

今、日本の観光地はどこの国か、と思うほど中国人でにぎわっている。その中の何人かでいい、あなた方の両親や祖父母が今から七十年、八十年前の少年少女時代に日本という国とどう関わったか、どんな印象を持っているかというようなことを、じっくりと話してみたいと切実にぼくは思う。

日本と中国の友好はそんなところから始まるのではないだろうか。

（やまだ・ようじ＝映画監督）

絵・王培

東京新聞（2018年8月26日付）より転載

My Family 家族のことそう話

おふくろの尊い決断

漫画家 森田拳次さん

生まれてすぐに旧満州（中国東北部）の奉天（現・瀋陽）に渡り、両親と四つ下の弟の四人家族でした。おやじは関東軍に納めるかばんなどを作る仕事をしていましたが、終戦近くになると召集され、残ったおふくろが家を守ることになりました。

おふくろは「日本の母」という感じの人で、優しかった。おやじが召集されてからは、棒なんかを持ち出してきて、家族を守るぞ、とめいっぱい気合を入れていました。

そんなおふくろに一度、ぶん殴られたことがあります。敗戦後、旧ソ連軍が旧満州に侵攻してきたときです。女性に乱暴する兵士から身を守るため、日本人の女性は男に見えるように丸刈りにしたり、顔に炭を塗ったりしていた。そんなとき、隣のおばさんに「男みたいだ」と言ったら、おふくろからいきなり殴られた。「何てことを言うんだ」って。女の人にとって、髪は大事だから。殴られるぐらい怒られたのは、あのときだけです。

ある日、中国人がわが家にやってきて「弟を売れ」と言ってきた。日本人の子どもは働き者で評判が良くて、一緒に遊んでいた友だちも売られていました。当時は、日本に戻ると米兵が子どもを食ってるとか、いろんなうわさがあったから、一緒に日本に帰るのと、中国に残していくのと、どっちがわが子にとって幸せなのか、親も分からなかった。おふくろは「うちは売らない」と断りました。どうなるか分からないけど、親子はずっと一緒だと。

ちなみに、僕には値が付かなかった。利発そうに見えなかったからかな。ショックでしたねえ。

シベリア行きの列車から逃げてきたおやじと合流して、日本へ帰ることができましたが、おふくろは引き揚げの苦労が出たのか、すぐに脊椎カリエスを患い、長い入院生活が始まりました。おやじと弟もけがや病気で入院した時期もあって、小学生だった僕は病院で寝泊まりしながら、家族三人に食事を配膳する介護生活を続けました。そんなとき、紙に絵を描くことしか楽しみがなかった。漫画少年の原点ですよ。

僕はギャグ漫画を描いていくうちに一枚漫画をやるようになり、コンテストで毎年入選していました。おふくろの枕元に寄って結果を見せてやると、喜んでいましたね。自分も習字が大好きでよく作品を書いていたから、息子にも芸術の才能が遺伝した、と思ったんじゃないでしょうか。

結局、おふくろはずっと入院ばかりして、六十代前半で亡くなりました。戦争のせいで、あんまり楽しくない人生。もう少し長生きしてくれたら、もっといろんなところに連れて行ってあげられたのになあ、と思います。

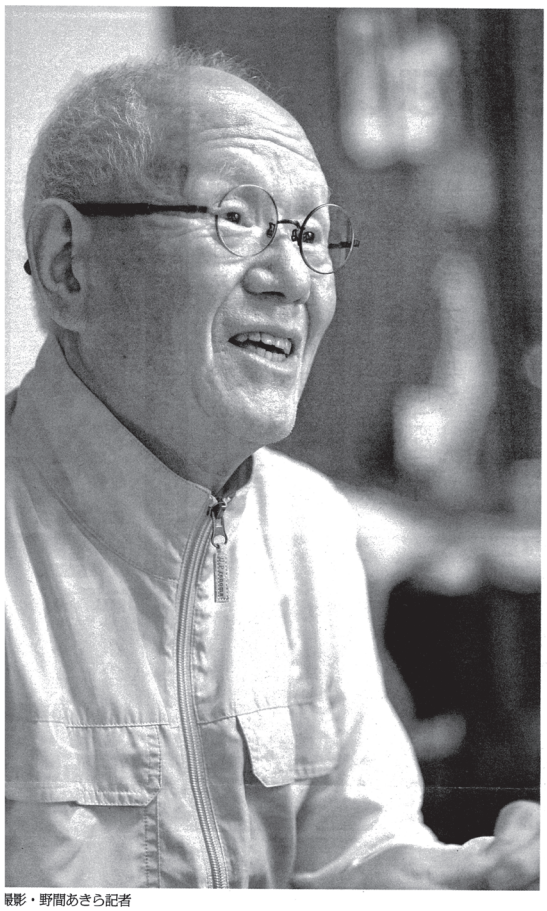
聞き手・写真 河郷丈史

もりた・けんじ　1939（昭和14）年、東京生まれ。生後３カ月で満州に渡る。小学４年で漫画を描き始め、高校２年で漫画家デビューした。代表作は「丸出だめ夫」「ロボタン」など。漫画家たちが戦争体験を伝える八月十五日の会を2002年に設立した。

この人に聞きたい

私も漫画で戦争の語り部に

漫画家 ちばてつやさん



最影・野間あきら記者

本名・千葉徹弥。1956年、単行本作品でプロデビュー。主な作品に、「おれは鉄兵」「あした天気になあれ」「のたり松太郎」など。日本漫画家協会会長、文星芸術大学教授。手塚治虫文化賞特別賞ほか受賞多数。近著に、漫画『ひねもすのたり日記』第1集（小学館、1111円税別）

「あしたのジョー」など数多くのヒット作を持つ漫画家ちばてつやさん（79）。その原点には、命がけで一家を救ってくれた、ある中国人の友情がありました。62年の漫画家人生を聞きました。

大塚武治記者

第1回 満州引き揚げ、一家救った中国人

やっと捜しあてた恩人の娘さん

思い出の毛布抱き涙

〈1939年、東京・築地生まれのちばさん。2歳の時、一家は「満州」の奉天（現在の中国・瀋陽）へ。両親は印刷会社で働き、戦争中とは思えない、のどかな日々を過ごしていました〉

気の強い母にはよくしかられました。父は穏やかな人でした。中国人と仲が良く、とくに通訳の徐集川（じょ・しゅうせん）さんは漢詩仲間の悪友でした。徐さんは、私を「デスヤちゃん」とかわいがってくれました。

父は、私を動物園に連れて行くと言っては、徐さんと競馬に出かけました。私が「馬しかいないね」と言うと、父は「帰ったら、『ゾウさんもいた』と言うんだよ」と言ったものです。（笑い）

〈6歳の時、終戦を迎えました。両親と4歳、2歳、生後9カ月の弟との生活は恐怖のどん底に〉

45年8月15日の夕方、社宅を囲む約3㍍の塀を乗り越えて、中国人がクワや鎌を手に次々入ってきました。私がボーッと見ていると、「何してるの！」と母に腕をつかまれ、家に放り込まれました。

母が戸を閉め、家具で押さえた途端です。近所からガラスの割れる音が聞こえ、「やめて！」と悲鳴が上がりました。暴動でした。

奇跡の出会い

〈社宅の日本人で逃げようと決め、深夜、リュックを背負い脱出。途中でつやさんが足をけがし、一家は一団からはぐれました〉

暗い道の向こうから、天びん棒を担いだ男が来て、見つかってしまいました。母は「赤ん坊がいるの。見逃して」と懇願しました。

「チバさんじゃないの？」。その声は徐さん！　父は彼の手を握りました。広い奉天市内で徐さんに出会うなんて、奇跡でした。

徐さんは、私たちを自宅の物置の屋根裏部屋にかくまってくれました。彼も命がけだったはずです。それでも、父に中国人の格好をさせて一緒に野菜を売り歩き、あちこちに隠れている日本人に食料を届けてくれました。

徐さんの娘との対面。決め手はバラ模様の毛布だった（『ちばてつや自伝　屋根うらの絵本かき』新日本出版社から。©ちばてつや）

〈外に出られない屋根裏の暮らし。ぐずる弟のため、絵本を描きました〉

私は脱出前、工場で余った紙をリュックにたくさん入れていました。紙がまっ黒になるまで馬やゾウを描き、童話を作りました。「続きはまだ？」とせがむ弟たち。弟たちに「お兄ちゃんの絵が夢に出てきた」と言われ、うれしかった。あの喜びが今の仕事に結びついたと思います。

〈数週間後、日本人の集団に合流。その後、300㌔先の葫蘆（ころ）島から引き揚げ船が出ていると聞き、出発します〉

牛車や貨車に乗りました が、線路脇も歩きました。食糧は、アワやコーリャンを大鍋で煮ておかゆにして分け合う。免疫力が落ち、おできやケガが治らない。私も耳元がうみ、ちぎれそうになりました。道でうずくまる老人や子ども。力尽きた人も大勢見ました。冬は零下20度で地面が凍り、埋葬はできません。服を奪われた裸の遺体が道端に積まれていました。

当時は、日本人の子は賢いと思われ、中国人に大勢もらわれていきました。うちもよく「食料と換えよう」と言われました。でも母は「全部私の子だ。絶対に祖国へ連れて帰る」とがんばりました。強くて優しい母の姿は今も忘れません。

約1カ月かけて葫蘆島港に着きました。引き揚げ船に乗り、安心して息絶える人が次々出ました。社宅の友達のキョウちゃんも船で亡くなり、水葬されました。流れ去る遺体に、お母さんが「キョウジー！」と叫びました。

戦後訪中して

〈中国との国交が回復した72年、一家で訪中。でも徐さんは見つかりませんでした。消息がわかったのは99年。てつやさんがNHK番組で再訪した時です。父の死から3年後のことです〉

現地のテレビ局が「日本の漫画家が恩人を捜している」と取り上げてくれて、5～6組が訪ねて来てくれました。話すと、全員違う。旅の最終日、私と同い年くらいの女性が名乗り出てくれました。それが徐さんの娘さんでした。

決め手は、彼女が持っていた日本製の毛布でした。穴が開き、あちこちほつれ、柄はバラ模様。あっ！と思いました。引き揚げの時、同じ毛布をずっと使っていたからです。

娘さんは言いました。「父は『これはお前が生まれた時、チバさんがお祝いにくれた毛布だ。大事にしなきゃいけないよ』と。風邪をひくと、よくこれにくるんでもらいました」。私は毛布を抱きしめ、泣きました。

残念なことに、徐さんは3年前に亡くなっていました。徐さんは戦後、大変苦労されたそうです。日本の会社で通訳をしていたため、「文化大革命」の時、「日本人通訳徐集川」と書いた札を首にぶらさげられ、糾弾されました。針金でできた首の傷は生涯消えなかったそうです。

徐さんのお墓に参り、「ありがとうございました」と手を合わせました。不思議なことに、父と徐さんは同じ年に亡くなっていました。今ごろ2人は向こうで笑ってお酒を飲んでいることでしょう。

広島や長崎では被爆者が語り部となり、若い人に二度と戦争をしてはいけないと伝えています。私も漫画で語り部になれたらと思うんです。悲しい記憶と、じいさん漫画家の日常を交え、「ひねもすのたり日記」（ビッグコミックを連載しています。（つづく）

毎日新聞（2018年10月10日付）より転載

記者の目

井上 卓弥
東京学芸部

［北朝鮮 消え行く日本人の歴史］

「棄民の悲劇」知ってほしい

戦前の国策で旧満州（現中国東北部）に送られた満蒙開拓団の実態を伝える資料の保存と公開を国に求めた9月28日の「記者の目」に深い共感を覚えた。敗戦直前、侵攻したソ連軍の標的となり、開拓団員約27万人中3割の8万人が命を落とした。集団自決を伴う悲劇は残留孤児の帰還などを通じて知られているが、十分な資料は公開されず、一部は廃棄されたという。

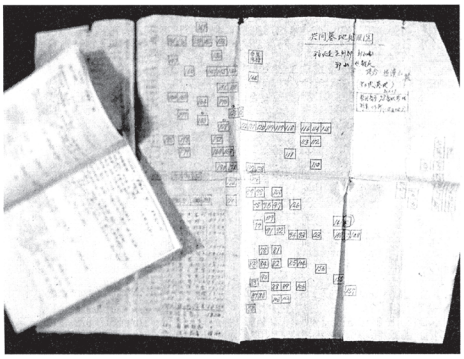
敗戦後の飢餓で3万人以上死亡

その一方で、敗戦後に起きたこれに次ぐ規模の日本人の悲劇がほとんど知られることなく、歴史から消え去ろうとしているのをご存じだろうか。死者数3万4600人。場所は朝鮮半島北部、つまり現在の北朝鮮の領域である。

△昭和二十（1945）年八月十三日清津に上陸して北朝鮮に進入したソ連軍は、その後、北緯三十八度線において南、北朝鮮の交通を遮断した。このため北朝鮮に在住していた日本人及び南満洲から北朝鮮を経て日本に向っていた約七万人に及ぶ一般邦人は、北朝鮮の各地に滞留するのやむなきにいたった▽。旧厚生省「引揚げと援護三十年の歩み」はこう記している。

当時、北朝鮮在住の日本人は約25万人。旧厚生省の記録にある満州からの南下者7万人を加えた約32万人のうち、1割超が翌年春までの越冬期に死亡した。満蒙開拓団と同様、戦火にさらされた北朝鮮の北東部、満州からの避難者が殺到した北西部の死亡率は特に高く、2～4割にも達していた。

私の家族も山形県から満州に移住し、敗戦前後の混乱で死線をさまよった。祖父母は開拓団とは関係なく、自らの意思で大陸に渡ったが、敗戦前の根こそぎ召集で兵隊にとられた祖父と切り離され、祖母は子供4人を連れて朝鮮北部に逃れた。間もなくソ連軍が進駐し、収容施設には深刻な飢餓と伝染病がまん延。叔父にあたる4歳の末子は翌46年3月、栄養失調からくる小児結核で死んだ。避難者、死者の多くは女性と子供だった。



北朝鮮北西部の仮埋葬地に葬られた日本人死者の墓所の見取り図と、引率者による記録

日本政府はポツダム宣言受諾にあたり、軍人の復員を優先する一方、海外の民間人には「棄民」と呼ぶべき政策を象徴する「現地定着方針」を発し、救護策を講じず戦勝国に丸投げした。この間、朝鮮半島の分断につながる米ソ対立が激化していく。米軍政下の南部穀倉地帯から食糧の搬入が進まず、北部への支援団体の入境はソ連軍に阻まれた。抑留された日本人の惨状は国際的に認知されず、日本国内でも史実として定着しないまま、現在に至っている。

46年春以降、38度線を徒歩で越え、南部に脱出した人々の多くは帰国後、地獄のような体験を語らなかった。「やせ細った幼子に与える乳が出ない」「息絶えた子の体から、新たな寄生先を求めてシラミの群れが這い出してきた」。そんな背筋も凍る光景が至るところで見られた。ソ連兵による暴行も絶えなかった。

祖母が残した手記から惨状の一端を知った私は、家族を含む避難者を引率した旧満州国官僚の方々と巡り合い、全体のごく一部ながら、北西部で越冬した日本人1000人余の詳細な名簿や記録を得て、戦後70年の節目に記事や書籍にまとめた。全国から100件近い反響が寄せられ、高齢の体験者や関係者がなお少なくないことを痛感した。

直接、話をうかがった方もいる。北東部の鉱業地帯で3歳と1歳の兄弟を亡くした失意の両親の足跡を調べる70代の男性は「満蒙開拓団の悲劇を伝える民間施設が長野県内にできましたが、本来、犠牲を強いた国が公的な施設を東京につくるべきではないでしょうか」と問いかけた。満州から北西部の平壌に避難し、収容所で弟2人をみとった80代の女性は「日本には満州や北朝鮮に眠る肉親のことを語れる場さえありません」とやるせない思いを吐露した。

北朝鮮で亡くなった日本人は、全土に散らばる約70カ所の仮埋葬地に眠っている。しかし、国交がないことが障害となり、戦没者遺族の高齢化を背景に一昨年施行された「遺骨収集推進法」の対象地域からも外されたままだ。

拉致優先の政府 遺骨収集「ゼロ」

戦後73年の現在に至るまで、日本政府の主導で収容された遺骨「ゼロ」という事実は北朝鮮という地域の特殊性を物語る。中国残留孤児を思わせる約1000人の残留日本人が北朝鮮にも存在し、今も生存者がいる可能性などは話題にさえならない。

それは、20年ほど前に明るみに出た日本人拉致問題が重い蓋になっているからでもある。拉致被害者の帰国は一刻も早く実現させねばならない。しかし、2002年10月の5人の帰国以降、「拉致問題が最優先」と繰り返す現政権の下でも進展は見られない。

塩漬けにされた拉致問題の下で、敗戦後の日本人の歴史はすっかり埋もれている。数年前「北朝鮮を利する」との批判を浴びながら、民間ルートで数度の墓参が実施された背景には、国の支援を得られない遺族らの無理からぬ事情があった。そして今、「棄民の悲劇」は消し去られようとしている。遺族や関係者は政治の重しをかぶせられて、まさに、なすすべもなく立ちすくんでいるのだ。その重い現実を、拉致問題に心を痛める方々にもぜひ知ってほしい。

2018・10・10

朝日新聞（2018年5月28日付）より転載

戦友ごと僚船撃沈■特攻、出撃できず生き残る

3395人動員の法政大 冊子を作成

太平洋戦争末期に、学業を中断させられて軍隊へ召集を受けた元学徒兵ら45人の証言集を、このほど法政大学（東京）が6年がかりでまとめた。戦友の最期、特攻の生死の分かれ目、軍隊内の理不尽な暴力など、70年以上を経た今こそ後世へ残したい逸話を収録した。

左法政大学が6年がかりでまとめた元学徒兵の証言集左大学で開かれた壮行会の後、日の丸のたすきを掛けて皇居前を行進する法政大学の出陣学徒ら。後ろは楠木正成像＝1943年10月15日

学徒兵の声 後世に

学生が戦地へ送られた事実を本人の語りで伝えようと、2012年度から調査していた。元学徒兵42人をはじめ、勤労動員の体験者や、特攻隊員の身の回りの世話をした女性の回想も加え、3月末に発刊した。証言者は調査時88～95歳。証言集の完成を待たず、すでに11人が他界している。

語られた軍隊体験は多様だ。海軍航空隊員になった島崎晃（あきら）さん（故人）は、輸送船で南方へ送られる際、僚船が敵の魚雷攻撃で次々と沈没する光景を眼前にした。裂けた船体は水面に直立し、戦友を道連れに海中へ消えた。「助けられないんですよ。止まったらこっちがすぐやられますからね」。12隻の船団で、無事だったのは4隻のみだったという。

敗色が濃くなるなか、学徒動員は1943年10月から本格化。法政大では計3395人が学徒兵となり、卒業生と在学生の戦死は判明分だけで694人。うち40人が特攻死という。

海軍の飛行士になった小川昇（のぼる）さん(95)は、特攻隊に志願し、出撃を待っていた。ただ45年7月、茨城県の百里基地にあった搭乗機が米軍の機銃掃射で炎上、鹿児島の出撃基地へ行けなくなって終戦を迎えた。仲間は次々と出撃し、一緒に訓練を受けた第14期飛行専修予備学生は主に特攻で411人が戦死。「本当に際どいところで生き残った」と振り返る。

一方、伊藤喜美（よしみ）さん（故人）は、陸軍の配属部隊から、諜報（ちょうほう）員を養成する中野学校へ送られた。門に校名はなく、「逓信省気象研究所」とあった。「国籍返上異議なし」とする書面に署名させられ、謀略工作の訓練を受けた。「危なかったら捕虜になり、（相手に協力したふりをして）逆スパイをやれ」と教えられたという。

社会のエリート候補とみられがちな「学校出」は、軍隊内でにらまれた。航空部隊でエンジン整備をした行待（ゆきまち）明夫さん(96)が「死んだやつもおりますからね。リンチで」と語るように、何かにつけて殴られたとする回想も多い。

四国の松山市には特殊潜航艇「蛟竜（こうりゅう）」部隊の駐屯地があり、近所の金行（かねゆき）節子さん(94)は母と一緒に隊員の世話をした。部隊員の法政大生が、心に秘めた初恋の相手だった。母は「子どもを、何でこういう戦争に引っ張り込むんだろうか」と、嘆いていたという。

大学史センターで聞き取りに携わった古俣（こまた）達郎さん(36)は「今後は、戦死した方々が家族や友人に残していった『声』を掘り起こすことが課題となる」と話している。（編集委員・永井靖二）

朝日新聞（2018年10月4日付け）より転載

ひと

旧満州からの日本人引き揚げを描いた中国人画家

王 希奇（ワン シーチー） さん(58)

「絵の中の彼らを、ふるさとに送り返すことができてうれしい」

旧満州の葫蘆島（ころとう）（現・中国遼寧省葫蘆島）から戦後の混乱の中で帰国する人々を描いた「一九四六」が、舞鶴引揚記念館（京都府舞鶴市）で12月2日まで展示される。

東洋の墨絵と西洋の油絵を融合させた独特の画風で三国志や国共内戦を描き、高い評価を受けてきた。日本人の苦難をテーマに選んだきっかけは8年前。母親の骨箱を抱えた子供らの写真を、ネット上で偶然見つけた。

葫蘆島に近い遼寧省錦州の出身。幼い頃に聞いた、日本人の引き揚げの話を思い出した。

日本による侵略被害を強調する中国では、日本側の被害の歴史は敏感なテーマ。「敵国の子じゃないか」と迷った。だが1年間、子供たちの姿が頭に浮かび、声が聞こえる感覚にとらわれた。「彼らも戦争の被害者」と思い立ち、歴史を調べて制作を始めた。

「自分も引き揚げ者の行列にいる」ような意識になるほど没頭し、3年半かけて完成。横20㍍、縦3㍍の画面の中で乗船を待つ約500人の老若男女は、探し集めた写真の人々がモデルだ。

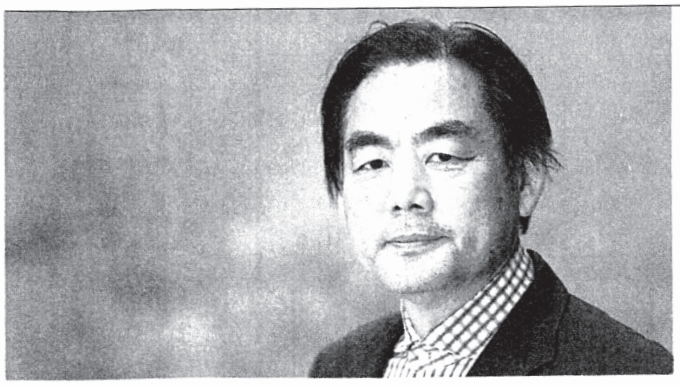
舞鶴の高校生への講演で「戦争に勝者はいない。今の平和をみんなで守らなければいけない」と語りかけた。次のテーマはユダヤ人。共感と慈愛のまなざしは、国境も歴史も超えていのちを見つめ続ける。文・平賀拓哉　写真・樋谷綾二

朝日新聞（2018年10月26日付）より転載

ひと

戦時の性暴力を描く映画「太陽がほしい」で受賞を重ねる

班 忠義（パン チョンイー） さん(60)



「太陽がほしい」。日中戦争中、真っ暗な部屋に監禁されて旧日本軍兵士に強姦（ごうかん）された中国人女性が発した言葉だ。監督として、そんなタイトルのドキュメンタリーを撮り、戦時の性暴力被害を受けた彼女たちの人生を描いた。

当時を知る元日本兵5人も登場する作品は今年、アムステルダム国際フィルムメーカー映画祭など海外の映画祭で四つの賞を受けた。「事実を知ってほしい。人間性を失うのが戦争です」

中国遼寧省生まれ。14歳のとき、大陸に残された中国残留婦人に出会い日本語を習った。日本の映画に魅せられ、29歳で日本に留学。残留婦人の支援活動をした。

1992年、集会で旧日本軍から性暴力を受けたという中国人女性の証言を聞いた。現地を訪ねると、心身に傷を負い、中国政府からも顧みられず衣食住に困る女性たちがいた。以来、日本で寄付を募り、生活・医療費を毎年、届ける。9省約100人を支援した。

寄付者への報告のために始めた撮影が20年に及んだ。いまは広島県に住む。資金はない。日本人の妻子らに支えられ、約800人のカンパで映画を完成させた。

日本人である残留婦人と中国の性暴力被害者。国を超え、戦争が女性に犠牲を強いる歴史を見据えてきた。「今後も社会が無視あるいは忘れたいと思っている闇に光をあてる仕事をしていきたい」

文・大久保真紀　写真・角野貴之

中国語の絵物語『鑑真和尚』に想う

陳　寛

先月、上海人民美術出版社 1981 年 4 月第 3 版の絵物語『鑑真和尚』を手にした。『李白』・『白居易』・『王安石』等歴史的人物を主人公にした絵物語中の一冊だ。縦 9 ㎝横 12 ㎝厚み 0.4 ㎝の小型サイズもので、簡単に見終えられるのだが、目を患っていた私は、小文字を嫌って見ようともしなかった。8 月中旬の施術後に、視力が落ち着いてきた 9 月半ばのある日、何気なく『鑑真和尚』を手に取ってみた。読み始めるや一気に読み進み、日本留学僧栄叡が亡くなった件を読むに至っては知らず識らず熱い想いが込み上げてきた。

実を言うと私は 1980 年 4 月、今は亡き中国佛教協会会長趙樸初氏の下でご縁あって唐招提寺 81 世森本孝順長老の「鑑真和上坐像お里帰り展」に参加して秘書兼通訳を務めること前後一月半。この間、鑑真和上像に対して“生きておわすがごとくお仕えする”　長老の真摯なご様子を目の当たりにし深く感銘を受けていた。翌 5 月 11 日長老と二人で北京から広州へ飛び、広東省肇慶市の小山にある『日本入唐留学僧　栄叡大師記念碑』に御参りした時のことだ。“参るのが遅すぎました！　長い間異国にお一人で寂しい思いをさせてしまった御無礼をどうぞお許しください…”と両手を地について嗚咽が漏れるほど涙された森本長老のお姿が脳裏に浮かんだのだ。

森本長老が 1978 年 10 月唐招提寺を訪れた鄧小平氏の快諾と同意の下、その 1 年半後ついに積年の悲願であった「鑑真和上像お里帰り」を達成されことは　対日関係の仕事に携わっていた私には昨日のように思え、当時の盛況がまぶたに浮かぶが、鑑真和上が 11 年もの艱難を経て、両眼の失明に至るも 6 度目にしてようやく日本に辿り着き、戒律の伝授・経典の講釈・仏堂建築・薬草鑑別・疾病治療等に身を投じられたことは、今の若者にはさほど知られていないのではないか。こんな思いを抱き始めた私は、日本語の学習材料にと和訳を始めた。完訳後は、この絵物語に日中二か国語を添えれば、学習の材料となり、同時に日中文化交流の偉大な先駆者である鑑真和上の功績が再認識されるのではないかと思うに至った。私のこの考えには京都壬生寺貫主松浦俊海師（唐招提寺第 85 世元長老）と奈良唐招提寺第 88 世現長老西山明彦師ほか多数の方々の御賛同を戴いており、目下本書の出版社である『上海人民美術出版社』に二か国語同時出版のためのご協力を懇請しているところである。

本年は日中平和条約締結 40 周年という記念すべき年である。現代に生きる私たちは、日中友好と文化交流の偉大なる先駆者鑑真和上に学ばなければならない。この訳書が出版されて少しでも読者のお役に立つ事になれば幸いである。

2018 年 10 月 6 日　鑑真和上の命日の日に

（ちぇん・くわん女史：1940 年東京で生れる。本籍台湾。高校卒業後大陸に渡る。1964 年北京廣播学院（現中国傳媒大学）卒業。中国対外友好協会・石炭工業省で対日関係の仕事に従事。1990 年退職後来日。1992 - 2007 年福井大学・福井医科大学で教鞭を執る）

中国語絵物語『鑑真和尚』の表紙

鑑真は日本の留学僧・栄叡（ようえい）の亡骸に向かって「あなたの願望を必ず果たします」と誓っている場面

古代における渡来人の活躍

――拙著『ディアスポラ、高麗（こま）への道』刊行に寄せて――

岩下　壽之

■自著『ディアスポラ、高麗への道』について

先月（９月）、『ディアスポラ、高麗への道』（鳥影社）を刊行した。「遣唐使三部作」の最終巻『定恵、百済人に毒殺さる』を上梓してから三年ぶりである。この間、古代朝鮮への思いは増幅し続け、ついに今回は「渡来人」と呼ばれる古代の朝鮮半島からの移住民、亡命者を「ディアスポラ」の視点から明らかにすることにした。論じるのではなく描き出すことにしたのは、史料の少ない古代の生活を再現するには「小説」という形が最もふさわしいと思ったからである。この点ではこれまでの創作活動の継承でもある。

今回の作品『ディアスポラ、高麗への道』は歴史小説と私小説を融合した「歴史私小説」ともいうべき新しい工夫を凝らしている。これが成功したかどうかは読者諸氏の判断を待つしかないが、従来の歴史小説が置き去りにしていた作者の内面を同時に解明したいという欲求を捨てがたく、時空の枠を取り払い、大胆な構成のもとにその両者を結びつけようと図った。歴史上の人物である高麗王若光（じゃっこう）を追い求めつつ、追い求める「私」はいったいいかなる存在なのかを究明したかったのである。

高麗王若光は古代の東国において「高麗（こま）郡」を建郡した（７１６年）際の実質的なリーダーだったと思われる高句麗出身の王族である。列島に渡って来て二年後に祖国は滅び、倭国への残留を余儀なくされた。埼玉県の日高市にある「高麗神社」はこの若光が祭神であり、代々高麗家が宮司を務めて現在六十代目である。東国は渡来人が開いたと言ってもいいぐらい半島からの渡来人が多く住み着いた地域である。高句麗出自の「高麗人（こまびと）」だけでなく、百済や新羅からやって来た人々も大勢いた。彼らは進んだ文化を古墳時代の日本にもたらし、畿内だけでなく、東国に移配されて遅れていた東国の開発、文明化に大きな貢献をした。漢字、儒教、馬、鉄、養蚕、須恵器等の先進文化はいずれも半島からの渡来人が列島にもたらしたもので、わが国の古代の文化や政治は渡来人なくしては成り立たなかった。

このような渡来人、特に高句麗出身の「高麗人」に私が惹かれるのは、６６８年に滅亡した高句麗の都が平壌にあり、この地で私の父が戦病死しているという事実に図らずも思い至ったからである。「戦病死」」とはいっても実際に戦って死んだわけではない。大連に

住んでいた私の一家は終戦の１９４５年の１月に母が現地で病没し、四か月後には銀行員だった父が「根こそぎ動員」で応召、そのまま還らなかった。四十歳の父が極寒のシベリアでひと冬越し、翌年病弱者として北朝鮮のソ連軍収容所に逆送され、そこで死んだことは、戦後三年経った引き揚げ先の長野県佐久で知った。遺骨はむろんない。が、この収容所からの生還した日本人たちは戦後落ち着いてから戦友会を組織し、収容所の実態を丹念に掘り起こして一書にまとめた。私の父は逆送された同年９月２８日に死亡したことが「戦病死公報」に明記されている。コレラの集団感染の犠牲になったらしい。享年四十一歳だった。

■古代の日朝関係

半島からの渡来人の流入は、今の状況から論じるとおかしなことになる。古代には国境という概念はなく、人々は自由に他郷、他国と往来、移住していた。日本海は「北ツ海」と呼ばれ、朝鮮半島と列島との間に横たわる内海のような存在で、現在の山陰、北陸は大陸との主要な交通ルートだった。日本海沿岸は「裏日本」どころか当時は「表日本」で、太平洋側はわずかに伊勢から相模に通じる沿岸航路があるにすぎなかった。

縄文時代初期（４世紀）からすでに大勢の渡来人が列島に来ているが、彼らにとっては「他国に行く」という意識ほとんどなく、より生活のしやすい場所を求めての国内移住のような感覚だった。半島の南部沿岸には百済、伽耶（小国分立、「加羅」とも。５６２年に新羅が併合）、新羅などの王国が成立していたが、住民は政治的な枠組みからは比較的自由で、国外への移住も制限されているわけではなかった。同様に半島の南部沿岸には日本人（「倭人」と称した）も大勢移り住んでおり、「北ツ海」を囲んで同一の文化圏を形作っていた。（近年、旧百済地方で日本独自の小型の前方後円墳が十数基発見されたが、列島から移住した現地の倭人高官らのものという説が有力である。）

現代史には「政経分離」という言葉があるが、古代の東日本は完全な「政文分離」で、政治と文化は別次元の出来事だった。日本と新羅は政治的には仲が悪い時期が多く、日本は新羅を朝貢国にしようと何度も出兵しているが、民間人はそんなことにはお構いなく自由に「北ツ海」を渡って往来していた。正式な国家使節は筑紫の大宰府を窓口としたが、民間人は対馬海流に乗って山陰から北陸の「津」に気軽に上陸した。日中間には東シナ海が横たわっていたので航海技術の未熟な民間人には往来は難しかったが、朝鮮半島からは対馬を挟んで列島は指呼の間にあったので、さしたる困難もなく到着できた。

半島からの渡来人は５世紀の応神・仁徳朝から雄略朝前後の６世紀前半に最盛期を迎える。また、半島が動乱に包まれる７世紀後半には百済や高句麗の滅亡もあって亡命者が大

勢列島に押し寄せる。５～６世紀の渡来人は「今来の才伎」と呼ばれ、先進技術や知識を有する人々が多かった。そうでなくても朝鮮半島は日本より数段上の文化、文明の先進国だった。それなのになぜ後進国の列島に移住して来たのかは謎の部分が多い。祖国の戦乱（小紛争）を避けるため、飢餓や飢饉から逃れるため、気候温暖な南方に古代中国の徐福伝説に見られるような「蓬莱島」を夢見た道教の影響など、いろいろな説がある。が、私見では「倭人の寛容性」にその根源があるような気がする。むろん、当時の日本人にとっては新技術や新知識は国家発展に欠かせなかった。が、そんな実利的な目的以外に、「去る者は追わず、来る者は拒まず」式のおおらかな民族性があったのではないかと思う。

■古代における東国

東国とは現在の関東地方よりやや広く、今の山梨県まで含む。この地方は朝廷のある大和から見ると僻遠の地で、その支配が間違いなく及んでいる東の果てだった。東国から北は陸奥（東北地方東部）、出羽（東北地方西部）の国で、「蝦夷」と呼ばれる異民族の住む地で、形式的には大和政権に属したもののなかなか臣従せず、服属させるのに苦労した地域だった。

東国の中心地は上野（現・群馬県）、下野（現・栃木県）で、信濃から東に伸びた東山道がここを通って常陸の国（茨城県）へと続いていた。東海道は相模の国から三浦半島に延び、走水（現・浦賀水道）を渡って上総の国へとつながっていて、現在の東京（東京湾西部）は含まれていなかった。東海道は一部海の中だったのである。現在の東京都と埼玉県を含む武蔵の国は東国でも最も開発の遅れた地域で、特に南武蔵は海辺は湿地帯、内陸はいわゆる「多摩の横山」が東西に這っている人の住めない原野だった。武蔵の国は東海道ではなく東山道に属し（律令時代の「畿内七道」の七道は国道だけでなく、行政区域も表していた）、東海道に移管されたのは奈良時代の後期になってからである。武蔵の国の国府は現在の東京都府中市にあったので、後に東山道から分かれる「武蔵路」が作られ、準国道扱いになった。

この東国と呼ばれた地域は都人にとっては異界同様の未知の国々だったが、上毛野氏や下毛野氏といった在地の古い豪族たちは早くから大和政権に服従し、東国支配の現地の元締め役として活躍した。その地位はやがて「国造」から律令期の「郡司」に格上げされたが、新制度に不満を持つ旧国造系の豪族の反乱は奈良時代以前にはしばしば起こっている。また、陸奥における蝦夷の反乱は日常茶飯事で、そのたびに中央から討伐軍が派遣され、そのための物資や人員の提供を余儀なくされた。東国はこの東北地方の蝦夷征服に欠かせない物資と人員の兵站基地として重視されたのである。

７世紀後半の朝鮮半島での戦乱は大勢の亡命者や移住者を列島にもたらした。畿内に収容し切れなかった朝廷は積極的に彼らを地方に、特に東国に送り込んだ。広大な平野を抱えてまだ未開拓地の多かった東国は、開墾のために大勢の入植者を必要としていた。渡来人は灌漑土木には優れた技術を持っており、鉄や馬の生産にも秀でていた。彼らの技能は東国開発に役立っただけでなく、朝廷の蝦夷対策でも重要な役割を担い、一石二鳥の効果を生み出す黄金の卵だった。

当時の東国にどれほどの渡来人が住み、東国全体の人口に占める割合がどれぐらいだったかは不明だが、「国」を構成していた「郡」の数、「郡」を構成していた「郷」（初期は「里」）の数は判明している。一郷は５０戸からなり、一戸は平均１５名である。渡来人の郡は高句麗滅亡（６６８年）後間もなく甲斐の国に「巨麻（こま）郡」、また、奈良時代初めには上野の国に渡来人を中心とした「多胡（たご）郡」を作り（７１１年）、武蔵の国の入間郡を割いて「高麗郡」を置いた（７１６年）。奈良時代中期には武蔵の国に「新羅郡」も出来た（７５８年）。これらから見ても東国各地には渡来人が大勢住んでいたことは明らかである。百済人や新羅人、高句麗人を東国に移配したという人数付きの記事は『日本書紀』と『続日本紀』だけでも１２か所出て来る。東国は古墳の宝庫でもあるが、そこからも渡来人の存在を窺わせる器物がたくさん出土している。「東国は渡来王国だった」という言葉もあるぐらいで、漢字を使いこなせた渡来人が初期の中央政界でも活躍したことと合わせて、古代の日本文化は渡来人なくしては成り立たなかったと言っても過言ではない。

■古代から現代への警鐘

ひるがえって現在の東アジアの情勢を見てみよう。第二次大戦後は欧米流の近代国家理念がアジアにも持ち込まれ、国家という強固な単位が国民を縛り、自国優先が至上命令となった。国家は隣国との国境を明確にし、国民たるものの資格を規定し、国籍という名の戸籍を作り、一人一人が気軽に移動し、どこにも住めるという居住の自由を厳しく制限した。このような国家第一主義は等しく近代の所産であり、そこから生まれた国境や国民、国籍といった人工的で作為的な枠組みが古くからある伝統的な価値や理念を追い払ってしまった。文化の基盤となる言語や宗教さえ国家管理に委ねられ、固有の制度や風俗、習慣が弱められ、または衰微していく過程をいま我々は日常的に目にすることができる。

これは果たして文明の進歩だろうか。前述したような古代おける「北ツ海」を挟んだ日朝両民族の自由な移動は、現在では想像すらできない。あのころは人々は「人間」として平等対等であり、どこにどうやって住もうと「公」の干渉を受けることはなかった。国家らしきものはあったが、それは人々の自由を制限するものではなく、徴税という国家財政

確立のための戸籍の役割しか持たなかった。東アジアは完全なボーダーレス社会で、政治上の対立はあっても民間人は自由に海を渡っていた。亡命や難民は珍しくなかったし、彼らを不当に差別したり追い払ったりということもなかった。人種や民族の違いは全く問題にならなかったのである。今よりはるかに人間の尊厳が重んじられていたと言ってもよい。人間である限りどこでどうやって住もうと自由であり、困窮した人間には救いの手を差し伸べることはごく当たり前の行為だった。

昨今の国家優先、自国第一主義がもたらした弊害は、ヨーロッパの難民問題、アジアの国家権力の肥大化と独裁化、移民の国であるアメリカ合衆国における人種差別問題等の深刻な問題を生み出している。「近代の行き詰まり」とよく言われるが、これは自ら求めた理念から手痛いしっぺ返しを食らっているようなものである。「現代の混迷」の責任は文明化された人間そのものの側にある。組織は放っておくと無限に肥大化する。現代の国家が抱えている内憂外患は、実はこの肥大化しすぎた組織や制度のもたらした負の遺産である。さまざまな桎梏や束縛のもとで人々は息苦しさを感じている。それを合法的に解消する手段が見い出せなくて、過激な思想や行動に走る。人々の生活は昔に比べれば確かに豊かになった。が、まだまだ貧困にあえぐ人々は億の単位で地球上に存在する。富の偏在は社会不安を生み出している要因の一つであり、これの解消こそ現在の国家が最優先して取り組むべき課題である。しかし、それ以上に大事なのは往来の自由、行動の自由、居住の自由といった基本的人権の超国家的な保障である。

古代、家族は別にして、人間の社会的な生存に欠かせない最小単位は民族だった。各民族は固有の言語と宗教を持ち、その間に優劣の差はなく、互いに尊敬し合っていた。国家権力といえどもそれに干渉することはなく文化は政治権力の埒外にある絶対的な価値を有する〝生活そのもの〟だった。民族の移動や混住によって自然淘汰的に言語や宗教が衰え消滅することはあっても、国家権力が掣肘（せいちゅう）を加えることはなった。が、現代ではこの古代の叡智ともいうべき不文律があちこちで脅かされている。古代を学ぶことは、真の平和はどこから来るかを考える貴重なヒントを与えてくれる。

（いわした・としゆき：1939 年、豊中市で生まれる。幼年期を大連、少年期を長野県佐久市で過ごす。高校教員を経て 2000 年から中国の大学で日本語教師を務める。『大連だより―昭和十六年～十八年・母の手紙』など大連三部作で第 17 回山室静 佐久文化賞を受賞）

方正（ほうまさ）日本人公墓が私たちに問いかけるもの

――「方正友好交流の会」へのお誘い――

1945 年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府よって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない 1963 年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ４５００人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400 数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も 1984 年に建立され、この方正の地にあります）

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、民衆レベルでの国際的な友愛精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は１９９３年に設立され、２００５年６月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員　一口　１,０００円　　団体・法人会員　一口　１０,０００円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６（社）日中科学技術文化センター内

電話　03ー3295ー0411　FAX 03―3295－0400　E-mail：ohrui@jcst.or.jp

郵便振替口座番号　00130―5―426643　加入者名　方正友好交流の会

HP アドレス：http:/www.houmasa.com/

≪報告≫　　　　　　　　ありがとうございました！

前号の会報 26 号入稿後、2018 年 4 月 27 日以降にカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受取った順に記載しました。2018 年月 12 月 5 日現在)

村杉正洋　林郁　川合継美　渡辺保雄　NP0 法人みんなの家・奥田俊夫　篠田欽次
遠藤勝男　山内良子　榎戸吉定　清嶋一順　野田尚道　肥後茂樹　芳村晶好　伊藤すみ江
伊藤眞理子　近藤喜一郎　佐藤喜作　遠藤滋　田澤仁　新宅久夫　竹井成範　渡辺一枝
丸山竹嘉　下山田誠子　亀山英雄　石橋辰巳　神田秀一　小倉光雄　松島赫子　杉山秀子
㈱大可国際医療グループ　中村静枝　高田京子　NPO 法人中国帰国者・日中友好の会
鵜沢弘　宮本アジア研究所　鈴木敏夫（杉並）加藤毅　石田和久　依田高明　手塚登士雄
茅原占三　篠原國雄　野崎朋子　江藤昌美　木村護郎クリストフ　藤原作弥　田村正篤
篠原淳子　小関光二　高橋守男　金成敬子　藤原敏子　小出公司　広田彰夫　及川淳子
木村美智子　島隆三郎　鈴木幸子　小坂井和夫　樋口貴毅　佐藤千栄子　矢吹晋　千島寛
高橋健男　光川澄子　十時哲哉　加藤文子　鈴木春夫　中澤道保　杉田春恵　慈氏周豊
藤村光子　名取敬和　望月信隆　芳賀英吾　阿石定子　小林淨子　木戸冨美江　寺本康俊
久保和男　町田忠昭　田中正昭　大浜敏夫　松本莉恵　末広一郎　初岡昌一郎　丹野雅子
加藤まり子　掛谷敏男　松村満美子　槿澤仁　山内るり　近藤耀子　藤井盛　小池イヨ子
乃村晃　さいたま市大宮日中友好協会　鳥島せい子　姫田光義　矢野光雄　柳瀬恒範
牧野八郎　新谷陽子　岩間孝夫　矢島敬二　芹澤昇雄　山川梅子　貞平浩　黒岩満喜
西嶋拓郎　高嶋正文　千田優子　富田恵子　野田邦雄　内山則男　藤勝徳　山口直樹
毛利孝雄　田篭千代吉　永沢利一郎　阿部則司　大里浩秋　妹尾富澄志　橋本聰　川北至
田平正子　宮城恭子　村田吉隆　永山峰子　野中酉夫　栗原彬　上西隆全　甲斐国三郎
佐々木啓之　横井幸夫　田中佐二郎　中井詔太郎　土川克広　湯本信幸　名取敬和
岡本洋子　中島茂

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

書籍案内を兼ねた編集後記　大類善啓

『滿洲分村移民を拒否した村長 佐々木忠綱の生き方と信念』大日向悦夫著

周知のように滿洲への移民は国策として進められた。とりわけ、ある時期からは村などの地域単位で滿洲へ渡る「分村・分郷」という形で進行していった。国や県などが市町村などに対して移民させる人数を割り当て、半ば強制的に渡満させた。

国家の政策に逆らうことなど、戦前の帝国主義的な国家体制でできるだろうか。戦前において、国の政策に反旗を翻すということは、自分の地位どころか、場合によっては命と引き換えになることだってあるのだった。ところがここに、自らの良心に基づいて分村を拒否した村長がいたのだ。その名は、佐々木忠綱という人である。近年、分村計画を拒否した村長がいた、ということは聞いていたが本書は、その人、佐々木忠綱の生き方と信念を明らかにした。

長野県下伊那郡大下条村（現在、阿南町）の村長として、滿洲への分村移民を県政府から迫られた佐々木は、滿洲農業移民地視察団に参加して現地を見た。そこで見たのは、耕

地と言われるものが中国人たちを追い出したものであること。そして「日本人が中国人を見下ろしている」現実だった。

妻てるは、「あまり分村が気がすすまないならやめたほうがいい」と言い、また「自分の身内を送れない所へは、他人を送れないじゃないですか」と夫を勇気づけたようだ。ともあれ、知られることが少なかった男の姿を正面から見据えた高著である。

（発行：信濃毎日新聞社、電話 026－236－3377　FAX026- 236-3096）

『あれから七十三年　十五人の戦後引揚体験記　旧満洲七話、朝鮮半島七話、台湾一話

｛編纂｝引揚げ港・博多を考える集い　｛監修｝堀田広治

本誌の読者なら満洲引揚体験記は何篇か読まれた方が多いだろう。本書では一話しかないが台湾からの引揚体験を紹介しよう。秋吉任子さんは、台北一中の英語教師として昭和13（1938）年３月赴任した父とともに台湾の台北に移住した。幼少時は、「欲シガリマセン、勝ツマデハ！」とか「デマニ乗リ、デマヲトバセバ君モ敵！」などというスローガンを毎日言わされていたという。

日本の敗戦を境に台北の町の様子が一変した。秋吉さんは、国民学校へ集団登下校の途中、物陰から礫が飛んでくるのだ。時には「ニッポンコロ！」と小さく叫ぶ子どもの声がした。「戦時中＜チャンコロ！＞という中国人に対する蔑称があり、私は両親に注意されていて使ったことがなかったが、この一言と礫の多さに、恨まれていることを子ども心に感じた」と記している。

台湾からの引揚げは、大陸に比して被害が少なく、台湾の植民地政策が良かったのだというふうに解釈されてきたように思えるが、やはり現地の人々を見下ろし、台湾の人々も日本を快く見ていたわけではない、ということがよくわかる。他に 14 編の引揚記があり、それぞれひとり一人のドラマが語られていて庶民の戦争体験として読み応えがある。

（発行：図書出版のぶ工房　810－0033 福岡市中央区小笹 1－15－10－301
電話 092－531－6353　郵便振替 01710－7－43028）

・・

本会の事務局がある一般社団法人日中科学技術センターが創立して 40 周年を迎え、その記念行事が 11 月 19 日に学士会館で行った。その折り、方正の総会で講演をいただいた姫田光義さん、また寄稿していただいた大門高子さんたちの「再生の大地」合唱団の歌声を参加者に聴いていただいたが、「感動した」という声が寄せられ、お呼びした私も嬉しかった。この記念行事のためもあり多忙を極めていたが、なんとか 27 号を発行できた。原稿の最終チェックでは、方正の総会で司会を務める森一彦さんを二日間煩わした。今号も力作揃いではないかと思っている。寄稿していただいた方々には改めて御礼を申し上げたい。旧満州からの引揚げ者は益々減ってきている状況である。今後も更に原稿をお寄せいただきたい。書くのは苦手だという方、編集部宛てに手紙を書く要領で送ってほしい。

≪表紙写真撮影：大類善啓≫

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第 27 号）2018 年 12 月 16 日発行
発行：方正友好交流の会　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町 3－６　日本分譲住宅会館　４Ｆ
(社)日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会